
D i s t o r t S l e i g h t

荒也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Distort Sleight

【Nコード】

N7675C

【作者名】

荒也

【あらすじ】

少女は死神の背中を見ながら、戦場を駆る。少年は不幸を一身に背負い、孤独の道を行く。それが故に、悲劇。

起章：一話（前書き）

紹介文の通り、悲劇、バッドエンドです。それとグロ・暴力表現要注意。

起章：一話

1

ごとごとと、不規則に揺れるトラックの荷台からは、死屍累々の荒野が見える。荒れ廃れた土地は、いかにも今からの絶望を予感させて、若い兵士達の苛立ちをさそった。

枯渴し、草も生えていないような大地は死を孕み、転々と横たわる死人を抱く。どうにも見ていて吐き気のするような光景が、眼下に。また走っていくトラックの周囲に広がる。行く先では先行した部隊がきちんと塹壕を掘ってくれているだろうか、あるいはもう敵に殲滅されているのではないかと、謂れの無い不安ばかりが募っていく。

激戦区の景色は、こんな生ぬるいものではないだろう。この凄絶な景色を生ぬるい、と形容することに、多少の抵抗を感じはするが。「あんたはどんな気分なわけよ？」

唐突に響く、底抜けに明るい少女の声。これもまた周囲の兵士を苛つかせる。少女の傍らに居た男は何も言わず、小さく頭を左右に振った。その動きに合わせて、角度によって蒼く見える銀の髪が、流れた。

彼女は相棒である彼がどうしても喋らないのが不服なのか、むつと顔をしかめる。

意志の強そうな金の目が、口よりも雄弁にその心情を語っているようだった。

「なんか言えつての」

ああ、もう頼むからそれ以上はよしてくれ。

兵士達はそんな思いをこめて十歳かそこらにしか見えない彼女イアラノエルに視線を送るが、無邪気な彼女にそんな思いが届

くはずもなく。

目と同じに明るい金色をした、肩より上くらいのまばらな長さの髪を高い位置にひとまとめにして、跳ね回る姿が微笑ましいような憎たらしいような。反面、イアラもここにいる誰もと同じく戦

闘要因であることに、失望の声が漏れる。軍隊の非情な人選にか、小さな子供に目の前で死んで欲し

くないからかは、その場に居た人間には少し、判断し辛かったに違いない。

さて、彼 ガラフ＝Gについては、彼らにとって憧憬、畏怖、恐怖の象徴である。その美貌と強さは計り知れないもので、彼の行くところは常に最前線だった。つまり、ガラフと同じ車両に乗っていると言うことは、名誉の戦死も間近であると言うこと。遠くでいられる分には構わないが、戦場で一緒にするのは出来る限り避けたい人物なのだった。

極端に言えば、彼はこの場に居る一般兵からみればただの疫病神でしかないのである。

「おい、つてば！」

足元で吼えられるのにも大概疲れたのか、ガラフはやっとまともにイアラの方を見る。

「……少しは静かに出来ないのか」

「わたしが話さなきゃ、誰が話すんだよ？」

ガラフは大きく息をつくと、話す必要は無い、とただ一言、抑揚の無い声で言う。無表情は彼の特徴だったが、その巨体と相まって相手に過度に威圧感を与えてしまうようだった。

視線を向けられたイアラはぐつと押し黙り、それ以降何も言わなくなった。つまらなさそうに腰を

下ろし、大剣の柄を握り締める。初陣である彼女が不安を和らげようとしていたのは誰の目にも明らか

かで、だとしたら彼の対応はいささか冷たいようにも思われた。

イアラの手は小刻みに震えていたが、自分ではそれに気づいていない様子も無く、周囲の少年兵に声を掛けては談笑する。

その場に居た誰もが、このトラックが行き先を変えてくれればいいのにと願った。

そんな思いも虚しく、がたんつ、と大きな揺れとともに、トラックが、止まった。目的地に、着いたようであった。

さつさとトラックの荷台から降りたガラフに続いて降りようとしたイアラの肩が、後ろに引き戻された。

バランスを崩しかけ、驚いたイアラが振り返ると、親友のリリア「クレイが彼女の肩にかけた手を

はなす。彼女は攻撃系術士で、イアラと年の近い唯一の少女である。否、ひとつ上か。

腰まで伸びた、色素の薄い金髪が、際立って彼女を儂げに見せた。イアラはリリアがここにいることが場違いなのではと、思わずにいらなかった。

背は高く、どこか大人びた雰囲気のある美少女。その手が伸びて、イアラの小さな手を握る。

「今なら、まだ引き返せるよ」

イアラは苦笑し、その手を握り返す。

「大丈夫だって。心配、しなくても」

リリアは少し残念そうな顔をして、そう、と呟いた。

イアラは、幼い。小さくて細い外見はもちろんのこと、実年齢も十四歳、決して年長では、ない。

まあ、それは自分も同じなのだが。

そんなリリアの心配をよそに、イアラは自分の身長の軽く二倍はあるような大剣を背負い直す。大丈夫、と笑って彼女に背を向け、荷台から飛び降りた。褐色の大地に足をつく、乾いた音とともに走り去る親友の後姿に、リリアは暫し茫然と見入っていた。

イアラはそれに気づいていながらも、振り返った先で天幕の設営がされていくのを見るのが怖くて、走る足を急かす。

すぐに、黒いマントの後姿が見えた。

「大丈夫なのか」

ガラフは足元に走ってきた少女に、開口一番そう言った。

イアラは馬鹿にするなど彼を見上げる。二メートル超のその巨軀に漆黒のマントを羽織った彼の姿

は、神話などに出てきそうな死に神を彷彿とさせた。同時に、その銀の髪に飾られた凛々しい横顔が、詩人の歌う英雄の姿に似ていた。

自分を見上げているイアラの拙い考えなど知らないガラフはイアラを見下ろし、その腕に視線をやる。

「ならば、それをどうにかしろ」

「な……っ！」

イアラは震える両腕を見るとつさに肩を抱くようにして押さえ込んだ。頬を紅潮させて、眉ひと

つ動かさない相棒の、涼しい貌を憎々しげに見上げる。

いつも釣り目だった彼女の目が不愉快そうに更につりあがった。

それからガラフはこともなげに前を見据えると、背中の大鎌デスサイスを抜き放つ。

その動作が、やけに様になっていて、イアラは暫く、ガラフの背中に見とれていた。

彼の双眸がずっと細くなる。風が吹き、秀麗な顔が顕わになるのを嫌うように、顔の下半分まで、マントの襟をずりあげた。

「……イアラ」

「あん？」

「死に急くなよ」

「あんたがな」

皮肉で返す余裕があれば大丈夫か。

ガラフは特に振り返りもせず、一步、踏み出した。

イアラも遅れをとらぬように走って追う。向こうからの隊も見えていたので、目の前に派手な砂煙が舞った。

先ほどとは違って、この地区にはまだある程度自然が残っているらしい。この景色を壊すのかと思うと、すこし気が引けた。ともあれ、わたしは。

ともあれ、踏み出してしまったのだ、わたしは。

砂塵が消えると、ガラフの背中が見えた。安堵に緩みかけた口元が、そのままの形で硬直した。

彼の大鎌が首を狩り、飛ばすところを直視してしまったのだった。再び両手が震えるのを感じたが、それを握りつぶすように大剣を握りなおし、唇を噛む。

もう一度踏み出した足を邪魔するように一閃、振り下ろされた剣を下段から上段へと弾いた。目の前の男に向かって振り下ろした両手に重い衝撃。肉を裂き、骨を絶つ感触と視界に映る生々しい赤。赤。あか！

更に周囲から襲い掛かる者を一閃で上下に別つ。ぬめった剣の柄を握りなおし、横からの突きを受け流して相手を叩き潰す。濡れた音を立てて飛び散り、落ちていく内臓がグロテスクで、思わず目を逸らした。

ほつと剣を下ろしたのもつかの間、背中を誰かに蹴倒され、上のしかかられた。剣の柄を持った

右腕を踏みつけた相手のわき腹に肘鉄を食らわせて上体を起こす。踏まれたままの右腕が軋んだ音を立てて、間接が外れた。悲鳴をかみ殺して左手で腰の短剣を引き抜き、迷わず相手の喉に突き立てる。目の前の、どうやら少年だったらしい顔が苦悶に歪み、喉から血を噴き出しながらイアラ

の首を掴んで押し倒した。

「……っか、は」

死んでいるはずの相手の手は信じられない力で彼女の細い首を締め上げる。イアラはその手を乱暴に振り払って逃れ、折り重なって倒れてくる死体の山の下で、自分の右肩を乱暴に掴んだ。

目立たないところに倒れたのは不幸中の幸いだろう。普通なら、こうしている間に殺されるところだ。ああ、それにしても。血と泥と汗で濡れた服が、折り重なった死体が重い。

鉄の味がする、誰のものとも知れない腕に噛み付いて悲鳴を殺し、右腕の間接を戻した。

死体の山から這い出ると、そこがどうやら林の中らしいことがわかった。さっきの少年とやりあっているうちに迷い込んだのだろう。改めて、服が重いと思った。

鬱蒼とした緑と、湿っぽい空気が癩に障る。そしてこんな状況でも鳴り止まぬ、金属の擦れて打ち

合う音。頬を伝い落ちる血が、自分のものではないのを思い出すと、気が狂いそうになった。

「畜生っ」

足元に転がっていた、誰のものとも知れない足の残骸を蹴って遠くへ飛ばす。

死者への冒瀆など、知ったことじゃなかった。

むせ返るような血の匂い。吐き気にこらえきれず、その場に膝をついて口元を手で覆った。そうしたところで、堪えきれぬものでは

ないが。

「……………うっ……………」

地面についた両手を握り締め、きつく目を閉じた。いつそ何も、見えなくなればいいと願った。

再び目がさめたのはテントの中。

目に付いたのは腕をぐるぐる巻きにしている包帯だとか、乱雑な室内だった。

「ここ……………どこ」

少女の掠れた声に気づいたのか、傍らで転寝していた男はほっとしたような顔でイアラを覗き込んだ。

柔らかに、笑み。

「大丈夫か？」

「ん」

黒髪の優男、文字通り女たらしのこの男は名をリックという。ガラフと唯一対等な立場の人間だと聞いたが、真偽のほどは定かではない。

彼はこの 否、ガラフのいる隊の軍師である。十年ほど前までは、彼の背中を守っていたと聞く。

目に掛かった前髪を掻き揚げる動作がかなり遊び人臭い。こうしてみると、彼は本当にガラフと友人であるかさえ疑わしい。

「わたし……………どうしたんだっけ」

「どうって？ 暫くはぐれてたけど途中からガラフと合流して戦ってたろ？ 終わったらぶっ倒れたけど」

イアラはそうか、と呟き、ぐっと毛布を握り締めた。その掌に、鈍い痛みが走る。恐らく肉刺か何かだろ。

居る場所にそぐわず平和な痛みにも、顔をしかめた。

「やっぱりすごいな、お前は。あのガラフについていけるんだからよ」

「怖えーな」

ぼそりと呟いた彼女を見下ろすリックの顔に、陰りが見えた。肩より少し長めの金の髪がやけに目に付いたのは、少女がその両腕で顔を覆っているからか。

その口元が自嘲に歪む。

白い肌が微かに震える。

「死ぬよか怖えー」

リックは何も言わずにその金髪を梳くように撫で、天幕を出た。

冷たい夜はふけるだけのようで、明け方はまだ、遠かった。

一話

2

闇、だった。

イアラは一人でそこに立っていて、真っ白な影が一本、その足元から伸びているのだった。歩いてきた足を止め、後ろを振り返ると無数の手が闇から伸びている。

思わずあとじさった彼女の足を、冷たい手が掴んだ。

「……ッ！」

全身が、引き攣るような。

そんな悪寒を感じた。

「……放、せつ」

必死に動かす足はしかし、決して振りほどくことは出来ない。聞こえてくる、というより頭の中に

直接流れ込んでくるイアラを責め立てるようなその声は、父の、母の、近所に住んでいた人たちの。

イアラ

イアラ

イアラ

イアラ

来い

イアラ

………何故、お前だけが、生きている

「生きてたくなかなかかった！」

直後。堪らず叫んだイアラの頭の中に、流れ込んでくる感情の濁流。

おまえにわかるものか。おまえにわかるものか。おまえにわかるものか。死にたくなかった。死にたくなかった。死にたくなかった。死にたくなかった。腕を引き千切られ、頭蓋を砕かれる痛みがお前にわかるか。家族の死体を抱いて殺戮者を見上げた、この絶望がわかるか。

何故お前だけがおまえだけが、

お前だけが！

「どうして！わたしだけが！」

……音が、消える。

形容しがたい音とともに、座り込んだ彼女の周りに真っ白な壁が出来た。

その中でゆらゆら揺れる影、影、影。そして断末魔のような笑い声。耳を劈くような。

やけにリアルな音を出して、あるものは足が千切れ、頭から両断され、切断された首はあらぬ方向へと飛んでいき

ふと。自分の手に、人を斬った時の堪らない感触が蘇る。筋肉の繊維に噛み付かれ、なかなか抜けない刃と、抜けたときの堪えがたい音。

「……やめる」

一步。

知らずに、後退。

「……嫌だ……」

二歩。

嘲るような笑い声も、惨劇の模倣も止まず。

「……いや……あ」

後じさりながら両のこめかみを手で押さえ、しかし惨劇から目を

逸らすことも出来ず、やがて目前の景色が歪んで頬を滑り落ちる。壁が背中に当たって、後が無いことがわかると、その場に泣き崩れた。

目がさめて最初に見えたのはテントの天井。月の薄明かりの中でリリアは顔にかかった髪を掻き揚げ、体を起こした。

……眠れない。

寝直そうかとも考えたが、無理だということもまた自覚はしていたので、仕方なく起き上がり、所在なげにあたりを見回す。

少し離れたところで自分に背を向けて寝ているイアラの方へ、視線が泳いだ。

「ね……起きてる？」

リリアは遠慮がちにそう言つと、イアラの近くへ寄って行って、彼女の様子がおかしいことに気づいた。

呼吸も浅く、汗だくになって毛布を握り締めていたイアラはリリアの手を払いのけ、飛び起きる。意識が混濁している所為か目の焦点もはつきりしてはいないが、怯えていることはその様子でわかる。

「……ッ」

「イアラ？」

名前を呼ばれた少女の肩がびくつと痙攣する。よほど酷い夢を見ているのだろう。

「……や」

「どうしたの」

逃げようとしたイアラの腕を掴むと、彼女はその手を振り払おうと、ひどく暴れた。

短剣を握った手を押さえつけると引き攣った悲鳴を上げる。

リリアはそれも構わず抱きしめ。

「いやだあああつ、放せ……!!」

「怖くないよ、落ち着いて。……大丈夫だから、ね？」

イアラの耳元に優しく声を掛けると、次第にその抵抗も弱々しく、

小さくなった。リリアの服を掴んで喘いでいた彼女は、やっと落ちて着いたのか小さく震えた。

「……………リ、リア……………」

イアラはリリアの服をぐつと掴んで彼女を見上げた。リリアは涙目で見上げてくる少女に笑顔で頷くと、その頭を優しくなでた。

イアラはいつになく弱気な目を逸らし、ごめん、と呟いた。

「大丈夫。誰でもあることだよ」

リリアはきつぱりとそう言って、申し訳なさそうな顔のイアラを見下ろす。腕の包帯が赤く滲んでいるのに気がつく、替えようとその手を取った。

「……………あたしはもう、慣れてしまったけれど」

ポツリと聞こえた独り言にイアラが顔を上げて、リリアはただ笑い返しただけだった。

蹴倒した兵士の胸に大剣をつきたてて、肩で息をする。

「……………百九十……………」

四方から走ってきた者たちも剣で薙ぎ、体を上下に別つた勢いで続く銃口を射手ともども切断した。後ろからの者の腹部に短剣をつきたてて振り返ると、うるたえ、機動力を殺がれた彼に向かい、大剣を振り下ろした。

血糊や脂で鈍器と化した大剣は兵士の頭を叩き割り、その中身をイアラの足元にぶちまける。

それを避けるように少し下がると、矢で左腕を射抜かれた。ぐつと歯を食いしばって振り返りざまに大剣を振る、横薙ぎに頭を斬り付ける。

頭蓋を砕き、脳漿を散らす嫌な音。

死臭。血の臭気。

「……………にひゃ、く……………っぐ」

その場に崩れ落ち、嘔吐。吐くようなものは残っていないのに、と地面に爪を立てた。

胃液が喉を焼いて、痛い。

イアラは少しの間だけ泣くと、再び立ち上がって大剣を振るった。同時に肉に食い込む手応え。後ろから斬りつけようとしていたらしい男が口から血泡を吹いてがくと体の力を抜く。イアラもそれにあわせて大剣を振ると、筋肉を引きちぎる堪えがたい音と共にその体が地面に倒れた。

あいつは、この行為をどう思っているのか。

行く手に、青味がかつた銀の髪、鉛の瞳を持つ大男の姿が見えてふと、そんなことを考えた。ガラフはちらりとイアラを見たようだったが、すぐに目を逸らした。

足元まで追いつくと、視線も向けずに呟いた。

「大丈夫なのか」

「まあね」

努めて明るく笑って見せる。ガラフは対比のようにばかりかい大剣にこびりついた血糊を見つめ、

そうか、と呟いた。

「あんたはさ。こういう所において、帰りたいとか思ったことないのか？」

イアラの言葉に考え込むような素振りを見せると、ガラフは思い出したように大鎌で少女の頭上を薙いだ。驚いて棒立ちになっているイアラの後ろで敵側の兵士が倒れるのを確認してから、こともなげに前を向く。

「今居る場所が居るべきところだ」

彼のそれが彼女の問いに対する答えだと気づいたのは、向かってきた兵士を全部斬った後だった。

よろけたイアラの肩を、大きな手が支える。

「大丈夫か」

「……悪い」

ガラフは。

体勢を立て直した彼女の頬についた血を親指で拭い、その小さな肩の向こうに瓦礫と死人の山を見つけ、酷く不愉快な気分になった。

一方でイアラは。

彼の肩越しに空を見上げ、流れていく雲の銅色が綺麗だと、思った。

折っていた膝を立ち上げ、踵を返して歩いていくガラフの背中を、重たい体を懸命に引きずって追う。

周囲にはこの夕日さえ穢れたものに見せる死体の山が積みあがっていた。

そんな、瓦礫の山も累々たる屍も見ない振りして。

緩くなっていたゴムで髪を高く括り直しながら、イアラはガラフを見上げた。

「なんとなく、だけど」

ガラフは小さな声に気づくと足を止め、彼女を振り返る。言葉は必要ないと判断されたのか、わずかに、沈黙が流れる。

「わたしはきつと、”生きて”いたかったんだ。死んでいたわたしの心、ガラフだけが見つけて助けてくれたから」

「心？」

ガラフはいつもと変わらぬ無表情でイアラを見下ろす。イアラもまたまっすぐに彼を見上げ。彼はその表情を鬱陶しいと思う反面、それに何かを期待している自分に気がついた。

また、イアラは彼の考えなど知りもせず、尊敬だか畏怖だか慕情だかの籠った視線を逸らさずに居た。

どうせ死んでしまう心なら、貴方とともにありたいのだ。

グラフはばかばかしいと背を向け、再び歩き出す。後ろの小さな足音を聞きながら、唐突に、何かを、変えてみたいと思った。漠然と。

「……お前を死なせないと、約束してやるっ」

ほんの小さな変化を与えてみようか。背を向けたまま言った彼を、イアラは暫く呆然と見つめ。

「同じく」

皮肉で返した口元には笑み。

ただ、嬉しかった。

「しっかし、あの程度のところにお前らが出てくなんて、うちの上官って莫迦なんじゃね？」

リックが明るく笑う。あれから帰ってきて二週間程になるが、ガラフもリックもそれについて、イアラの前で話したのはこれが始めてかも知れない。

彼女に気を遣ったことなのだろうが。

「早々に引き上げたかったんだろ」

イアラは律儀に返事を返すが、ガラフは半分無視している感がある。

イアラにしてみれば、この二人が親友であるゆえんも根拠も、全くの謎である。

周りからしてみれば、そもそもこの三人が仲良く歩いている時点で大いなる謎　異様、もしくは怪奇　なわけだが。

寡黙で常に無表情な大男ガラフは、その実軍の最新兵器だという噂がまことしやかに囁かれていたり、無駄に眉目秀麗という言葉が似合う辺り、信憑性を増していたりする。本人の預かり知らぬところで囁かれているデマには違いないが、失礼にもほどがあると云うものだ。

もつとも、彼が今一番困っているのは道を歩けばどこからか寄ってくる女たちのあしらい方らしいが。

その親友（自称？）であるリックはデュオは女好きで陽気な、ガラフとは正反対の性格をしている　割に自他ともに認める天才でもあるらしいが、イアラはその天才ぶりを未だに見たことは無い。

そもそもそちらのほうがデマなのかもしれない。ただ、時折ガラフとまじめな話をする彼からは、

あるいは、と思わせる雰囲気を感じることがある。

そしてイアラ＝ノエルに至っては一年前入隊するまで彼らとは何の接点も無かった。どこかから連れて来られた小汚い娘が、今はガラフ＝Gの片腕である。

確かに、その歳に似合わず幼い　五、六歳位か？実年齢は十四歳だか　外見や、とんでもない怪力　あの大剣が良い証拠で、”異質”という点では通じるところが有るのかも知れない。

見た目十歳にも満たないような少女が自分の身長軽く三倍はありそうな大剣を片手で振り回す様も、死に神のようなガラフに負けず劣らず、見ごたえはある。

彼女のそんな考えを打ち切るように、リックの声が覆い被さる。

「早く戦争終わらせるには何が一番早いか知ってるか、イアラ」

「さあ」

「どつちかがさっさと降伏すること。そもそもいざこざを起こさないことだ」

「……リックてさ、やっぱり莫迦だと思う」

「なっ！　なんつーこと言い出すのかね君ってやつは！」

「……イアラ」

珍しく咎めるようなガラフの声に彼を見上げ、立ち止まる。彼は視線をリックの方へ彷徨わせると、

仮にも親友である彼を指差し、小さく呟いた。

「これは阿呆というんだ」

イアラの住んでいるのは六六〇一兵舎B棟の八一一室である。だいたい兵士や戦士は一つの部屋に

何人かのルームメイトと暮らすようになっていて、彼女もまた広めの部屋に四人のルームメイトとともに住んでいる。

そのうちの一人がシヨウ「ネフィス、彼女とは比較的仲の良い少年兵である。」

「イアラは怖くないのか？」

「ん？ 何が？」

仕事帰りのだるい体を閉めた扉にもたせかけて彼がそう言ったのは、つい最近のことである。

イアラの気の抜けるような返事に、シヨウは一拍置いてガラフ「Gのことだよと答えた。イアラはそれに不思議そうな顔で返す。

「なんで？ 怖いのか？」

ソファに寝転がって本を読んでいたイアラが顔を上げ、シヨウの方へ視線を泳がせる。廊下ですれ違いでもしたのだろうか。

「怖いってか、近くに居るとすごい威圧感があるんだ。格が違う、っていうか」

「図体ばかり無駄にでっかいもんな」

「や、そう言うんでなく！」

シヨウは顔をしかめたが、彼女はそれにも特に気付いていないようである。

どうやら、冗談でなく本気でそう思っているらしい。

「死なない程度には守ってくれるし、特に暴力的とかでもないぞ。そんなに怖いかな？」

シヨウはあんまりな答えに黙り込み、二の句も告げずにその場に立ち尽くす。

ダメだ。論点が激しくずれている。

彼はひそかにため息を吐くと、無邪気な笑顔を覗き込んだ。

そして、実は一番訊いてみたかったことを口を上らせる。

「じゃ、戦は？」

「怖いよ」

即答だった。

予想外の返事。あまりにも普通にイアラが答えたのを聞き、シヨウは暫く唾然とせずに居られなかった。怖くない筈はないだろうが、強がりの彼女が普通にそれを認めるとは思っても見なかったのである。

たびたび悪夢を見て魘されているのも知ってはいたが、それとこれとは別なんだとでも言い張っていそうな、否むしろそちらのほうが彼女らしい気がした。

それに、実際はシヨウ自身が、そう返答されることを望んでいなかった。

そんな彼の考えを察してか、気の強い金の瞳が不愉快そうに細められる。

「……なんだよ、命のやり取りって怖いだろ？」

「そっか……？ そうだよな、うん」

言葉とは裏腹に、シヨウの顔は少しばかり不満の色をたたえ。

イアラはそれを少しだけ見つめ、再び本に視線を戻した。床に座り込み、ソファに背を持たせかけてシヨウは大きいため息を吐いた。仕事から帰ってきたばかりの疲れきった顔で、天井を仰ぐ。

下っ端の雑務。

事務処理。

武器の手入れ。

堪ったものじゃない。いつそ戦場を駆る方がどれだけ楽だろうか、そう思ってもいざとなれば震える手。怖気づく足。そんなわけで彼は、戦地ではろくすっぽ役に立たないのだった。

「あーあ。オレもでっかい戦果の一つも揚げてみてえよ」

「やめとけよ。良いこと無いから」

いつもより低いイアラの声。

シヨウが反射的に彼女のほうを向くと、体を起こして彼のほうを見ていたイアラと、目が合った。目が合ったのに、その目が自分を見ているわけではないのを知って、ぞっとした。

まるで、悪夢からまだ抜け出せていないときのような、昏い、底の見えない瞳。

いつもの彼女からは想像もつかないような暗い表情に、何も言えなくなった。

「イアラ、おい。起きろ、バカ！」

「うん……何」

翌日のことである。シヨウに乱暴に体を揺さぶられ、イアラは寝ぼけている目を開いて、彼を見上

げる。シヨウが、いつに無く必死な表情であるのがわかる。

「なにじゃねえ、オレたちの隊が村一つ殲滅することになってるらしいんだ」

「そんなん、珍しくないだろ」

そう言っつて寝直そうとした彼女の両肩を掴み。

「リリアの故郷だぞ！」

「……は？」

イアラは驚愕に目を見開くと、シヨウの顔をまじまじと見上げた。リリアって、あのリリア？

答えを求めて視線を彷徨わせるが、生憎と喋っていないのかシヨウ以外のルームメイトはおのおのの仕事の為に出勤しているのだった。

よって、帰ってくるのは無音。質素な家具と程よく散らかった床ぐらいしか見つかる物も無く。

シヨウの顔を見上げて、冗談を言っているような顔ではなかった。むしろ、彼はそんな残酷なジョークを言ったりもしない。

いても立っても居られなくなって扉に向かったイアラをシヨウが慌てて呼び止める。

「ちよつと、何処行くんだ？」

「リックのところ。もつと詳しい状況を知りたい」

「そりゃいいけど、着替えるよ？」

「……え、ダメか？」

シヨウは盛大にため息を吐き、タンクトップだけのイアラの上からシャツを被せ、がくつと頭を垂れた。ため息とともに言葉をひねり出す。

「この……無精者！ どんだけ女に餓えた奴が居ると思ってるんだ」

「大丈夫だつて。私を女として見る奴が稀有だからな」

「……男色とか、ロリコンって言葉を知ってたほうが良いぜ」

呆れ顔で呟いた彼に振り返らずに手を振って、イアラは部屋から出て行った。

とはいえ実際のところは、

シヨウは顔を上げると頭を振り、机の上に放り出してあった新聞に手を伸ばした。真実が書いてあるのかも怪しいような超捏造新聞だったりするが、読む分にはなかなか楽しいのである。

そして、中断していた思考をなんとなく思い返す。

実際のところ自分だつて、イアラを”おんなのこ”だなんて思っていないに違いない（薄着しててもときめかないし）。

「お前は関係ない。多分何のお咎めも無いだろう」

リックはそう言つと、目の前の少女を見下ろした。少女　リリアは終始下を向いて自分の故郷の顛末を聞いていた。握り締めた両拳がわなわなと震え、先ほどの説明が彼女に与えた衝撃を物語つて

いた。

そんなのは嘘だと喚きたくなる衝動をぐつと飲み込むと、少しでも気を落ち着けるために自分から切り出した。

「あたし……どうすれば」

「さあな。オレも頑張ってはみたけど、上官のジジイ共が五月蠅くてな。お前も殲滅隊に入れられる可能性が高い」

そこで初めてリリアが顔を上げる。瞳には絶望。

彼女は小さく息を吐くと、何の前触れも無くリックの頬を叩いた。自分の暴挙を理解してすぐにその手を引っ込め、少し迷って再び振り上げた右手を後ろからガラフにつかまれ、苦々しい表情でそれを見上げた。

やがてその視線はガラフからリックの方へ戻る。

「……ごめんなさい」

項垂れて、謝罪とともに踵を返して歩き出したリリアの手を、ガラフは無言で放す。走り去ろうとした

背中中に一言、すまない、と聞こえた。

そんなの聞こえない振りして、扉を閉めた彼女を見送り、ガラフはリックに視線を戻す。

「……だから、貴様は阿呆だというんだ」

友人の言葉に、リックは苦笑した。

「……あ」

ぱったりと廊下でリリアと出くわしてしまったイアラは、彼女を見上げ、立ち尽くした。

どうしよう、かける言葉が。

見つからなかった。

イアラの心情を察したのか、リリアは少女の頭に手を乗せる。

「大丈夫よ。イアラがそんな顔、しないで」

それだけ言って哀しげな笑みを残して走り去った後姿が、やけに寂しかった。

追いかけたい足は意に反して床に縫い付けられ、彼女が動くのを許さない。イアラは、胸の奥が暗く湿っていくのを感じた。

こうしてまた、わたしは独りになるのか。
こうして離れていくのだと、不安が、胸を過ぎった。

不景気そうな町並みが、流れていく。灰色の町並み、セントラル・ラヂ中央街外れのスラム。

貧困層の群れは無謀にもこのトラックを襲う算段を立てているようである。

早くも無く遅くも無く、荷台が規則正しく揺れる音が、かなり耳に障る。その揺れ方と言うのも、わざとやっているのかと怒鳴ってやりたくなるほど緩慢で、乗っているだけで気分が悪くなった。

後方にも五台ばかり同じようなトラックが走っていて、町の人間がまたかと心配そうな視線を送っている。

イアラ達の乗っているトラックの荷台の運転席側半分には大量に火薬や銃の類が積んであり、それが時折跳ねて箱から零れ落ち、甲高い音を立てる。

後ろ側半分には同年代くらいの若い兵士が大勢。やや間を空けて座り、面々に話したり武器の手入れをしたりしており、隅の方ではリリアが俯き気味に座っている。

イアラはあえてそれから目を逸らし、隣で青くなって震えているシヨウに大丈夫か、と声をかけた。

「……大丈夫。イアラは？」

「多分な。わたしは強いから」

今回、ガラフは別働隊なので一緒には居ない。少しの不安を押し殺すようにして笑うと、シヨウは気分を害したのか、舌打ちして顔を逸らす。

「……あいつ、今どんな気分なんだろうな」

彼の視線の先には、俯いて座っているリリア。イアラは解からないな、と哀しげに目を伏せる。

「自分の家族を殺したことなんて、ないからさ」

四話

4

鬱蒼とした森の中に身を隠し、兵士達はその村を見ていた。

その村は森から北のほうに広がる盆地に造られている。村の奥には切り立っ

た崖がそびえ、村の四方　東西南北を囲むようにして4つの塔がある。何の

ために造られたものかは知らないが、かなり目立っていた。その対角線上にも

ひとときわ高い塔が建っており、恐らくはそれらの塔と森の中で戦うことになる

のだろうと予想された。

「なんか……すぐに終わりそうだな」

「どうだか」

イアラは心底嫌そうな顔をしてそう言うと、肩を竦めて見せる。

不審そうに

見下ろしてきたシヨウに、此処は術士たちの村だぞと言い返して憚然とする。

「この情報が、向こうに渡ってないはずない」

功を急いだのか血の気の多そうな兵士が一人飛び出していったのを、イアラ

が無言で指し示す。

村人らしき女に掴みかかった彼の四肢が四散したのを見て、呆れ顔でほらな、

と呟いた。つまり、彼らはあらかじめ知っていて、それでもなおこうしてのん

びりとしていられるような策を持っているのだと言ったのだ。イアラ

ラは。

そこに居た全員に緊張が走る。耳に痛い沈黙の後、やがて一人、また一人と

弾かれたように立ち上がっては突撃をはじめ。やがてどこからか現れた人間

恐らくは村人だろう　と戦闘になったのを見てシヨウまでもがそわそわ

し始める中、ただ一人彼女だけは冷静にそれを見ていた。

見たところこの隊には古参の兵士が一人も居ない。自分で戦況を見極めなく

てはならないという事実を恐れをなして震える両手を力強く握り締める。

それでも拭えぬ重圧は笑ってごまかした。

「……わたしたちは、捨て駒かもしれない」

「イアラはガラフの相棒パートナーだろ？」

シヨウの言葉に嘲笑で返し、イアラは前を向く。

「こんな小娘があいつの足元にも及ぶものか。上層部の奴らはそう考えてるん

だろうさ。どうせ女なら、色気があって可愛げがあるほうがジジイどもの好み

なんだよ」

そこまで言うと、もう周りにはほとんど誰も居ないというのに、彼女はもっ

と声のトーンを落とした。

「……リリアのことだって、泣きついて、頼ってくるのを待ってんだよ、あの

下衆どもは」

シヨウははつと顔を上げ、なんともいえない表情で口をつくむ。

イアラの精悍な横顔が、一瞬彼を見上げる。

「行くぞ」

走り出したイアラは後からシヨウの足音を聞いて、安堵している自分に気づいた。同時に今までの不安が全て、ガラフが居ないことに起因するのだと言うことに気づき、ばつが悪そうに頭をふる。

横から突き出された剣を払い、その胴体を横薙ぎに切り裂く。逆方向からの攻撃に舌打ちしながら大剣で受け止め、叩き潰した。大して血を流しもせずに

内臓をぶちまけ、倒れていく相手に違和感を感じた。

振り返ると、シヨウは応戦に必死で聞いてくれそうには。無かった。なによ
り、自分も言いたいわけではないので、黙っておく。

殴りかかってきたものを殴り返し、倒れた胸に飛び乗ると、その喉に短剣を

突きたてた。硬い手応えと共に、骨を砕く、音。

相手の青白い顔と無表情が癪に障った。

耳元で風を切る音、それに気づいて上体をひねって避ける。さっきまでイアラ

ラがいた位置、喉を砕かれた男の肩に槍が突き立てられる。振り返りざまにそ

の喉から短剣を引き抜き、槍を持った少女の額めがけて投擲。前のめりに倒れ

てきた彼女の背中を盾に、矢をうけた。

そこで初めて、イアラは自分たちが囲まれて背中合わせで居るのに気づくのだった。

「他の兵士はどこ行っちゃったんだ！」

背後のシヨウに怒鳴ると、静かな声が返ってくる。

「多分、同じような戦法で追い詰められてるんだ。……ところで、

イアラは気づいたか」

「なんだよ、気づいてやがったのか。」

「イアラは舌打ちすると、ああ、とぶつきらぼうに返す。」

「あいつら、死人を操って戦ってやがるんだ。だから、生きた人間の犠牲は最

小限に留められる。畜生、分が悪すぎんだよ！」

「お前、なんでそんなの知ってるんだ？」

「リリアが言ってた。術士の戦い方は汚いんだよってさ」

「……………そっか」

イアラは構えている死体人形の群れを見渡す。これは 相当なプレッシャー。

ぎりぎり弓の引き絞られる音を聞きながら、シヨウの服を引いた。

「振り返らずに行け。いいか。」

「右だ！」

同時に宙を裂く音。間一髪で逃れると、右に行くのに邪魔な者だけを打ち倒

して、その先の民家へ転がり込んだ。乱闘の跡はあったが、良い砦である。そ

の戸口、右と左に分かれてイアラとシヨウが外を窺う。

「どうやら、相手方もこちらの出方を窺っているらしかった。」

「シヨウならどうする」

「潔く死ぬ」

「バカ、お前。最高」

イアラは苦笑しつつ再び外を見る。それから鋭い目で、見つけた、と呟いた。

「……………術士か？」

「見えるか？あの、でっかいオヤジの隣。あんなに血色が良いんだ

ぜ」

シヨウの表情が、引き締まる。

「援護頼む」

「ったく、ここまで巻き込んでいて頼むってどうよ」

「しつかりしねえと、てめえも道連れだぜ」

イアラがにやりと笑うと、シヨウは舌打ちしてわかったよと肩を落とした。

彼女はそれを確認すると、大剣を構えなおして戸口から飛び出した。大群が

襲ってくるのもほぼ同時。イアラが斬り、叩き潰すより余計に死体人形が倒れ

ていく。シヨウはしつかり援護してくれているらしい。

後ろから斬りかかってきた少年を貫き、地面に刃を突き立てると、再び引き

抜いて 抜けないツ？

イアラが左からの拳を受け流して投げ飛ばし、見ると剣は氷でしつかりと地

面に縫いとめられていた。

「くそっ」

大剣を盾に上手く応戦しながら、大分減ってきた死体人形の隙間に、術士ら

しい男の姿を見つけると、はっと自分の足元を見下ろし、絶句する。いつの間

にやら足まで剣と同じに凍り付いていた。

襲い掛かってきた死体人形の短剣を奪い取って斬り捨てると、直後ま迫って

いた術士の刃が風を切った。なんとか避けたイアラの頬を掠めて短剣は空を切る。

再び頭を狙った刃は一度銃声と共に軌道をそらされ、イアラの肩

当ての上を

滑って首を目指す。

イアラはそれを噛んで止め、その手に持っていた短剣で相手の胸を突いた。

顔に掛かる血が生温かくて、吐き気がした。

後ろから走って来たシヨウと、崩れ落ちた死体人形を見つめて、ため息を吐いた。

いた。

「大丈夫か、イアラ？」

「口の中ちよつと切った。あ、ありがとうな、援護」

「あ？ああ」

シヨウは少しだけ恥ずかしそうに頭を掻いた。間に合わなかったらどうしよう

うっておもったよ、と、年に相応の笑みでイアラの頭を撫でる。

イアラもむつと照れたように顔をしかめたが、それを甘んじて受けると改め

て周りを見回した。

「あとは全森か塔の中　か」

「気が滅入るな」

「まったくだ」

イアラも同意すると顔を拭おうとしたが、レーザーグローブがぬらりと光って

いるのを見ると、やめた。

「シヨウ！」

イアラの声に振り返り、シヨウは後ろから斬りかかってきた男の頭を銃で殴

り、撃つ。

もう既に彼の息は荒く、正常な思考判断力もどこかへ飛びかけていた。

すぐに終わるはずは、無い。

術士たちは持つている術や知恵のすべてを使って反撃するからである。イア

ラは襲ってくる死体人形をすべて斬り終えると、小さく息をついた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ。オレ、もう何人殺した……」

「二人だよ。大半は死体だからな。……ちっ、胸クソ悪い」

嫌悪感を顕わにした顔で、足元に転がっている首を見下ろす。文

字通り血も

リウイング・デッド

涙も無い死体人形。ひどく、気味が悪いと思った。

背後でぎしっ、と音がしたのに気づいたシヨウがまたかよ、と振り返ると、

大木がその枝を振りかぶっていた。慌てて間一髪でそれをよける。

間髪入れず

襲い掛かった第二撃をイアラの大剣がうけた。刃のように研ぎ澄まされた枝と、切り結んだ。

だが、手応えは軽い。

「近くに居る」

シヨウが頷いたのを確認すると、イアラは枝を払うべく大剣を振るう。きん

っ、と澄んだ音を立てて枝と刃が離れた。少女は逃げようとした大木の幹を大

剣で叩き折ると、一步、下がる。

上下に切断された大木の上部が宙に舞うのにまぎれて放たれた矢を斬りおとす。

術士は焦っているのだろう、今の攻撃で何処にいるかイアラに把握されてしまっ

「シヨウ！東　うわっ!？」

叫ぼうとしたイアラの左足をその足元にあつた血だまりが斬り、裂いた。シ

ヨウは倒れた彼女を焦りに満ちた目でちらりと見ると、東に向かつて引き金を

引いた。悲鳴とともに空間が波打って碎け、その向こうで女術士がわき腹を押

さえて倒れるのが見えた。

止めを刺そうとした彼の手を、怯える女術士の目が停めた。哀れつばい目に

シヨウが戸惑っていると、女術士は倒れて起き上がれずに居るイアラをちらり

と見て、口元を吊り上げた。

身の危険を感じたイアラは転がって木の根の一撃をよけ、立ち上がろうと奮

起する。

「！イアラ　」

「……っ、畜生、撃て！」

我に却って銃を構えたシヨウの手はしかし、どうしても引き金を引けずに居た。

「シヨウ！頼むから　これじゃホントにただの捨て駒になっちまう！」

捨て駒。

ぞつとした。

「……う、あああああっ！」

銃声。

「……大丈夫……じゃないよな」

イアラはすまなそうにそう言っ、頂垂れた。シヨウは苦笑すると、いいよ

と首を振った。足元にある女術士の凄惨な屍を見下ろして、初陣の時のイアラ

の気持ちがあったような気がしたのだった。

「で、悪いんだけどさ。シヨウ、ちょっと、これから別行動取ろうぜ。足を休めたいんだ」

シヨウは何か言いたげに口を開いたが、結局何も言えずに、わかった、と呟

いただけだった。……そんなに足手まといになるのが嫌かと。

ガラフ以外の人間を頼りにはしてくれないのかと、言いたかった。

最っ低。

少女は一人、塔の中に立ち尽くしていた。腰まである金の髪は

その瞳と同

様に光をなくし、握り締めた両の拳は下ろされている。彼女が手を開くのと同

時に同僚だったものの残骸はさらさらと風化していく。

リアアの瞳には決意。従えるのは大勢の死体人形。

その先頭に立つそれは、まさしく村長であった父の。

状況だけ見れば、もうこの殲滅戦は終わっているといっ、てよかった。

状況だけ見れば、の話ではあるが。

イアラはシヨウと別れた後、適当な木に背中を預け、ずるずるとその場に座り込んだ。これしきの傷と放っておいたのが原因か、足の傷はだいぶ悪化し痛みを増し、熱まで持ちはじめているようなのだ。

何より、動かしたときの痛みと云ったら、本当に泣きたくなつた。「どーしたのあ？」

明るい笑い声に視線を落とすと、一人の隠者ハミットがくすくす笑いながらイアラを見上げていた。

隠者は森に住み、悪戯好きで、薬学などに長けた種族である。妖精ルと良く似た体躯と、蜻蛉に似た羽根が特徴的で、身の丈はおよそ三十センチ程度だろう

か。森の賢人達とも呼ばれ、人を惑わし、気に入ったものには先に待つ危険などを忠告する者なのだといわれている。

「けがいたい？なおしたげよおか？」

「うるさい。失せろ」

「だめえだよ、こどもがこんなところにいちゃあ。あたしのおうち、こわさないでよ」

「……るせえ、ってんだよ。わたしは今機嫌がわるいんだ」

耐えかねたイアラが大剣に手を伸ばすと、隠者は急いで姿を消した。

次いで人の、足音。

「イアラ？なにしてるの、こんなところで」

聞きなれた声に顔を上げると、リリアがイアラの顔を覗き込んだ。

イアラは

少だけそれが敵でなかったことに感謝しつつ、曖昧に笑った。

リリアははつと顔をしかめると、傍らに膝を折ってイアラの顔を覗き込む。

「顔真つ赤よ。熱があるみたい」

叱りつけるようなその目を困り顔で見上げると、イアラはすぐに大丈夫だか

ら、と立ち上がった。やはりリリアに心配されるのはどうも慣れないらしい。

そんなイアラの気持ちなど知ったことかとはかりに、リリアは眉を寄せて彼女

の肩を押す。当然イアラは左からバランスを崩し、倒れた。

思いつきり泥の中に倒れこむと、体を起こしてリリアを見上げる。

「なにすんだよ！」

「血の匂いをするの。怪我を隠してるでしょう」

「ねえよ！此处は戦場だぞ、血の匂いなんざいくらでもするし、さつきこけた

のだってびつくりしただけで」

「周りには死体も怪我人もないわよ」

「ぐっ……」

口ごもったイアラは暫く彼女と睨み合うと、降参、と両手を挙げた。

軍靴を脱ぎ、七分丈のズボンをまくったイアラの左足を見たりリ

アは小さく

悲鳴を上げた。

「酷いよ、イアラ！壊死寸前よ、どうしてこんなに放つとくの!？」

「ご……ごめん（えしって何だ?）。リリアにはいつもほんと

悪いって思

ってるよ。いつも、あの……”アレ”るときもさ、ほんとありがとう
う」

「上官のリンチ？あれ、どうなったの？」

「声がでるようになってからめつきり。お陰で礼参りの機会がなくてさあ」

イアラがもつともらしくため息をつくとき、リリアは明るく笑った。「休めるところ、探さなきゃね」

難なくイアラを抱え上げ、歩き出す。明るく振舞っていても所詮は怪我人で

病人。抱えた体はぐったりして、元気が無かった。それがやけに、リリアには悲しく感じられた。

あたしは、これから、

「リリア」

「えっ？……あ、なに？」

途中で思考を打ち切られたリリアはあたふたとイアラに視線をもちどす。

「ほんと、ごめんな。心配かけて。……感謝してる」

「気にしないでよ。イアラは軽いし、小っちゃいしー」

意地の悪い笑みを浮かべたリリアを見上げ、イアラはむっと顔をしかめた。

どうやら幼く歳に合わない外見は少なからずコンプレックスのようである。

それに対して素で笑ってしまいながら、リリアは思考をもとに戻した。

こんなところで、イアラになんか会わなければ良かった。

「……………イアラなんて、大ッ嫌いよ」

イアラには聞こえないような声で、そう、独りごちた。他ならぬ自分に言い

聞かせるように。

五話

5

「下の隊は陽動か」

崖の下を見下ろし、ガラフがぼつりとそう言った。リックはその後ろで椅子

に腰掛け、どこから持ち出したのか酒瓶を開けながら肯く。

「で、敵さんが十分疲弊したところにオレらの隊が叩くんだとよ」

「……あいつは」

ガラフが消え入りそうな声で呟くと、リックは顔を上げて意地の悪い笑みを

浮かべた。ガラフも気づかないわけではなかったが、あえて何も言わず。

親友の口は相も変わらず皮肉のような、下品なジョークを飛ばすのだろう。

「やけにご執心だな。寝心地が良いのかい？」

身も蓋もない話である。……第一、それはいろんな意味で犯罪なのではと、

思っても言わない。面倒だから否定しない、というか反応しないのがこの大男なのだった。

ガラフが特に動じていないのがわかると、リックはかわいくねえなど肩を竦

めた。しかし黙り込んだところでなにかすることがあるわけでもなく。

仕方なく開けたばかりの瓶の中身をグラス二つになみなみと注いでガラフのところへ持っていく。そこで、彼が話すのを聞く。

「貴様も知っているだろう。あいつはまだうなされる」

「まだ……ねえ。俺らだつて軽く一年はそうだったろ？」

「……知らん」

ガラフは何気なくその手からグラスをひったくると、一気に飲み干してそれ

を崖下へ投げ捨てる。それは一番下に届くことなく空中で砕け、境界が切れて

いないことを二人に知らせた。

月明かりに反射する破片がまるで星屑のように落ちていく。

「お前さ、あいつをどうしたいわけ？」

リックの問いに振り返り、黙り込む。

自分はいいつをどうしたいのか。

こうして、戦地に連れて行くのが正しいことなのか。そう考えることは確かにあった。

半年以上かかって取り戻した感情を再び磨耗させるようなことを、それがた

とえ本人の望んだとこだとしても？

その上、ガラフは言ったのだ。暗にだが、『護つてやろう』と。

それは、彼

の感情にはなはだしく矛盾しているように思えた。イアラほど、ガラフが疎ま

しく思う人間は居ないのだから。

「……期待、か。奴が諦めるのを待っている」

「軍人として生きるのを？ 無理だね！」

リックはきつぱりと言い切るとガラフを見上げ、そのシャツを掴んで自分の

ほうへ引き寄せた。

こんなときも彼が表情を変えないのが、無性に悔しかった。

リックは、それに対しここぞとばかりに皮肉な笑みを浮かべてみ

せる。不快

感の現れであることは確かなようだった。

「ガラフはあいつをどん底から、もうちょっと上のどん底に引っ張り上げただけだ。道ずれならオレ一人で充分だった」

「……」

ガラフは無言でその手を払い、再びあいつは、と呟いた。

「答えを聞いていない」

「陣営に戻ってないそうさ。リリア「クレイもな」

リックはそう言っていると、自分もグラスと瓶を崖下に投げ捨てる。同じようにそ

れらが粉々に碎けるのを見ながら、リリア「クレイはどうなんだろうな、と、

ひとりごちた。

ガラフも崖の下に視線を戻し、さあな、と答える。

「オレたちには故郷など無いからな」

「案外リリアがイアラを」

彼が言い終えないうちにガラフは踵を返して歩き出す。椅子にかけてあった

マントを羽織りなおすと、テントの前で足を止め。

「……だったらなんだと言うんだ」

「リリアは、敵なのか？」

イアラが、ぼそりとそう言った。リリアはびたりと足を止め、イアラを見下

ろす。その空色の瞳に、恐慌が影を落とす。

「どうして、そう思うの？」

「中央の塔に向かって……から。リリアは、わたしが、戦えない

場所に……

つれて行きたいん、だと思っ」

言葉がとぎれとぎれになるのは、熱が上がっているからか。リリアはほんの

少しの焦りを感じて、足を止めた。

思っても居ないとつぴな言葉が、口をついて出てくる。

「逃がしてあげようか」

イアラはそれを困り顔で見上げた。リリアにとってそれは有益ではないし、

何より、自らを敵だと、裏切り者だと認めたその言葉が、胸を抉るようで痛かった。

「わたしはリリアの家族を殺すよ」

「あたしはイアラの仲間を殺すわ」

リリアの言葉に苦笑する。

「どっちにしる楽、には……死ねないな」

「イアラ、あたしは」

「わたしは、ずるい奴だ。リリアの、仲間に、なれないくせに、リリアの、敵、
にも、なりたく……ないんだ」

リリアは悲しげな表情でイアラを見下ろす。

湿った土に、水溜り。どこにいても知れない敵。まだ治りきっていない怪

我。そして動けないイアラ。回復したら、きっと軍の強い戦力としてこの村を

殲滅するであろう、重剣士。

それでもこんな悪環境の中、このまま置いて行けばいずれかの要素が必ず彼

女を殺すだろう。しかしリリアには、イアラを置いていく勇気など無く。

「イアラは”これ”がどんな行為か知らないんだよ。あたしは……こんなことになると知ってれば、イアラと友達になりはしなかった。こんなものを、あなたに見せるつもりじゃ、なかったのに」

「リリア？お前ら、一緒にいたのか」

イアラが、ぎくりと体を強張らせる。背後からの声はシヨウのものであった。

安堵を覚えてもおかしくないその状況に、しかし彼女は奇妙な胸騒ぎを感じた。

そんなイアラの不安をよそに、リリアは振り向いて笑う。

「うん。聞いてよ、イアラってば熱出して倒れてたのよ。今から陣営に連れて

行こうと思ってたの」

……嘘だ。

顔を上げたイアラを、リリアの冷え切った目が見下ろす。ざりつと齒軋りす

る音と同時に、喉に強烈な違和感を覚えた。

そのことにも不安を掻き立てられ、彼女の服を強く握る。シヨウはそれを、

疲労のせいで弱気になったのだと解釈したようだった。小さく笑って、少女の

頭を少し乱暴に撫でる。

「様無いな、イアラ。一緒に行こうぜ」

「ちゃんと守ってよね」

リリアは事も無げに笑って返すが、陣営と中央の塔は真逆の方角である。つ

まり今まで進んでいた方角に塔があるならば、シヨウは来た道を引

き返す必要がある。

無邪気に笑って二人に背を向けたシヨウの後姿に、リリアの右腕が伸ばされる。

「……ッ！」

イアラがシヨウに声をかけようとして開いた口から、言葉は出なかった。喉につかえて、言葉として形作られる前に消える。両手で喉を押さえたいアラに、小さくリリアの謝罪が聞こえて、やっと自分が何をされたのかを悟った。

言葉を、封じられたのだ。その感覚は、暫く言葉を失っていた頃に似ていた。

声が出せないもどかしさに顔を歪めてリリアの腕を弱々しく掴んだ両手は非情に振りほどかれてしまう。

「……っだ、め……っ」

やっとの思いで搾り出した声も空いた片手で塞がれ、再び齒軋りの音。

一瞬躊躇したらしかったが、リリアが右手を握り締めるのと同時に、シヨウの頭もぐしゃりと嫌な音を立てて潰された。四方八方に紅く放物線を描いて散っていく血液の軌跡は彼岸花にも似て、イアラは彼の体が崩れ落ちるのを呆然

と見つめ 自分の頭を抱えるようにして大粒の涙を零した。

声は、出なかった。

リリアは弱々しく足掻くイアラを押さえつけ、踵を返して走り出した。中央

の塔へと向かっている間中、親友の嗚咽を聞くのが怖くて、術を解くことが出来なかった。

これは、偽善だ。

そんなのは、わかっているのだ。

リリアは走りながら齒軋りした。術ではなく、行き場の無い感情を少しでも発散できるように。

白い室内に、明り取りの為に石の壁をくりぬいただけの窓。

目がさめて最初に目に飛び込んできたのはそれだけの景色で、此処がどこだか思い出すのにも少しの時間を要した。イアラはここが中央の塔だということ、を思い出すと、ベッドに寝ていた体を起こす。熱は、あらかた引いているようである。

窓の外は曇ってはいるが朝、ということとは彼女は一日眠っていたわけか。ちやっかりそれだけの睡眠を採れている辺り、実は自分ほとんどもない剛の者に違いない。

シヨウのことを思い出して、両手で顔を覆う。

「……リリア」

「かなしいの？」

「ああ」

聞こえた声に反射的に答えてはっと後ろを振り返ると、森で会っ

た隠者が窓

に座り、足をぶらぶらさせているのが見えた。どことなく哀しい目をして。

彼女は暫く俯き気味にそうしていたが、不意に顔を上げてイアラを見下ろす。

「……もり、しんじやった」

「わたしの友達も死んだよ」

そう言うとベッドに座っていた体を後ろ向きに倒し、両腕で目元を覆う。

「……………失せる」

「あのね、あの、」

「いい加減にしるよ、消されてえかよ！」

「あ……………」

隠者は怯えたように縮こまったが、イアラはそれを見ると消え入るような声

で「ごめん」と呟いた。体を起こし、隠者に向き直る。

「手伝え。ここから出たい」

「いいの？」

「リリアはわたしを、もう仲間とは思ってないから」

「しんじてる？」

「まさか」

笑って返す。

いつものように明るい笑顔が出来なかったのは、きっとまだ気分が沈んでい
るからだろうと、自己解釈。

自己解決。

……欺瞞。

シヨウの死を無駄にしないとか、言えない。わたしは何も出来な
かったから。

リリアを今でも信じてるなんて、言えない。わたしは敵でしかないのだから。

扉は未だ、重く閉じたままである。

「結界が消えた」

リックの声を聞くと、大鎌を抱えて眠っていたガラフはすぐに目を覚まし、

立ち上がる。

下の隊はほぼ全滅。

そんな報告から丸一日が経っていた。

「出る」

「そう急くなよ」

振り返ると、リックが銃に弾を詰めているのが見えた。司令官が現場に赴く

のもどうかと思うが、あえて口にはせず。

「お前はイアラをさがすんだろ？他のところの指揮も必要だろうが」

六話

6

「飛び降りてみる、とか」

「ここ、さいじょうかいでしょ？しんじょうよう」

窓から身を乗り出したイアラの腕を隠者が引いて止める。不得要領な顔をし

ているイアラを見上げ、大きくため息を吐く。

会ったばかりというのもあるが、隠者にはこの少女の行動が掴めずに居た。

「なあに、あせってるの？」

「焦ってんじゃねえよ、ただ」

隠者が首をかしげる。少女は窓の外、その向こうの崖の上にある陣営を見て、

ため息をついた。彼女は予想が外れて居なかったことに失望しつつ、その下へ

と視線を移し、居たたまれなくなって前を向き。

「此処にいたくないんだ」

しかし、扉を壊そうにも大剣は森の中に置いてきてしまった。それに、どう

せこちら側からは開けられないように術でもかけてあるに決まっているのだ。

あまり考えても仕方の無いことのように思えた。

しかし、それ以上には無い頭をいくら捻っても出てはこない。

病人を装うにしても、別に人質として連れて来られたわけでは無いのだから、

無意味である。

「馬鹿だから、こんな所に一人きりじゃ何も出来やしねえ」

自嘲。

扉を睨みつけ。

それは未だ、開く気配を見せない。

「……無理よ」

扉の向こう。その廊下を隔てて向かいの部屋。

リリアは強く、そう言いきった。

周囲に集まった村人達は、口々にイアラを殺せと彼女に言うが、

リリアは頑

なにそれを拒むのだった。そんなこと出来ない。出来るわけが無い。確かにリ

リアの力ならば今のイアラを殺せるだろう。

周りの村人に共通してかけていたのは思慮。

リリアがイアラを思う気持ちとその束縛性を考慮に入れていなかったこと。

「あたしにあの子は殺せない……」

もう一度、力なく呟く。

「何故そう思う？この村一番の呪力を持っていながら」

「みんな、あたしを何だと思ってるの！そんな……理屈で片付けないでよ、そ

んな……」

リリアは机に手をついて俯いた。今にも声を上げて泣いてしまいたい衝動を

押さえてそうしているのを見て、周囲の人間は困り顔で話し合いを始める。

リリアは、ぎりぎり歯軋りしながら机に爪を立てた。

心の支えにでもなあってやってほしいと思う。あいつはどうも強がるから。

リックと話したとき、彼がそう言っていたのを思い出していた。

無理には言

わないと笑った彼の笑顔が、どうにも離れなかった。きつと、ガラフと自分の

関係にイアラとリリアの関係を重ねていたに違いない。

違うのだ。

自分こそが、支えられていたのだ。

自分こそが。リリアは泣き出したい衝動を必死に抑えていた。木造の机の天

板に立てた爪が割れて赤い線を引くまで。

やがて、彼女は横を通り過ぎた兄の姿に気がついた。彼はその幼さを残した

目でリリアを見据えると、扉に手をかけて部屋の中を見回した。

妹を頼みましたと、静かに言う声がリリアの耳に届いたような、気がした。

イアラは顔を上げ、立ち上がるために構えた。このときが早く来たのが、堪らなくうれしかった。これで、この狭苦しい場所からおさらばできるのだ。

重い扉が外から開かれ、幼さを残した顔立ちの若い男が入ってきたのを見る

と、彼女は哄笑のような笑みでもって男を見上げる。

「殺し屋さんかな？」

馬鹿にした響きを極力控えてそう言うと、半ば睨むような目つきで、挑むよ

うに立ち上がり。対する男もぐつと固唾を飲み込んだようだった。

「こんな、子供が……。いや、構わない。同胞の痛みを体感するがいい。……」

楽に死ぬると思うな」

「随分真面目だね。戦争は人類の間引きだとほざいた哲学者も居る

らしぜ？」

「黙れ！」

男が腰の剣を抜く。イアラはそれを鼻で笑い、男の肩越しに開け放たれたまま

まの扉を見据えた。闇夜に獲物を見据える、猫科の目。

「扉を、開けたな」

男ははっとした風情でそれを振り返る。その隙に凄まじいスピードで殴りか

かったイアラに気づくと、その腕を掴んで受け止め、窓に向かって投げ飛ばした。

イアラは難なく窓枠を蹴ってベッドに着地し、足元のシートを見ると何を思ったか不敵に笑った。そのままの姿勢で、彼を観察する。

個人戦が、こんなに楽だとは思わなかった。相手をじっくり観察し、対策を

考える時間が取れるなんて。

男は剣を構えて走ってくるが、どうも戦いには慣れていないように見える。

初戦がイアラ相手なのだとしたら、彼にとってこれ以上の不運はないように思う

われた。

彼女は男が剣を突き出す瞬間にシーツを勢い良く上に放った。それは広がっ

て彼の視界を塞ぎ、男が舌打ちしてそれを払おうとすれば、剣に絡み付いて邪

魔をする。そうして視界が開けた時にはもうそこにイアラの姿は無い。上かと

見上げた顔面に非情の踵が一撃を浴びせた。

悲鳴をあげ、顔を両手で覆った男の手から剣を奪うと、イアラは

背後からそ

の胸板を貫いて引き抜く。

歯軋りする音を聞き、男の首を撥ねてその屍の上にシーツを放った。

紅がじわじわと広がったが、それでも直に見るよりはましなのだった。

「……はっ。あはは、ガキだと思って術使うのが遅えんだよ、屑野郎が！」

「あ、あの、しつれいだよ」

隠者が物陰からひよいと顔を出すと、イアラは急な脱力感を感じて

その場に座り込む。

「なおす？」

「頼む」

出てきた隠者がちらりと、もう大半以上が紅に染まったシーツを見た。少女

は笑ってそれを流し、ふと真顔になる。

「怖いか」

「うん。ちよつとだけ」

「良いんだよ、それで。それが正しい反応だ」

そう言った肉食獣の瞳は、少しだけ哀しげだった。

「ドル力が死んだ」

老人が咳くのと同時に、リリアが大きな音を立てて立ち上がる。かたかたと、

小刻みに震える肩に手を置かれる。

「奴を憎む理由が出来た」

「……いや、兄さ、ん。……いやあああああっ！」
崩れ、落ちる。

知りたくも無かったこと。

わたしはリアの家族を、

殺すよ。

胸が、張り裂けそうだと、ああ、こんなときに言うのかと。
冷静な自分は考えていた。

「大分降りたよな」

イアラがそう言うのに隠者も頷くが、一向に、一階に着かない。

「おい」

「うん」

足が、止まる。イアラはさげていた剣の柄を無造作に持ち直すと、
周囲を見

回した。明り取りの小窓からの微かな光だけでは影しか見えないが、
何か”い

る”のは判った。それも、大勢。

硬くて無気質な床は足音を良く通した。その造りに感謝しつつ、
一方で参っ

たな、と肩を落とす。

塔の中は意外と広く、何も無い。石で出来た室内に石柱が何本も
立ってこの

天井を支えている。単なる櫓か、或いは戦う為だけに作られたよう
な。

「死の、おい」

「ああ。死体人形か」

「にげよう？ たたかっちゃだめ」

隠者が怯えた様子でイアラの服を掴む。彼女はそれにゆっくりと
首を振り。

でも一応”忠告”とやらなのだろう。森の知者に気に入られると
言うのはま
れな経験なので、気持ちだけありがたく受け取っておく。
「囲まれてそうだしな。悪かったな、お前は逃げればいい」
その目はひたと暗闇を見据えていた。そして、その先に居る”な
にか”を。

……はずれか。

ガラフは舌打ちすると大鎌をふって血糊を払い、足元の惨状を見
下ろした。

これで四度目 此処は東の塔である。

どうも、どこの塔も造りは単調で、同じ場所を延々と回って居る
ような錯覚

にすら陥いりそうなのが気に食わなかった。

血の匂いに耐えかねて背を向け、歩き出す。窓からの明かりでぼ
んやりと、

屍を見るのが嫌だっただけかもしれない。

「…イアラ」

残るは中央の塔、のみである。

そのイアラは延々と、死体人形を斬り続けていた。

実力で勝てないから数で勝負とばかりにわらわらと、尽きること
を知らない

それを。

恐らく使い手にも脳があるのだろう、頭を使った攻撃を二、三体
で連携して

行ってくるので分が悪い。加えて暗闇による視界の悪さ。前方から
の者を殴り

飛ばすと背後からの斬戟を受け止め、弾く。

しかし、ゾンビに囲まれて延々と格闘とは、まるでいつかルームメイト達と

見たホラー映画のようである。映画と言うのは新しい種類の娯楽らしい。最近

町でははやっているのだと言っていた。映写機でフィルムをまわし、それをス

クリーン　イアラ達が見たときは白い壁紙で代用したが　に映して見る。

斬新だと面白がって見ていたが、現実になってみるとなかなか笑えない。ま

ず臭いだけで吐き気がする。それをこらえて剣を振るい、腐りかけの体を砕く

音も独特で気味が悪かった。そのうえそれに触れられたり殴られたりすれば、

それこそ死にたくなつた。

勢いそつけて剣を一閃、何人分かの首を飛ばし、壁までたどり着くと、それ

に背中を預ける。肩で息をする。

そういえば何時間これが続けていたのか、膝が大いに笑っているが、状況的

には全く笑えない。

「かやくのにおいがするよ」

隠者の言葉に頷き、辺りを見回す。剣と、素手。その中に銃を持った者はや

はり目立っていて、すぐにわかった。イアラの視線に気付いた”そいつ”は再

び仲間内に隠れようとしたが、彼女の目はその動きを見過ごさなかつた。さつ

さと片付けるためにも飛び道具は面倒なのだ。

道を塞ごうとする者はことごとく斬り捨て、半ば強引に突っ切っていく。腐臭に顔をしかめ、吐き気を抑えながら。背格好から見て恐らく少年と思われるそれに向かって剣をふりかぶり、その顔を見て思わず手を止めた。

だって、それは。

”そいつ”はまるでその瞬間を待ち焦がれていたとでも言うように口元を吊り上げ、少女に銃を突きつけた。間髪入れずに安全装置を外し、引き金を引く。

「が……っ！」

わき腹に二、三発もらい、後の銃撃は床を転がるようにして避ける。弾切れ

になったのを確認すると、イアラは激痛に顔を歪め、喉元まで出かけた悲鳴を飲み込んで”そいつ”を見上げた。

「……シヨ、ウ」

銃を投げ捨てる音。続く殴打の嵐。堪えていた吐き気に追い討ちをかけられ、胃に残っていたものをすべて吐き上げる。

その間も蹴られ、殴られ、特に腹部の銃創を狙われるのは、もう嫌がらせの域を超過していると思う。

「おねえちゃ……」

「ッ……逃げ、てる……って、言っただっ」

半泣きで寄ってきた隠者をはたき、立ち上がるうと試みたところに蹴りを入れられ、上半身を支えて突っ張っていた両手は石畳を掻いた。

胸倉を掴まれ柱に叩きつけられて息を詰らせる。死体人形が、石を握りこん

だ拳を振りかぶるのがぼやけて見えた。

どうして……

わき腹の傷を庇いながら、頭だけはやけに冷静に考えていた。

こいつらはわたしに止めを刺そうとしない？

……殺す気が、ない？

……殺したく、ない。

リリアは口を真一文字に結び、中央の塔を見上げた。

兄を殺した、憎いイアラ。支えあってきた、大好きなイアラ。

お願い、死なないで。許せない、殺してやる。相反する感情の激流が、彼女

の指先を惑わせているのは違いなかった。

震えていた口唇が、またも自分に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「……とどめ、刺さなきゃ」

消え入るような声で。

その後頭部に、銃口が当たった。リリアは半ば安堵したような表

情で両手を

下ろす。

「リック指令、あたし、あの子を守りませんでした」

七話

7

容赦ない殴打は止まる気配が無い。そして彼女を殺そうとする気配も無い。

かといって、このままでは今に。

ごっ、と鈍い音がして、床に倒れる。もしくは壁に叩きつけられる。何処が

どうなんだかもはや判然としないが、取り敢えずこれ以上頭を打ってバカにな

ったら困るななんて、アホみたいなことを考えていた。

まともに動かなくなった体をそれでも必死に起こそうと石畳を掴んでいた手

が、唐突に床を離れる。何が起こったのか理解できずに居るイアラの首根っこ

を掴んだ死体人形は、躊躇いなく彼女を扉の方へ放り投げた。

扉に叩きつけられる痛みを覚悟していたイアラの体はしかし誰かに受け止め

られ、一向に落下する気配は無く。それでも今までに受けた傷の痛みが容赦な

く全身を駆け巡った。

「ッ」

背中を反らせて声にならない悲鳴を上げ、自分の体を抱いている人物の服にしがみつく。

彼女を受け止めた人物は左手に持った大鎌で一閃し、死体人形たち動か

なくなつたのを確認してからイアラを見下ろした。

よくも、よくもこんな醜態を一番見られたくない奴に晒してしまつたものだ。

少女は涙目で見上げた彼が相棒であるのに気づくと、殴られて赤い顔を更に

赤くして、口をぱくぱくさせる。

「な、ガ……がはっ、あ」

「話すな。聞き苦しい」

そう言ったガラフを見上げて、思いっきり顔をしかめる。

重傷の怪我人に言う事がそれかよ！

隣に居たリックが見かねたようにその腕からイアラを引っ手繰り、苦笑した。

「心配をかけるな”だつてさ”」

通訳の後、ガラフは余計なお世話だと恨みがましい視線をリックに、次いで

その背後に送った。つられてイアラもそれを目で追い、リックの肩越しにリリアと目が合った。

彼女は一瞬はつと目を見開いたが、すぐに泣きそうな顔で目を逸らす。

「リ……」

「痛い？傷」

「少し、だけ」

「嘘。強がり」

イアラはしゅんと肩を落とした。この人の笑顔が暗いのは私の所為だろうか

と、つい、考える。

リリアはそんなことはまるで見えていないように目を閉じる。

「あたし、家族を選んでなんて多くを失ったんだろう。結局どちらも失って……でも」

リリアは前に進み出ると三人を振り返り、哀しげに笑った。

「イアラを選んで、あたしは同じ事を言ったんでしょね」

「無意味な考察だな」

ガラフは感情の読み取れない声でそう言うと、大鎌の刃をリリアに向ける。

イアラは体を起こし、リックの腕から逃れようと必死になってもがいた。小動

物が人間の手から逃げようとするような、そんな弱々しいものでしかなかったが。

「やめ……」

「銃殺よりは楽に済むぜ。例外は認めない」

いつもの彼からは想像も出来ないような低い声でリックが言い放つ。過去に

も、こんな経験があったのだろうか。

イアラは愕然として2人を見比べた。心のどこかで理解してはいたものの、

ガラフがリリアを殺したり、リックがガラフにそれを指示するのを見たくなかつたのだ。

そんな彼女の気持ちと反比例してガラフの鎌は弧を描き。

「いやだ……ガラフ、後生だからっ」

リックの腕を必死にはがそうとしているイアラを無感情に見つめると、リリ

アは満面の笑みで彼女に小さく手を振った。

「ばいばーい、イアラ」

「ッ!!」

大鎌が容赦無く振り下ろされる音。

無音。

「もう行ったかな」

楽しそうな少女の声に、男は答えるつもりは無さそうだった。ただただ、足

元で飛び跳ねるように歩く金色を見つめる。

「ガラフ？」

「歩いていいのか」

「大丈夫だって、もう治って……っぎゃ　！」

周囲を歩いていた人々の足が止まる。彼等の目線の先には、イアラが未だ完

治していない傷をガラフのつま先でつつかれ、うずくまっているのだった。

「……………治った」

「あああ、痛、痛いっ！ちよ、やめ　っ！ごめんなさい、治ってませんす

んませんっ！」

ガラフがつつくのをやめると、少女はわき腹を押さえて大きく息を吐いた。

さっさと歩いていく彼の背中に説教魔人とか根暗男とか言いつつついて行く

が、彼がその何を考えているんだかわからない視線を向けると、青くなつて黙

り込む。

やがて病院の白い通路は途切れ、広いベランダに出る。眼下に広がっている

のは中央街の入り組んだ町並みだが、相棒の肩によじ登ったイアラが見ていた

のは、その向こうの海であった。

「……感謝、してはいるんだ」
小さく、ガラフにしか聞こえないような声でそう言った少女に、
彼は特に反
応をかえさなかった。

あの日、ガラフは確かに大鎌を振り下ろしたけれど。

「……………なんのつもり？」

怪訝そうな顔をしたリリアを無視して、床に刺さった刃を抜く。
それに対応

してか、リックはにへらと気の抜けるような笑みを浮かべた。

なかなか人好きのする顔だったが、それはリリアに対する挑発と
もとれた。

「いや実はさあ、オレって堅苦しいの嫌いなわけよ。……………ガラフ
が人殺すの

も嫌いだしよ」

「そんな勝手な！」

「誰がためえのためにそこまでする？オレはイアラじゃねえんだ。

ガラフが余

計な殺しをするのが嫌なんだよ、オレは。解ったら三日後の貨物船
に潜り込め

るようにしてあるから、それに乗って何処にでも行け。そして二度
と戻ってく

るな」

文句を言おうとしたリリアに言い返し、踵を返す。そう、あの時。

リックの目が細くなる。怒りに震えているような、悲しみに耐え
ているよう

な。やるせない 想い。

あの時のオレに今の力があつたなら。

イアラはうっすらとその表情の変化に気付いてはいたが敢えてそれ

を口にはせ

ず、彼の肩越しに手を振った。

今更、シヨウに撃たれたわき腹が痛かった。

「ばいばい……リリア」

ぺたりと床に手をついた少女の眼前に残ったのは、無表情に立って自分を見

下ろすガラフ＝Gだけである。

「……今日の件」

リリアはびくつと肩を震わせ、ガラフを見上げる。

顔は、見えない。見えたとしたら、どんな表情をしているのだろうか。

「一番貴様の気持ちを解っていたのはイアラだけなのだろうな」

「……ええ」

「ならば報いる。生きることが地獄でも」

「……生き地獄か。いい言葉ね。まるで今のあなた達のようにないの……ガ

ラフ＝G、逃げ出す勇気も無いくせに」

「……魔物だから人の中で紛れては生きられない」

そう呟いて踵を返した彼の背中に、何を報いるのかと訊いた少女の問いはも

のの見事に無視されてしまう。

リリアはふと自分の状況を思い出してか、下をむいた。

塔の中に、小さな笑い声が響いていた。少女のような、女性のよ
うな笑い声。

いつしかすすり泣くような声も混ざり、ただ、静かに。

灰色の廊下。自室への道。ルームメイトは一人足りないが、見慣

れた顔の沢

山並ぶ部屋。暫くは眠り続ける自信が有った。イアラはしゅんと肩を落し、と

ぼとぼと歩いていった。

「わたしが言うべきなのかな」

どこまで過保護なのか、ガラフは律儀にここまでついてきていたが、終始無

言の無表情であった。

彼はしかし不意に立ち止まると、イアラと向き合う形で膝を折った。視線を

合わせようとしているらしいが、それでもかなり高い。

イアラとしてはそれに対して腹が立つやら、その秀麗な顔を間近に見て思わ

ずどぎまぎするやらで、ひどく複雑な気分である。顔を赤くしたり青くしたり

しながらも、彼に負けじとしかめっ面で返す。

「な……なんだよ」

「知らせはとうにしてある」

「そりゃ良かった。けどお前がしゃがむ理由がわからん。私の顔なんか見えて

何が楽しいんだ」

「……顔が」

「え〜と……表情？」

……しかも肯かれてしまった。

そんなに面白い顔をしているだろうか？軽く悩みながらもじりじりと後退す

る。

やっと立ち上がったガラフの後ろを小走りについて行く。これでも、彼にし

ては歩幅が小さい方であるというのが、イアラにとっては腹立たし

かったりす
る。

自室の扉の前に立った彼女の襟首をガラフがさも当然のようにつ
まみ上げる

と、ごく自然に小脇に抱えて歩き出した。

「ガ、ガラフ？わたしは歩ける！じゃなくてあれ、部屋！」

「リックが駄々を捏ねて同室になった」

「……なあ、それ何の罰ゲーム？」

「寝室は別だし、ガキは襲わん」

「おそつ……？ええい、寝るぞ、寝てやるぞこの状況で！寝てると
すっげえ重

いんだぞ！」

錯乱したイアラの意味不明な脅しにも、身長差を活かした反論を
する。

「……おとす」

「下ろせ！」

イアラは怒鳴るが、ガラフはそれを華麗かつ鮮やかに無視、その
まま歩き続
ける。

まったくもって不本意極まりなく、ある意味戦場より過酷な三人
暮らしの始

めは、その終わりと同様に、感動もへったくれもありはしないのだ
った。

七話（後書き）

起章終了です、お疲れ様でした。最終的にバッドエンドですが、最後まで読んでいただけると嬉しいです。

承章：一話

イアラは大きな欠伸をして体を起こした。カーテンを開けると空はうつすらと霏がかかって、太陽はまだ低い位置にある。早いとも遅いともいえない時間帯である。彼女はベッドから飛び降りるとばさばさの金髪を手早く纏め、未だに寝ているリックの頭をグーで殴って起こす。

……否、それだけでは起きない。

「起きろ！」

「良いんだよお、休みなんだから」

良くない、と怒鳴って襟を掴みあげ、リックを洗面所に放りこむと、いつもと変わらず部屋の隅で大鎌を抱えてうずくまるようにして寝ているガラフに向き直る。彼が薄く目を開けたのを見て起こす手間が省けたと安心したイアラだったが、小さく、彼の咳きか聞こえて足をとめた。

彼女は彼に向きなおって、聞き返す。

「……なんだって？」

「……あと……五分」

「……つなに寝ぼけたこと言っただけだ、起きろ！」

一喝。それと破壊音。

相変わらず女を捨てているとかは置いておき、これで大体は他の部屋の連中も起きることを余儀なくされるのである。

リックとガラフは戦場での働きもさることながら、休日の休みっぷりもまた凄まじいものであった。

とにかく良く寝る。

そして起きない。

三人で生活するようになってからと言うもの、休日のたびにこれだからやっていられない。仕事のと

きは何も言わなくても起きてくるくせに、である。その上食事も禄に作れない　というと語弊がある

か。リックは作れなくもないが、作らせると栄養が偏るので、結果見かねたイアラが作るようになった。

ガラフに至ってはハンバーグを作ろうとして何故か鍋を爆弾に変えた前科がある。

まったく、これをあの二人相手にきやあきやあ言っている女性陣に見せてやりたいものだ。頭の軽い

奴はこれを見ても「可愛い」とか言って騒ぐのだろうが。

朝食を終えてぐったりと机に突っ伏している少女の肩にリックが手を乗せて笑う。

「おい、大丈夫かー？朝からそんなじゃいかんよ、若いのに」

「誰の所為だよ、誰のっ……」

呆れ顔でそう反論し、リックを見上げると目を逸らされた。一応自覚はあるらしい。

「んー、まあ……ガラフは寝起き悪いし、駄々こねるしなあ」

「……駄々……捏ねてたんだ、あれ」

唐突に大声を出してどたばたと走り去ろうとする彼にどこか行くのかと声をかける。

「ダリアとデート！」

「……刺されるなよ」

手を振りながら、苦笑する。それから視界の端に寝なおしているガラフを捉えて、本日何度目かの破壊音を響かせたのだった。

彼らと暮らし始めて、一ヶ月が経とうとしていた。

「リユーク？また此処にいたのか」

イアラの声に、図書館へ続く階段に座って頂垂れていた少年が顔を上げた。彼はイアラより四つほど

年下だが、彼女が小柄な所為か彼が大きい所為か、背は同じくらいなので、あえて同い年ということに

している。イアラ自身は、かなり釈然としないところもあるのだからだ。

彼 リユークは、スラム育ちの少年である。外見は普通の少年だったが、力仕事や闘技場のイベント

に参加で日銭を稼いでいるので、喧嘩はなかなか強い。いかにせん、学校に通う金が無いので、頭は良くないようだったが。

そんな彼が、なぜか最近ここによく来るのだ。イアラは会う度に不思議に思う。

「また追い出されたのか？」

「うん」

「また本を持って帰ろうとしたとか」

「ちがうぞ！今日は読みにきたんだ！」

「読めないだろ、字」

イアラが笑うと、少年は顔を赤らめて読めるよと反駁し、再び石段に腰を下ろす。前科もちは苦勞す

るなというと、イアラも隣に座った。広い敷地は更に広くひろがって見えた。

こんなときは、少しだけ背が低くて得した気分になる。損の方が多いのには変わりはないが。

「それでどうしてこんなところにいるんだ？」

「友達が来ないんだ」

意外な言葉であった。闘技場で初めて会ったときは、皆敵だとすれたことを言っていたのを覚えてい

るが、やはり彼も歳相応に少年だということだろうか？

度々彼女が闘技場へ遊び兼小遣い稼ぎに行っている事は、ガラフ達には絶対内緒である。

「ともだち？」

リユークは頼りない顔を上げて、小さく、小さく。

もう一度だけ、来ないんだ、と呟いた。

リユークの友人、ドナという少女は、ずっと家に閉じ込められているのだという。

家というのは今まさに目の前に建っているこの大きな図書館で、場所は首都セラアの郊外に位置している。自然が良く整備されている為か町のほうより空気が綺麗で、イアラは好んで此処に来る。ドナはその館長の一人娘らしかった。

一方リユークの住んでいるのは中央のスラム街、貧民と犯罪者の溜まり場で治安も悪く、ときどき軍の治安部隊との銃撃戦をしていたりする。しかも彼は前述の通り、乱暴な性格であることも考慮に入れて。

住む環境が間逆なのである。

「いつから友達なんだ？ 接点無えぞ」

「二年前、夜に迷い込んできたのを助けてやってから、なんだけど「夜う！？ 良いとこのお嬢さんが？」

彼は小さく頷いて、話を続ける。この少年も、その理由については知らないらしかった。

「で、それ以来必死に文字を勉強して、手紙を書いて、返事がきて、

……」

「要するに文通してたと」

「そう！ 此処で会う予定なのにあいつ、来ないんだ」

「そりゃあ、ダブルで一大事だな」

背後でそう言ったのはリックである。顔に引っかけ傷やビントの跡があるところを見ると、どうやら

ふられた後らしい。周りが騒がしくなってきたが、気にしないのが良いだろう。

人々がばたばたと走り回る中で、彼らは暫く向かい合って黙り込んでいた。

「……いつから」

イアラがしらけたような顔で聞くと、最初から、と笑う。

「なにせたった今、その木陰でふられてきたんだからな！」

「ふうん」

「だからなんだよ」

一様に冷たい視線を向けられたリックは、それを取り繕うように笑った。

「今、連絡員の隠者が来たんだよ」

「連絡員？なんで？」

「え、ほら今の騒ぎだよ。若いのが十二、三人図書館に立てこもってんだと」

「はあ、それを私らでなんとかしろと？」

「一個小隊出すのも面倒がつてんだろうよ、向こうとしては」

「は。……いい迷惑だぜ」

イアラは呆れ顔でため息を吐くと、リユークの方をみた。帰れよ、と声をかけたが、動こうとしない。

「危ないぞ」

「イアラだって」

「わたしは良いんだ。強いからな」

リユークはきっぱりと言い切ってはばからない少女を睨みつけた。どう見たって同い年に、もしくは

それ以下にしか見えないこの少女の、何に自分が劣るのか。まして自分は少年で、少女である彼女は力

では彼に勝てないに決まっているのだ。そんな思いが、当然、生ま

れた。

睨みあっていた彼に、イアラはさらに厳しい視線をぶつける。リユークが一步退いたのを確認すると、つまらなさそうに目を逸らす。

「お前は来るな」

リックは少しだけ驚いたような顔をしてそれを見ていた。彼女の者でないような、いつもよりも低い声。どうあっても連れて行きたくないのだろう、彼女は。

「リユークはきつと死ぬから」

「しつ　死ぬもんか！」

リユークはなおもイアラを睨んだが、彼女はもう興味を無くしたように、それを振り返ろうともしなかった。自分程度に圧倒されて引き下がるのなら、大勢にあの目を向けられたら彼は踵を返して逃げ出すに違いないと思ったのだ。

イアラは背を向けたままこの程度か、と残念そうに頭を振り、リックに向き直った。

「詳しい状況は」

「いいのか？」

「言っただって聞きゃしねえよ」

「寝かしつけりゃいいじゃねえか」

少女の視線が、リックのそれと重なる。彼なりにイアラを心配しているのがわかったが、敢えて目を逸らすと図書館を見上げた。

それから思いついたようにリユークを振り返り、皮肉に笑うと再びリックを見上げ。

「どうせびびって逃げるだろ？それまでならせいぜい”守ってやる”な」

苦々しい言葉が、暗に帰れと促す。リックには、シヨウを喪ったときの彼女の姿が思い出された。そ

れとも、これは感傷だろうか？

視界の端で悔しげに拳を握り締めている少年を、少しだけ哀れに思うのだった。

「……なんだ、それは」

後から到着したガラフは、酷く不愉快そうな響きを籠めてそう言
つてリユークを見下ろした。対する

イアラはおどけて肩を落とす。

「ついて来るんだとよ」

彼はそれを見下ろし、複雑そうな目でそうか、と頷いた。特に異
議は 否、まずリユーク自身に対

して興味がないようであった。少年はうすうすそのことを感じて
いるのか、彼の、まるで表情を変え

ない彫刻のような顔をいまいまいげに見上げているのだった。リッ
クが手早く事情を話し、背を向けた

ガラフのマントを後ろ手に引き寄せる。

ガラフにも話したい意思が伝わったのか、仕方ないと背中を寄せ
た。小声で辛うじて聞こえる距離で
ある。

リックはイアラの背中を見つつ、小声で話す。

「あいつな、たぶんまだ引きずってると思うんだよ。リユーク
が無茶しないようにそれとなく気を
つけてくれ」

彼はそんなことだろうと思ったと肩を落として、俯いた。

「迷惑だ」

「駄目か？」

ガラフは暫く沈黙を守っていた。リックの頼みには昔から碌なも
のがないが、今更何か言ったところ

で変わりもしないし、 何だかんだといって結局引き受ける自

分が居るのだ。情けないことに。

「……ふん。あいつやお前とさして変わらん」

「ひでえな、おい」

苦笑して、近づけていた背中を離す。

何年ぶりか。こうして背中越しに何かを話したのは。リックが司令官になりたての頃は面と向かって話をするのにお互い違和感を覚えたものである。

短い会話の後、リックは他の二人も呼んで小型の通信機を配った。最近作った物らしい。まだ試験段階だが、彼の技術には定評があるので、素直に受け取っておく。

それを確認すると使い方を簡単に説明し、全員に銃を渡す。リックはその重さに困惑してイアラを

見上げたが、彼女は無視して　そう、怖いのなら来るなどばかりに！　リックに指示の先を促すの

だった。彼はその行動に相変わらず違和感を隠せないながらも先を続け。

「オレはモニタールームに向かい、そこで指示を出す。他三人は別々に行動したほうが目立たなくていいだろう。なるべく立てこもり犯も人質も殺すな」

「わかった。リック……ガラフ、リユーク」

3人が顔を上げると、銃をホルスターにさしたイアラが彼らを見上げた。まっすぐに、刺すような眼光。獣のような。

「信じてる」

一言、それだけ言って歩き出したイアラの背中と、かけるだけ掛けられたプレッシャーに止めを刺さ

れて泣きそうな顔のリユークとを見比べて、リックはため息をついた。相変わらず表情には出さないが、

その感情はグラフも同じらしかった。

しいて言えば、イアラのそれは癖なのである。リリアを失った時から、団体行動のとき彼女は無意識

の一言で仲間達にある種のプレッシャーをかけてそれに臨む。グラフ達とて例外ではないのだろうか、

どうも未だに釈然としない。なにより、それは。

「……卑怯だぜ」

彼女には聞こえない程度の小さな声で。リックが小さく肩を落としました。

『チツ、酷いな。リック、見えるか?』

「おう、ばつちり。良いの使ってるな、ここ」

画面の中でイアラが顔をしかめる。暗いので実を言うとリックのほうからはそこまでよく見えるわけではない。

ただ、内部の血なまぐさい雰囲気はそれだけで見て取れた。

本が散乱し、ところどころに人が倒れている館内を薄暗がり映し出している。本棚の側面に地が飛

んでいたりするのは、抵抗した者を射殺した痕だろう。イアラでなくとも反吐が出る光景である。

このモニターというのは、ここの館長の田舎で採れた魔導石で出来ていると聞いた。魔法を使ってい

た先人たちの遺産なのだろう。そもそも魔法なんて彼は信じては居ないが。

それでも高度な文明の遺産をこんなことに使うのは、まったく不本意だった。

「まあ、お前らなら心配要らないだろうけどな」

『バカ言ってるなよ。周りが良く見えねえってのに』

「アタマ使うつて大変よ？」

『お前ムカツク！』

『……じゃれるな。行くぞ』

静かな声が割って入る。後に残るのは静寂。ブツブツ文句を言いつつも銃を構えるイアラを見る目つ

きが、自然と険しくなる。強さなど何の役にも立たないと、あの時泣いていたではないか。シヨウを守

れなかったと。なのにまた、リユークを連れて行こうと言ったのは何故なのか。

或いはイアラに対するそれは、ねたみであり憧れであり、悲しみなのだろう。リックは立ち直れな

った。ガラフについて行く勇気がなかった。再び大切な者を、或いはガラフを失うのが怖くてたまらな

かったのだ。そんな弱さを持たない、あるいはそんな弱さも抱えて尚ガラフの後ろを歩く彼女が。

……やめよう。

リックはイアラから目を逸らし、リユークを見る。

「大丈夫か、リユーク？」

やめるなら今のうちだというニュアンスをこめてそう言うが、リユークは小さく頭を振る。

『大丈夫に決まってるっ！』

その声は震えていて、とてもじゃないが大丈夫とは言いがたい。不安定で弱々しい、どこか初陣の時

のイアラと重なった。彼女はもう少し強がり方が上手かったような気もするが。

何を脅えるのか、無意味に銃を持ち直したりする姿が。

「近くに人は居ないか？居たら無用心に近づくなよ」

『いねえ』

子ども扱いするなど不満そうな声にリックはわかったと相槌を打つと、見取り図に目を落とす。

図書館は広い。二階が無く、代わりに地下一階があり、そこにもずらりと本棚が並んでいる。地上の方

方は一般向けの図書が多いのに対し、こちらは比較的マニアックなものもとい専門的な学術書や研究用

の文献が並んでいて、普段はリックのような半マッドサイエンティストが入り浸っていることが多い。

館長たちの家は建物を違えて地上のスペース約三分の一ほどを占めていて、それもまた莫迦のように広い。

本館である図書館の大きき内容は前述の通りであるが、地上一階については一般向けに、さらに三つのブースに分けられていた。

大きく分けて右から文庫本、児童書、（広く知られている）専門書。三人はこれらを一つずつ担当していることになる。特に児童書のコーナーは子供連れが多いためか、中央にぽつかりと広く開いた、子供が親と座って遊びながら本を読めるスペースがある。そこには二十人ばかりの人間　生死は確認できない　が集められているのだった。

他のブースは狭い通路しか映しておらず、見取り図では盗難防止の為か本棚の配置が机の周りを除いてすべて迷路のようであることがわかる。今更こんなものを見ずとも、大体の配置は彼の頭の中にあるが。

さて、視認出来る分には人質は三十人弱だが、これだけ広い建物である。　よもや、これだけしか人が居ないわけではあるまい？

リックは状況を再確認すると、厄介ごと押し付けやがって、と誰にとも無く舌打ちした。

イアラは銃を構えたまま、本棚の影から向こうをのぞいていた。彼女が居るのは文庫コーナーで、あ

まり広い場所は見えない。開けた場所で大勢対大勢の戦と違い、迷路のような場所で多勢対無勢。いつ、

何処から相手がくるか、不安に心臓が早鐘のように鳴った。

今に後ろから人が来るかもしれないのである。此処でなくても同じことだが、こんな思いは司令官殿

にはわかりはしないのだろうと、意地の悪い考えが頭を過ぎった。

願わくば、もうこんなハードボイルドの真似事は勘弁して欲しいところである。

「リック、そつちなにか見えるか」

『脳みそぶちまけて笑ってるイカレ頭が見えますが』

「……。もういい」

むすつとして返した耳元に、後ろ、と声がした。

瞬間、振り返って後ろから伸びていた手を掴み、前に引き倒す。

倒れた男の腹部に上から体重をかけて

て膝蹴りを食らわせ、その頭に銃を突きつけて、哄う。

「手を上げる。……とか言えはいいのかな、こういつときは」

仲間を呼ぼうとした男の頭を銃で殴って気絶させ、手早く縛り上げて立つ。全く、油断もすきも無い。

はたと、不安げに顔を上げる。

「殺ったほうが良いのか？リック」

『いらぬ心配するな。その調子でいい』

「了解」

イアラは再び歩を進め、向かい合った本棚の間を歩いていく。細

い通路は本当に良く出来た迷路のよ

うで、こんなことでは読書にかまけていると迷ってしまつのではないかと、思った。もともと、自分はあまり本を読むほうではないが。

歩き出して三本目の通路の前で、その足が止まる。不愉快なものを通路の奥に見つけると甚だ気分が悪くなったが、顔をしかめて”それ”に向かつて歩き出した。

壁にもたれるような格好で死んでいる少女はまだ幼く、裂けた衣服から何をされたのか大体想像がつ

いて気分が悪くなった。イアラは足音を立てないようにしてもう少し近くにより、開いたままの目を閉じた。

「……ごめん、な」

同時に、耳元で小さくリツクの声がする。

『イアラ!』

「お前もそうなるんだよっ!」

「なっ……! ああ!」

振り返ろうとしたイアラの両腕が掴まれ、壁に叩きつけられる。睨み付けたのはまだ若い男の顔。足

が床につかないもどかしさに顔を上げ、そいつを見上げる。

そつえば、戦地でも何度かあった。

死者の近くに伏兵を置いて、情に絆された馬鹿な兵士を颯り殺す手法。

信じられない。こんなのにひっかかるなんて。

「くそっ……」

イアラの焦りをよそに、男は野卑な笑みをうかべた。

三話

3

正方形の部屋の中、少女は一人呆然とそこに立っていた。浅黒い肌と肩の上でそろえられ、緩やかなウェーブを描く黒髪の、ところどころに赤い飛沫が散って固まっている。

見回せば辺りは一面の血の海で、そこに散らばった人の四肢はもう跡形も無くばらに”壊れて”

いた。千切れ、破け、もはや元が何であったかも見当がつかないほど。ただ一面の 紅。少女 ド

ナは、震える自分の両手を見下ろすと、大きく、悲鳴を上げた。声は石の壁に阻まれ、きつと遠くへは聞こえないのだろう。

小さな手を狂ったように振り回し、血を払おうとしている少女の大きな目は、絶望と拒絶を顕わにして。

まただ。

また、やってしまったのだ。

まだ新しいのか床を流れ、広がっていく血の海から逃げるように一歩、下がった。

転がっている人間の目が、自分を見ているようで怖くて堪らなかった。

少女は両手を相変らずその細い手首で一纏めにして掴まれていて、なかなか逃げ出す機会を見出せない

い。細い両足はだらりと力なく壁に沿って下がり、高い位置で結ばれた明るい金髪も半ば解け掛かっていた。いっそ解けたほうが視界はすっきりするかもしれない。そして、幸運と言っていないのか、顔には傷がついていなかった。

掴まれている手首は悲鳴を上げるように軋み、殴られている腹部の痛みも増していくばかりである。

イアラの視線は、自然と少女の遺体に向いた。

こういう状況には慣れきっていたが、無抵抗癖がついているのはこんなとき厄介だなと、ぼんやりと考えていた。別に抵抗したからといって何があるわけでもなく、むしろ自分のほうが強いくらいである。

自分で自分の首を締める、というのはひょっとしてこういうことだろうか。

イアラが抵抗も出来ないほどに弱ってしまったえば、確実に”ああ”なるのだろう。

男が、再び握りこぶしを振りかぶるのが見えた。

直後に、激痛。

「はっ……がは……っ」

イアラが悲鳴を飲み込んで頭を振るたび、それは容赦無く、強くなっていく。

そろそろ顔にもくる頃だろうか、と、見当違いの方向へ傾いた思考を、強引に引き戻す。予想通りの軌道で迫った拳を顔を逸らして避けると、それが癪に障ったのか楽しそうだった男は不愉快そうに顔をしかめ、返す手で彼女の頬を殴りつけた。口を切ったのか、鉄の味が口内に滲んだ。

がががんとする頭で、必死に思考をめぐらす。リックが黙っているのは恐らく通信機の内容を相手に悟られない為なのだ。逃げられたはずなのに無抵抗で居たのも自分。

今は少し、体力と体調がきわどい。

状況自体は一般兵の時の、上官からのリンチとなんら変わらない。ただ 殴られるだけではすまない

いというだけ。もつとも、幸い軍内部に幼児性愛者が居なかったというだけの話でもある。それ以外の異常性癖は多いと聞くが。

どうすれば逃げて、尚且つ相手に一矢報いることができるか？…
… 転んだって、ただで起きてなどやるものかと。狂暴に、不敵に、イアラの目だけがまっすぐに男を見上げる。

腕を蹴り上げようにも足が届く自信はない。なにせ、この長さである。体型云々以前に体の大きさが追いつかない。その差を埋めるための大剣はここには無いし、殴り返そうにも腕は封じられている。自由に出る物といえは

顎を掴み、上を向かされた瞬間に、開いた気道に思いっきり息を吸い込んだ。

「おい！ネズミが一匹紛れ込んだぞ！」

賭け、ともいえた。

なるべく低い声で叫んでも聞く人によっては少年の声に聞こえないからであった。

中性的な声は仲間のものとは判断されたのか、すぐに二、三人の足音が近づいてきた。驚きからかたじろいだ男の腕を振り払い、痛む体を庇う間も惜しんで腰のホルスタ―に手を伸ばす。

素早く銃を引き抜くと、駆けつけてきた者たちまで含めて全員の両足を正確に打ち抜く。

「……はっ。低脳の……下衆どもが」

毒吐くと、鈍く傷んでいる腹を両手で押さえ、床に倒れた。背中を丸め、苦しげに息をつく。改めて、殴られた部分が痛い。

わき腹を抑えて通信機を探す。硬い手触りを確認すると、それを持ち上げて壊れていないことを確認。

「終わった。……リック」

「あ……。ああ、大丈夫か？心配したぜ、お前にもしもの事態があったら誰が責任取るんだろうつて」

「……なあ、通信機、壊していいか」

「冗談だよっ！……動けるか？」

「腹……ばつか殴られて……痛てえ……っ」

「されてないよな？」

「OK。後で覚えとけ」

とはいうものの、暫くは動けないだろう。いつもの軽口がやけにありがたく感じる。

「うつ……暫くは戦闘不能、かも」

「わかった。……あのさ、無理しないでくれよ」

すこしだけ暗くなったリックの声に、苦笑した。

リックはその場で深く息をついた。

足元にはぐしゃぐしゃに丸められたメモ用紙が散乱し、そのもどかしい時間の経過を物語っている。

冗談で濁したものの実を言えば、彼とてあの状況で平然としていられるほど非情ではない。音と声だけで何が起っているか容易に想像できて

反吐が出そうだった。

或いは本当に見ていることしか出来ず、まだ幼いこの少女にとんでもない経験をさせていたかもしれない。

否。実際は。握り締めた手は小さく震えていた。

「…………ごめんな」

実際は、そんなことよりもその後のグラフの反応が怖かったに違いない。

『あ？なにが？』

「いや」

手を振って苦笑する。

どうせ向こうからは見えていないのだが。

『…………リック？』

「なんでも、ないんだ」

少女の怪訝そうな声に、なるべく明るく返した。

『リック！後ろに気をつける』

「あ…………？うわっ」

リックは突然自分に向いた声に焦り、慌てて後ろからきた少年を突き飛ばした。少年、といっても

彼より身体も大きく、年は上のようだったが。

「てめえ…………っ」

後悔するより早く、少年がホルスターに手を伸ばすのが見えた。

モニターに様子が映っていたのだろ

う、舌打ちしてイスを蹴倒し、立ち上がる音と共に荒々しくリック

の声。

『撃て！』

手に持っていないがらすっかりその存在を忘れていた銃を構え、撃鉄を上げる。

狙いを定め、引き金を引くよりも早く、胸の辺りを強く叩かれたような衝撃。

本棚に叩きつけられ、息を詰まらせた間に引き金に指が掛かった音がする。これは、スラム育ちの彼

にはやけに聞き覚えのある音であった。何度かそれで人が殺しあっていた光景を、思い出す。

第六感、というのだろうか。それが、もう駄目だと悲鳴を上げた。どん、と、くぐもった音が、きこえた。

リユークはいつまでも襲ってこない痛みに不安を覚え、硬く閉じていた目を恐る恐る開いた。目の前は一面の黒。闇ではなく、そこにだけぽっかりと、まるで巨大な空白のような。彼の眼前を塞いでいた影はやがて崩れ落ち、しかしその大きな手が、しっかりと銃を持った少年の腕を掴んでいるのだった。

ちらりと見えた銀髪に、戸惑いを隠せずに駆け寄る。

「ガ……ガラフ」

『撃たれたのか？』

少年の声と、リックの動揺した声が重なる。リユークはその反応に少しだけ違和感を覚えたが、その正体はついに判らなかった。

当のガラフは二人に答えようとせず、捕まえていた少年の腕をへし折った。耳を塞ぎたくなるような嫌な音を立てて、彼の腕があり得ない方向に曲がるのを見た。

悲鳴が上がったがイアラのこともある所為か、今度は誰も来ようとしな。かくかくと他の部位を瘻

撃させている少年の身体を器用に縛り上げ、何事も無かったように立ち上がる。

ちらりと見えたその顔に、表情の変化は見えない。

「まず一人……だ」

「なあ、怪我は？」

「……行け。邪魔だ」

抑揚の無い声は相変わらず無神経に少年に突き刺さった。実際、ガラフは子供が嫌いなのだ。半分は自分の幼児体験、あとの半分はイアラに起因して。

リユークは彼の言い草にむっと顔をしかめたが、不意にガラフに

背を向けて走っていった。何が、と断定できない。ただ、腹立たしかった。なにが、と強いて言うならば、それは助けられたはずなのにまるで最初から自分などその場にいなかったかのような。そんな態度を取られることが。

まるで、ガラフが、イアラが、リックがそれぞれに独りでその場にいるような空気に耐え切れなかった。

リユークが走り去ったのを見届けると、撃たれたわき腹を押さえながらガラフは一人通路にうずくまった。

これだから。怪我をするのだけは避けたかったのだ。傷口を塞ぐうとする厭な音が聞こえる。傷口にはマントから破り取った布をねじ込んで、本棚に片手をかけ立ち上がる。

『それで、大丈夫なのかよ』

「……………ふん」

もしあのガキが

やけにぬるぬると手が滑って、出血だけが無駄に多い傷をそれでも手で押さえながら、無表情な顔を俯けた。

もしもリユークが今、死んでしまっていたなら、イアラは。

……………なにを、恐れているんだ、オレは。

「リユーク、今、何処にむかつてる」

本棚を背もたれに座り込んだイアラが小声でそう言つと、彼の声でドナの部屋、と返事が返ってきた。

銃に弾を詰めなおしていた手を止め、不審気に眉をひそめる。

「ドナの？知ってるのか？」

そもそもそれを知っていたのなら、あんなところで座り込んでいなくても良かったのでは？

そんな思いが頭を過ぎる。

『手紙でいつか、書いてあったと思うんだ』

「わかった。そっちにまかせよう。わたしも、そろそろ休憩は終わりにしないとな」

立ち上がるうとしたイアラと、足を撃たれて倒れている男と、はたと目が合う。

男は彼女を睨むと、さつさと目をそらす。見下ろす少女は意地悪そうに笑み、男の額に銃を突きつけた。

「怖くない？」

「はっ、誰が。さつさと殺したらどうだ」

「……殺すー？」

彼女は銃口を男から離し、豪快に笑い出した。不可解そうに見上げてくる視線に対抗するように、その無邪気かつ兇悪な笑みを向ける。

「貴重な情報源をか？勿体ねえ」

男は、

その目に悪魔を見たという。

「お、おいイアラ……」

『ぎゃあああああ！』

いきなり通信機から聞こえてきた絶叫にびくりと肩をすくめ、リツクは苦笑する。

「元気そうで何よりだなあ。」

ではなくて。

「おーい？」

『た、助けて……』

『ドンドンドン』

『ガタン!』

何なんだこのまがましい効果音たちは。

「イ、イアラ……さん？」

『吐けオラア!』

『ドカツ』

『ドン』

『う……っ、うわあああ』

『もっ、もう許し……』

『あーっははは!』

『ドカツ、ガン、ガタタツ』

『誰か……』

『ドンドンドン』

ぶっつん。

「……………」

やってしまった。

ため息をついたリックだったがしかし、その顔にはさすがに笑みが張り付いている。

耳の健康とイアラのためにもこうする他無かったのだ。自己正当化も兼ねてそんな事を考えてみる。

イアラからの通信は、（半ばリックの独断と彼女の自業自得で）切断されてしまったのだった。

四話

4

「……リック。イアラはどうした」

『あ？あー……気にするな！』

「……そうか」

ガラフは見えもしないのに律儀に頷くと、本棚の影から通路の先を窺った。目線の先には少し広めの、床に座って本を読むスペースがある。恐らく例の”児童書”のコーナーなのだろう。薄暗い中に目を凝らす。

どこぞの世話のかかるガキの所為で痛む腹を抑えながら、人影の数を数え。

「人質十二人、実行犯が一人だ」

『解った。人質に被害が無いように 無理か』

「頭を撃てば」

ちよつと待つてくれという静止の声の後、さらさらと、何かを書いているような音が小さく聞こえた。

ガラフはため息をつきつつ本棚に背中を預けて、恐らく今リックが考えているであろうことを頭の中で反芻した。

銃弾の平均的な速さ。金属が周りにあつたとして、それを狙つて当たる確率、当たった場合に跳弾する角度。致命傷にならない場所に如何にして当てるか。そんなところか。ガラフに殺しをさせたくないリックの考えそうなこと。

基本の計算、実行犯の動く可能性の高い角度、そちらにその身体が向かう確率とそれに伴う速度、銃

弾の速度と威力。及び成功する確率。それを現実の事象として置き換える。

ならば次に来る彼からの質問は、位置関係を把握するための。

「金属は無い。実行犯は本棚に向かって左。……不可能だ」

「げっ。お見通しかよ！……参ったな」

「オレが人を殺すのが嫌か」

「嫌だね」

即答。

ガラフはやれやれと頭を振り、撃鉄を上げる。実行犯は未だ気付いてはいないが、注意力だけはあり
そうである。

「……どうする」

「……悪い」

リックの、心底沈んだような声。ガラフはそれを”殺人”の許可ととって、青年の頭に照準を合わせた。

銃声。

怖い。だから私は出してもらえないの。

いつか、手紙にそう書かれていたことがあった。

でも、それでももし君に逢えるかもしれないときのために、君にだけ、この部屋のことを教えるね。

長い間ポケットの中に閉まっていた手紙に描かれていた略地図は見難かったが、その通りの道に行く

と、果たしてそれは、あった。硬く閉ざされた石の扉を見つけたとき、嬉しくてたまらなくなった。そ

の扉を開けてドナの姿を見つけ、愕然とした。

これは、一体なんだろう？

彼女はリユークの姿を確認するなり、あらん限りの声で悲鳴を上げた。下がっていく少女の背中はや

がて壁に突き当たる。対する彼はただ、茫然と立ち尽くして。

「……いや、嫌！リユーク、来ないで 見ないで！」

ドナは真っ赤に染まった両手を後ろに隠し、激しく頭を振った。

その足元にはばらばらにされた何か

がごろごろと転がっていて、乾きかけた紅い液体がぶちまけられていて、しかし、それが一体なんだと
いうのだろうか？

なんだか、怪奇小説の挿絵でも見ているような気分になった。

何故自分はこうも、確固とした拒絶を受けているのか？

固まりかけている血のようなそれが、やけに生々しく感じられてその臭気に吐き気すら催すほどに思

えても、それでも自分が此処に立っているのは他でもない、この少女の為だというのに。

「大丈夫だよ。オレが守ってやる」

「嫌……。駄目なの、お願い」

こめかみを両手で抑え、ドナはその場に座り込んだ。大きく頭を振り、その真っ黒な目から大粒の涙を零した。

「 にげて」

未だ啞然としているリユークの前で、ドナの顔が、否その表情が凶悪に変化していく。

なにを間違えたんだろう。

そんなことを考えながら、彼はそれを見ていることしかできずに。

リックははつと我に返り、画面を確認した。案の定、右端の画面の中、こちらに向かつて何か言いながら怒鳴っているイアラをみつけ、慌てて通信機の電源をいれた。

『てめえコラ、リック！』

「悪かったつて。ただあんまり聞くに堪えなくて……いや、なんでもない」

イアラは何ともいえない顔で足元に転がっている男達を見下ろす。やがて不満そうな表情へと変わり。

それから数分待たずに、戦士の顔になった。

『まあ良いか。メモってくれ。主犯はゼロって言う女の子。頭の中に声が響いたとか結構電波系のアレだ。こいつら、世の中から疎外されてるタイプの人間が多いみたいで、或いは単にキレただけかもしんねえ。でもそれじゃ女の子の声つてのがよくわからねえ。聞いてみたところそのゼロってのは行動できる範囲が限られてるらしい。それを助け出して導いてもらおうんだそうだ』

少女のあまりな言い草に何事か怒鳴った男の頭を蹴飛ばし、踏みつけてイアラはその可愛らしい顔を歪ませて哄笑った。

『だから屑は何処まで行っても屑だつてんだよ！』

リックは苦笑し、手に持っていたペンを静かに置く。一通りメモした事実はどうも漠然としすぎている。ただ、判ることは”ゼロ”とやらの行動できる範囲がこの建物の周辺、もしくは中だけだということ。

そうでなければ、わざわざ若いイカレ頭を集めて凶行を起こさせるのが趣味のクレイジーなのか。どちらにしろ、休日だったはずの自分たちをこんな血なまぐさい場所

に引きずり出した罪は重い。

一体それが何処に居るのか。

男達はきつと知らないのだろう。知っていればあのイアラに、抵抗などできるはずがないのだから。

ゼロ。

その名をどこかで聞いたこと、もしくは見たようなことがあった気がする。首をかしげて考えるものの、思い出すまでには至らない。

「リック？」

「あ？ ああ、なんでもない」

心配そうなイアラの声にそう返すと、リユークを探すべく他の画面を見比べる。

少年の代わりに見える景色は散らかった本、銃創のある本棚、そして生死の判然としない、倒れ、座り込む人、人、人。吐き気を催す変死体。

そして通路の端にうずくまっているガラフ。これを見るたびに、リックの中に謂れの無い焦燥感が募る。

リユークの姿は、ない。

「リユーク。どこ行きやがった」

「見えないってことか？」

「カメラのないとこ、だな」

「どこ？」

「地下とかトイレぐらいじゃねえ？」

「地下？入り口は？」

「さあ。危険物があるから教えられないとか」

イアラはふうんと小さく頷くと、判った、と言って本棚に立てかけてあった脚立をおもむろに振りか

ざし、何を思ったかそれで床を思いっきり殴りつけた。

あっけなく曲がってしまった脚立をみて、詰まらなさそうに投げ

捨てる。凄まじい曲がり方をした脚

立が、がらんと音をたてて床に転がる。それから男達を見下ろし、思いつきり可愛らしく、笑った。

男たちの間には、戦慄が走った。

『お前ら、武器とか用意してないわけ？』

『あ……あるわけ無いだろっ、この……ば』

『あ？』

瞬時に男達はぶんぶん頭を振る。化け物と言いたかったらしいが一応学習能力は備わっているのか、はたまた生きる為の本能か。ドリルを使って屋根から入ったのだと震える声が口々に言った。

イアラは一体何をしたんだ？

ついそんな事を考えるリックだったが、先程彼らが彼女にしたことを考えれば、トラウマの一つや二つはつけて当たり前かと都合よく解釈しなおした。つくづく、都合のいい頭である。だからこそこんな仕事ができるわけだが。

『どこにある？』

『その、本棚の影に……』

異変が起ったのは、まさにそのとき。

「そ。悪いな、助かった」

悪びれずにそう言って男達に背をむけ、歩き出そうとした瞬間、

イアラの背後にとてつもなく大きな

何かが、“生じた”。男達のざわめく声に振り返ると、黒い　ガ

ラフとは違う、大きな、真の闇がそ

こにわだかまっていた。

背中に冷たいものが走り、一瞬後ろに下がりそうになるのを気力で留める。さっきまでとは、明らかに空気が違った。

まわりつくような、重圧が足に腕に絡みつく。

「な……」

「ぜ……ゼロだ！」

イアラ以外の人間達は心底怯えているような声を絞り出した。一方、少女は不審げに首を傾げ。

あれが、ゼロ？

仲間を、売ったのね……

頭に直接響く声。これが。

『イアラ？どうしたんだ？』

「モンスターか？」

無意識に呟いた彼女の目の前で、それを嘲笑うように影がゆらめく。唐突に、姿を消す。代わりに男達が立ち上がり、一斉にイアラに殴りかかった。

突然のことを上に跳躍して避け、彼女が着地した場所に再び突進する、その目には理性がない。イアラは舌打ちして防戦に徹する。

事態を把握する間もなく襲ってきた拳を手で受け流し、本棚のほうへ流す。

「足を 撃つたのにつ」

本を押しつぶした拳を引き抜き、にとわらった男は、なおも襲い掛かる。

「リック！」

『撃て、イアラ。仕方ない』

冷めた声が容赦の無い断罪を下す。イアラはせつかく殺さずに居られたはずの男たちを見て、苦しげに顔をしかめた。

「……………ッ」

頭に狙いをつけて、撃つ。意外と少ない返り血を避けて立った少女の金の瞳は悔しげに、倒れていく男の姿を捉えていた。影がその身体を離れ、2人の少年に入ったの

も。

歯を食いしばり、引き金を引いた。反動で細い両腕が跳ね上がる。

あははっ、はははは！！

止まない笑い声に苛立ちを覚えながら、顔面を血に染めてなおも起き上がろうとする少年たちの腕に発砲。がくがくと動く足に。笑い声が絶えた頃には、そこに生きているのはイアラくらいのもので。

肩で息をする少女の目にはうつすらと悔し涙。もはや顔の原型も留めていない屍を見下ろす。

「わたし……」

『こつするしかなかったろ？』

ちがう、と大きく頭を振る。

「わたしは…誰を殺した？誰と戦ったんだ！！」

まるで手ごたえも無く、無意味な、それがしかし彼にわかるはずもなく。

「……悪い。らしくねえ、取り乱すなんて」

でも　それでも。

五話

5

「さあ」

ドナは穏やかに笑み、リユークを振り返った。

「君はどうしてあげようか」

怯えた目線の先でそれは　花のように、笑む。

暫くすると、イアラは本棚の陰に隠してあったのだろうドリルを引っ張り出した。硬質の床に白く線を引きながら、先端が姿をあらわす。

『おい？何する気だ？』

「地下に行く」

『は……。！待て、ちよつと！』

イアラはリックの静止に耳を貸さず、ドリルを思いっきり床につきたてた。轟音と共に床が崩れ、半

分は力任せにイアラの足が、半分はドリルが人ひとり通れる程度の穴を空ける。

満足げに笑った少女の耳元で、通信機から恨みがましい声が聞こえた。

『修理代……』

「軍もちだろ？」

そんな子に育てた覚えはありませんよというふざけた台詞は無視して、穴の淵から中を窺う。暗い中

には、随分綺麗な通路らしきものがぼんやりと見える。

或いは地下一階の専門書コーナーかもしれないが、そんなに広くはないと聞いていた。それに、仮にも書物を保管する場所からこんなに湿気った空気が出てくるはずが無い。

とはいえ入ってみないことには判らないので、穴の淵に足をかけたイアラはふと、さつき殺したばかりの男達を見て、中に飛び込んだ。

中は、案の定暗くはじめじめしていた。“獄”^{くわ}とか“地下牢”とか言つものを髣髴とさせ
る雰囲気。

廊下は入り組んだ迷路のようで、奥に行けばさらにごちゃごちゃしているのだからと予想された。一筋の光すら入らない場所で、等間隔に壁をくりぬいて置いてある蠟燭の明かりがなければ、きつと何も見えないのだろう。こんなところに実の娘を閉じ込めておくなんて正気の沙汰ではない。考えながら歩いてきたイアラは大きな石に躓きかけて、苛々とそれを蹴飛ばした。

もつとも、ここにドナが居るとしたら、の話であるが。

『イアラ、どうだ？』

「暗くて臭い。迷路みてえだ。金持ちの道楽かな」

『或いはそこにある”危険物”つてのが”生き物”だとかか』

途端に聞こえる破壊音。明らかに硬いものが何かによって人為的に壊されたような音である。それを

聞いた少女の目が、猫科の動物さながらの輝きを宿した。

「ビンゴ……だな」

「無邪気って怖ええな、なあガラフ……ガラフ？」

リックがため息混じりに話掛けた目線の先に何も映っていない。

そのことに孤独感を覚えながら、同時に胸を過ぎった、不安。

「お前さ、怪我大丈夫なのかよ？」

『ふん』

「何か言えよ……」

なす術もなく、苦笑する。

焦燥感。

五メートル程は飛ばされただろうか。壁を突き破っておいて良く生きていられるものだと、我ながら思う。立ち上がろうとするリユークに、馬乗りになって笑う少女があった。浅黒い肌と漆黒の髪。

”ドナの顔をしたそいつ”は狂気じみた笑い声をあげる。けたけたと笑いながら、少年の細い首に手をかける。リユークは渾身の力でもって自分の首に食い込んでいく指をはがそうとしたが、ドナにとつ

てそれは手の甲を軽く引つかかれる程度のものでしかなかった。

ものを言おうにも、締め上げられる喉では思うように声も出せない。

「……………」

「それはこの軀の名前でしょ？私はゼロ」

にこやかにそう言うと、酸欠で赤くなった顔を覗き込む。

「ドナを守るんでしょう？」

「……………」

「どうやったら守れるのかなあ、ねえ、一緒に考えてあげようか」
くすくす笑い、何処までも小ばかにしたような態度。リユークは何か言いたげな顔でそれを見上げた。

「そりゃあ、正義の味方が二人まとめて助けてやるのさ」

ゼロは自分以外の人間の声に気付くと、暗くなつた視界を後方へと移した。背の低い、見た目はかな

り幼い少女が、気の強い笑みで覗き込んでいるのだった。

「さっきの子ね。あなたは誰？」

「だから正義の味方、だろ？」

ふんぞり返つたイアラを見ると、気絶したリユークから手を離して立ち上がる。

「正義？」

「てめえが黒幕か」

怒りの混じつた声にくすつと微笑で返し、振り返つてとん、と地面と形容するよりは無難だろう

をつま先でつついた。イアラが頭上から落ちてきた大岩を避けたのを見ると舌打ちして横に回つ

たが、手刀も銃で弾かれてしまう。イアラはゼロの手を弾いた銃で素早く狙いをつけた。その先には、無防備なゼロ。

イアラがやすやすと撃てないのを知って、したり顔で笑んでいた。「ドナを返せ」

ゼロはそれに答えず大きく息をつくとやれやれとイアラを見返す。「だって、出られないんだもん。」繋がれてる”からね。数年は大人しくしていてあげたけど　もう　

良いわ」

ぎらりと、ゼロの目が光るのを見て、思わず一步、退いた。

「　　もう殺す」

大気が、歪んだような気がした。それがはじけるのと同時に、加速しようとした少女の脚をイアラの

銃が間一髪で撃ち抜いた。ゼロは撃たれた左足を庇うようにして動き、悔しそくに彼女を見上げる。――

方のイアラは、震える腕で銃を構えるのが精一杯のようだった。

大きすぎる気配が、少女の動きを制限していた。

彼女の目に押し殺した恐怖を垣間見て、ゼロの目が勝ち誇った色
を浮かべる。野性に似た少女の危機

感はずばかりで、今にもその体を飲み込もうとしていた。

「仔猫”ちゃん?……噛み付く相手は選ばなくちゃね」

「黙れ……」

小さな声で反論するのがやっとのイアラに、手負いの少女はじり
じりと近づいていく。そのたびに後

退していく自分の情けない足を、いつそ撃ってしまいたいとすら思
った。巨大なプレッシャーがか細い

両肩にのしかかって、脚をすくませた。一方、追い詰める側のゼロ
は恍惚の表情で上唇を舐める。

年に合わぬ妖艶な仕草は、ゼロの本来の性格なのだろう。

「喰ってしまいそう……」

喉を鳴らすような猫なで声。

余裕。

「や……」

後退り。

今にも、来ないでと口走ってしまいそう。

ゼロが声高らかに笑い、だん、と左足で床を踏み鳴らした。

「おいで、プシキヤット!」

「っ、あああああああ!」

イアラはゼロの言葉が終わらないうちに走り出していた。ゼロは
キックを受け流すと間髪入れず襲い

掛かったイアラの右腕を掴み、その身体に不釣り合いに大きな力でも
って彼女を投げ飛ばした。受身を取

る余裕など当然無く、通路の壁に背中を強かうちつけて息を詰まら
せたイアラの顔を覗き込むと、ふっ

と哄笑う。

少女の頬に触れた手は酷く冷たく、そして同時に、頭の中をめちゃくちゃにか回されるような何ともいえない感覚、不快感。細い体が、小さく痙攣する。

「……………イアラ」

イアラは顔を上げ、目を見開いた。理解しがたかった。

何故、名乗っていないはずの名を、彼女は口にしたのか。そんな思いを知ってか知らずか、ゼロは何か、書物でも朗読しているかのようにイアラのおぞましい記憶の断片を引きずり出す。

耳を塞ぎたくなるような、平らな声で。

「ノーグ村の出身。十三になった日、たまたま隣町まで遣いに行っていた貴方を残して村が全滅。原因

は二人の男。怒り、我を失ったあなたはそのうち一人を”素手”で”解体”、そのままそこで二晩を過

ごし、通りかかったガラフⅡGとリックⅡデュオに拾われる」

「な……………なに」

「ああ あなた、”笑ってた”」

目の前が、砂嵐になった。ああ、やめろ、思い出したくない。

共に聞こえるのは、自分の狂ったような笑い声と体組織が無理に引き千切られる音。イアラは震える

手で耳を塞ごうとしたが、その両手は顔の横で止まって、動かなかった。

わたしはあいつをころすとき

「そして上に居た3人の時も」

「違……………」

「当然か。だから殺しを生業にして生きるんだわ」
侮蔑するような、ゼロの声。目の前で震える少女を暴くことに、まったく躊躇は無いらしい。

わらってたたのか…

「イアラ。何を黙っている」

聞きなれた声がした。低い、声。グラフのもの。

「だ……って」

「貴様ら…繋がったと思えば、何をうるたえている」

緊張が解けたのか、イアラの表情が少しだけ緩んだ。こんなプレッシャーを一身に受ければ、当然とも思えたが。

「わたしはっ」

「笑う暇があつたか」

やけに、その声が頭に響いた。別に大きい声ではなかったのに。

霧が晴れたように焦点が合いはじめ、見えたのはゼロの不愉快そうな顔。次いで、ゼロの左腕でなぎ

払われて脇腹に鈍い衝撃。右に十メートルばかり吹っ飛んだイアラに向かって、ゼロが歩を進めた。

「残念。もうちょっとで私のものにできそうだったのに」

五メートル程距離をおいて立ち止まり、イアラが起きるのを待つ。

イアラは身体を起こすと、未だ大きな

プレッシャーに襲われながらゼロを睨み返した。

笑っている暇など無かったのだ。

必死で。

「わたしは……あいつらの足手まといになるのはごめんだ」

「そう？残念」

ゼロの微笑もやがては消え、残ったのは静寂。暫く睨みあっていた二人は示し合わせたように同時に

口を開く。

「お前は消えろ！」

二つの声が、重なった。

六話

6

『オレあ何にも出来ねんだもんな。なっさけねえ』

リックの声が途切れ、暫しの静寂に、身体を引きずるようになりにして歩いていた

ガラフは、ふと顔を上げて重い口を開いた。

「……………静かだ」

『あん？』

「お前がいなければ」

足元に風を感じ、下を見た目線の先にあるのは、さっき相棒があけたのであ

ろう、大きな穴。少しだけ嬉しそうに、リックがなんだって、と聞き返したの

を聞くと、大きくため息を吐く。同時に、親友の声に安堵しつつ。

「ふん。二度は言わん」

「畜生っ」

イアラは威嚇が効かないのがわかると、銃を投げ捨てた。

怪我をさせずに戦うというのはなかなか難しいものだ。それでなくとも既に

足を撃ってしまった。相変わらず笑いながら、ゼロは彼女を見ている。隙もなけ

れば疲れても居ないようで、これほど厄介な相手がいるだろうか。

「上の皆、来ないのかしら」

「そんなん、ガラフがとつくにのしてら」

イアラは小ばかにしたように笑み、走りこんできたゼロの腕を掴んで放り投

げた。無理やり隙を作って攻撃する作戦だったが投げる位置が高すぎたのか、

天井を蹴って着地した彼女を見て舌打ちする。普通の女の子に出来ていい芸当

ではない。やはり、単にドナの二重人格というわけではないようだ。不意にその口元が、ふっと歪む。

「そう　それってあなたの大切な人？」

「……ッ！」

一瞬止まりかけた足を叱咤して、前方に飛び込むように前転したイアラの頭

上を掠め、いつ拾ったのかゼロが投げたドリルが壁に刺さった。それまで頭の

あつた場所である。

内心ひやりとしながらも跳ね起きて、少女の笑みを睨み返し、それから負け

じと同じように笑う。

「当然」

「私が何考えてるかわかる？」

「判りすぎて虫唾が走るね」

イアラの回し蹴りから身体を逸らして逃れると、ゼロはふっと顔をしかめ、
なおも間合いを詰めてくる彼女の拳を受け流しながら壁際に追いやられていく。

それでも余裕の表情は崩さない。

「動揺しないのね」

「そんなことしたら、わたしがあいつのこと信用してないみたいだろっ！」

ゼロの背中に壁の冷たい無機質な感触が伝わり、舌打ちした彼女の耳元で轟
音。

イアラの右拳が、壁を破壊したのだった。ゼロはにっと嗤い、掴んだ瓦礫で

彼女に殴りかかった。反射的にかわしたものの、額に痛みと、ぬるりとした嫌

な感覚に、イアラは再び後退し、目に掛かった血を拭った。

やばい、止まらない。

痛いというより熱い傷口を押さえた手が視界を遮る。意を決して手を離し、

左の視覚は捨ててきつとゼロを睨みつける。それに答えるように彼女は再び岩

を持ち上げる。限界なのだ。『身体』が。『ドナ』が、限界を超えた運動量に

悲鳴を上げる。ゼロは早く、「終わらせたい」のだ。彼女が何者かイアラには

知る術もないが、疲れは防げたとしても身体の痛みまで制御することとは出来な

いということなのだろう。

イアラは次々に投げつけられる瓦礫を避けつつ、どうやって近づいたものか

と考える。その間にゼロは別の場所の壁を崩し、再び岩を投げ始める。まるで

人間投石器である。その動きが止むのを待つことも決して容易ではない。イア

ラは疲れるし、ゼロは他の体を動かすことができるのを知っている。それ以前に、ドナの体が壊れてしまったら、リユークになんと言えばいい。

そんないらぬことを考えて、詰まらなさをそうに舌打ちする。やはり、あんな奴連れてこなければ良かった。

『イアラ、そいつどんな動きしてる?』

考えすぎでパンクしかけた頭に、水をかけられた気分。リックの声に食って

掛かった。

「おせえよ！ 石投げてる！ 近づけない！ だーっ、苛々する！」
『出来ればもつと具体的に』

イアラは前方に飛んで来た瓦礫を避けると方向を変えて再び走りはじめた。

「位置関係は 動いてないと殺られる。移動範囲は大体あいつのまわり五メ

ートルくらい。壁をぶつ壊して投げてきやがんだ」

『無茶するな』

「同感」

呆れ顔でため息を吐く。

『あのな。指示の仕様がなから参考までに聞いとけ』

「なんだよそれ！」

『察しろ』

「……ああ」

頷くと、同時に飛んできた石を掴んで投げ返す。

少しだけ、投石が止まった。

『ゼロって言うのは、もともと善良な隠者だ。そいつの正体。人と森を愛し、

文明の進歩に大体そいつもかかわってる』

「はあ？ 悪党じゃん！」

今見える限りではな、とリックの補足が入る。

『人はそれを忘れ いや、忘れたわけじゃないが、その大きすぎる力を恐れる

てゼロを封印しようとした。彼女は悲しんだ。深く、深く。何で人間達がそんな

なことしようとするのか理解できなかったんだ。それが何十年も続くこと次第に

憎悪に変わって 目の前にある、その体たらくだ』

「……ああ。そうなのか」

どうして、どうして、どうして。信じて、愛していたのに。

やがてゼロの耳にその会話の内容が伝わったのか、彼女はにいつ

と唇を三日

月形に歪ませた。

会話の内容を察したのか、聞いていたのか。

「 最後、だったのよ」

「 最後？」

少女が床を蹴るのが見えて慌てて胸の前に交差させた両腕に、重い衝撃。吹

っ飛んだ背中が柱に叩きつけられた。

「 この館長、魔術の心得があつてね。病気の娘を気まぐれで治してあげ

たら私をこんなところにとじこめた！」

「うあつ ……！」

間髪入れず叩き込まれた拳に小さく悲鳴をあげ、その場に崩れ落ちる。イア

ラはそのままの体制で蹴り上げ、ゼロが後ろに飛んだのを確認して起き上がった。

再び、間合いを詰める。殴りかかった右腕を受け流され、舌打ちしてゼロの

反撃をかわす。その隙に彼女は間合いを離し、再び瓦礫を掴んだ。

「いい加減にしたらどうだっ

『退け』

走って間合いをつめようとしたイアラは反射的に止まり、後退した。直後、

いつ仕掛けたのか大きな岩がその場に落ち、砕けた石の欠片が跳ねて彼女の頬

と足に小さな擦り傷をつくった。それからふと顔をあげ。

『もう少し、だ』

声と同時に、もう一步下がったイアラの足元に瓦礫が落ちる。ゼロが身体の

痛みに関をしかめたのを見て、ぐっと拳を引く。きつと顔をあげ、イアラのほ

うへ走ろうとした足を、どこからか弾丸がやけに正確に撃ち抜いた。状況に即

した判断。行動することに集中すると、彼女の動きも大分本来の軽やかさを取

り戻した。

膝をついてその方向を睨んだゼロの腹部を、イアラが殴って、やっと気絶さ

せた。崩れ落ちたドナの身体を右腕で支え、両足の痛々しい銃創をいたわるよ

うにその場に横たえる。自分がやったものだし、急所は傷つけていないが、そ

れでも怪我自体は痛々しい。

すつと立ち上がると、柱の影に隠れているであろう黒マントを探す。見つけ

ると嬉しそうに笑み、駆け寄った。

「声じゃなくて助けに来いよな」

「……………そんな体力、が、あつたならな……………」

聞こえた声は随分と掠れていて　ふと、不安になった。

通信を切っている間に何があつた？

立ちすくんだイアラを無表情で見下ろし、苦痛すら顔に出さずに彼は壁に背

中を預けたままその場に座り込んだ。脇腹を押さえるその手は恐らく真つ赤で、

冷たいのだらう。イアラは愕然としてその傍らに膝をついた。大きなガラフの

手に自分のそれを添える。

「……………うそだろ」

「……………どう言えば……………安心できる」

「莫迦言つてんなよ！　リック、　おい！　早く中に入って来いよー！」

半ば悲鳴のような声に、落ち着き払ったリックの声が落ち着け、と諭す。

「何考えてんだよ、何……………。血が、止まらな……………」

『解つたから』

ゼロはしゃくり上げる声と服を裂いて傷口に押し当てる音を聞きながら大き

く息をつき、目を閉じた。

徐々に、人を、愛しいと、感じていた。

部屋の隅に座り込んでいたイアラは、足音を聞いて顔を上げた。

大して広す

ぎも豪奢すぎもしないその部屋の扉が開くまでの時間が、それまでと桁違いに

長いような気がした。

「大丈夫なのか？」

イアラの問いに、中年の、品の良い男は苦笑してああ、と返す。

この図書館

の館長であつたが、彼は意外に温和で、とてもではないが実の娘をあんな場所

に閉じ込めて平気でいられるような人間ではなかつた。図書館が開放されたと

聞くとすぐに駆けつけ、ゼロの影響力が強すぎた為に地下に閉じ込めていた我

が子を、抱きしめて泣き崩れたのだつた。

「出血が収まれば傷自体は大した事はない。一応躁術（一部の種族と術師し

か使えない。癒しを司る術全般を指す）で軽く塞いだが、本格的な治療は病院

に行ったほうが良いだろう。いや、恥ずかしいことに呪力がそこそこしかなか

てね」

リックはほつと胸をなでおろし、そうか、と、一言呟くと、そのまま脱力し

て机に突っ伏した。イアラはというと、わなわなと全身を震わせ、顔を真っ赤

にして館長を見上げていた。かと思うと白い壁に向き直り。

「ななな……っこ　この、裏切り者！　泣いちゃったじゃないか、わたしの

涙を返せ　っ！」

隣の部屋に向かって苦情を叫び続けるイアラに、その様子に館長

は自然と口元に笑みを浮べた。リックも気付いたのか二人でくすくすと笑い出す。取り残されたようになったイアラははっと我に返り、それを見上げた。

「なっ……なんだよ」

たじろいだイアラに館長は頭をさげる。深く、深く。

「ありがとう。娘を救ってくれて、本当に」

語尾は震えて定かではなかった。イアラは赤い顔をさらに赤くしてそんなの

いいからと頭を振るが、それでも彼は頭を上げない。礼の言葉なんかでは、足

りないのだった。それは、娘を解放してくれたことへの。また、彼自身の重荷

をも、取り去ってくれたことへの。

ゼロのことを一人で背負わなくてもいいと、肩を押してくれたことへの。

あの後、ドナを再び閉じ込めようとした館長を、彼女はそれ以上は良いと、

引き止めた。彼にとってこれは個人の問題でしかなかったが、今回は他人の命

が犠牲になった事もあってか、はねのけてもう一度封呪を施そうとした。そんな

な彼の手を止めたのは意外にもイアラの言葉ではなく、それによって溢れてき

た親としての感情であった。

ゼロが目覚めてしまえばきつともっと大勢が犠牲になるのだろう、そんなこ

とは望まない。しかし。少女はその手に自分の手を重ねて頭をふつた。

「皆で責任とればいいじゃないか。ドナもあんたもぜんぜん悪くな

いよ。だから、もう、やめようぜ」

ゼロは

美しい、少女の姿をしていた。深い緑の髪を一纏めに括って、白い肌に映え

る真紅の目は生き生きと燃え盛り、しかし彼女はふてくされた様に顔をしかめ、

その場を後にしたのだった。

「つぎやああああ……」

それから一週間ほど経っただろうか、酷く耳障りな声に目を覚まし、イアラ

はゆっくりを身体を起こした。

「なんだよ……」

「なんだよじゃねえよ、それ！ それ！」

リックがソファの影に隠れて必死に彼女の頭上を指差す。はあ、と首をかし

げた彼女の頭の上から、”それ”はぼとりと落ち 見下ろしたイ

アラも、顔

を引き攣らせて固まってしまふ。

ベッドの上で丸まって寝息をたてる少女の身体は全長三十センチと言ったと

ころか。深緑の髪は今は解かれ、軽くウェーブの掛かったそれが頬をくすぐる

と、軽く頭を振って深くベッドに沈みこんだ。背中には蜻蛉のそれに良く似た

羽を生やしている　ゼロである。多少雰囲気は違うものの、それはまさしく、

一週間前に見送ったあの姿。

それが、イアラの頭に引っ付いてご快眠あそばしていたのである。

「な……ななな……！……？」

イアラはそれを指差して縋るような目でリックを見たが、彼もまたものすこ

い勢いで首を左右に振り、否定の意を表すのだった。

少女はぐつと固唾を飲み、睨みつけるようにそれを見下ろす。こんなに慎重

になったのは、ガラフのマジギレを見たとき以来であった。彼女の指が恐る恐

る羽をつつくと、ゼロは満足げに寝返りを打つ。

どこことなく仕草が色っぽい。

「ううん……」

「どうした」

いつ起きたのか、その様子を後ろから覗き込んでガラフが呟いた。ゼロを指差し、どうにかしてとばかりに見上げてくる視線に気付くと、下ら

ん、と言い残して歩き去ろうとしたが、後ろから服を引っ張られて振り返ると、

イアラが半泣きで彼を見上げているのだった。

ガラフは大きいため息を吐くと、ひょいと羽を掴んで持ち上げそれを外に放

り捨てて窓を閉める。二人がほっと胸をなでおろすのを確認して洗面所へ向か

おうとした背中に再び女の子らしからぬ悲鳴が聞こえた。

振り返るとリックの中に入ったのか、ゼロがイアラを追い掛け回しているの

である。

……見捨てたい。

そんな衝動をなんとか押さえ込むと、リックの襟首を掴んで後ろへ引き倒し、

額に銃を突きつけた。

「きゃあ！ そんなことしたら死んじゃうわよ！」

「今すぐその身体から出て行け」

「い・や 貴方にこの人が撃てる？」

「撃つ」

「嫌 ! 信じらんない! お友達は大切にしましょうって習わなかったの？」

最近のヒュームの教育ってほんと遅れてるんだから……」

言い終える前にリックが殴り飛ばされる。イアラが、殴った後の拳を握り締め、

め、その顔で女言葉を使うなよと、複雑な表情で呟いた。

「窓開けてよー、酷いわ、やっと会えたのにいきなりポイだなんて」

多少語弊のありそうな言葉は無視してガラフが再び窓を開けると、ゼロはす

ぐさま飛び込んできてイアラの腕に抱きついた。彼女は固まって動けなくなっ

た少女の腕に抱きつく力を強め。

「会いたかったー! 三日は探したわ、ああ、私の可愛いイアラ！」

「な、な……なんだそれ、いやいや何だよこれー!」

「餌はやり忘れるなよ」

ガラフは触らぬ神にたたりなしと、とつとつその場を歩き去る。

リックは相

変わらず倒れていて、当のゼロはというと真っ白になったイアラを見上げて嬉し

そうに笑うのだった。

リユークは、はたと横を向いた。ドナは隣で上を見ていて、その表情はどのときよりも柔らかく感じた。実を言うとリユークは、イアラが来た後何があつたのかを覚えていない。わかるのは、いまドナがこうして自由に、外を自分と走り回れるようになったという事。

彼女の動きにつられて上を見上げると、青空を雲が流れていくのが見えた。

スラムにも空があるのだ。つい最近、ドナと共に町を歩き回って初めて知ったこと。空が、あるのだ。彼は、館長からただ一言、よろしく、と言付けられていた。何を”よろしく”すればいいの見当もつかなかったが、とりあえず、自分がしてやれるだけのことを彼女にしてやろうと思った。

空の色を忘れかけたなら外に連れ出そう。

悲しそうに俯いたなら、人形劇を見せてあげよう。すこし、財布は辛いけど、

彼女が遊びに来るようになってから、何故かスラムの住人は彼らに優しくなつた。

「リユーク？」

「あ？……は、ごめん、なに？」

「次は何処にいくの？」

「他か……闘技場……は、ちょっと危ないかな」

「行きたい！」

考え込んでいたリユークはふっと笑うと、ドナの手を引いた。

転章：一話（前書き）

バッドエンド要注意。

荒野、だった。

イアラはそれを見回し、愕然として膝をついた。ここは何処の廃墟だろう。

何処かで道を間違えたんだ。きっとそう。そうでなければ、

どうして？

足元には見慣れた村長の首だけが無造作に転がっていて、その濁った目で

イアラを見上げていた。

他にも見回せば何かに食い荒らされたような人の四肢が点々としている。

魔物が出たにしては、建造物の損壊は少なかった。ならば人の手によるもの

なのだろう。視覚がそれを理解するまで呆けていた少女の目は絶望に彩られ、

喉から小さく、掠れた声が出た。

「……………いや」

次いで、絶叫。

こんなのは嘘だと。イアラは血の海にべったりと付いていた両手を離し、

弾かれたように立ち上がって自分の家へと走った。家の扉は出かけたときと

同じように開いていて、玄間も大して変わらない。周囲の景色さえ見えなけ

れば、それはいつもと変わらぬ風体で、そこに建っているのだった。

ほんの少しだけの安堵が胸を過ぎり、ひとかけらの希望を胸に玄関に足を踏みいれる。

「お母さん……お父さ、ん」

長く伸ばしていた金髪が、肩を流れた。歩き出そうとしたイアラの動きが、

急に止まったからであった。

靴裏に何か踏んだような感覚と、濡れたものが潰れる気味の悪い音。そし

て、わけのわからない、嫌悪感と悪寒。ゆっくりと震える足を引き、そこに

あったものを見て、息を、呑んだ。白い、何か。潰れた様は卵の白身のように

にも見えた。心臓が、握りつぶされそうな圧迫感が、胸を締め付けた。

「……………あ……………あぁっ……………！」

悲鳴にもならなかったそれは、自分がいかに混乱し、絶望しているかを自

身に知らしめたが、彼女はがくがくと笑う膝でなおも歩き、キツチンへと向

かった。壁伝いに手をついて歩きながら。

そこで、無事に逃げた両親が走ってきて抱きしめてくれるのを、心の片隅

で期待していたのだった。

それでもどこかで無理だと悟っていたのか、彼女はそこで両親の残骸を見

ても不思議と、涙は出なかった。

頭も足も腕も。無造作に転がったそれを見て、ただ、細い両腕だけが大き

く震え、”残骸”に触れることさえ許さなかった。足からは面白い

くらいに

力が抜けて、立っていることすらままならずその場に座り込んだ。

壁と床が、赤い。

目の前が、赤い。

……嘘でしょう？

「か……あさ……」

掠れた声で茫然と呟き、手を伸ばそうとした彼女の背後で、小さく足音がした。

「おい。死にぞこなつた奴がいるぞ」

「…………ツ！」

不審な声に振り返ろうとしたイアラの髪を声の主が上から引つ張った。小

さな少女の身体は、浮いてしまっただけ軽く。

「殺つていいか、兄貴？」

後ろの男の顔は見えない。ただ彼の語りかける相手　前方から歩いてく

る青年の姿が、涙も流さないのに滲んで見えていた。判つたのは、彼の纏つ

ている服の色。

白　目に焼きつく、赤よりも鮮やかな、しろ。

「好きにしる。どうせそんな奴、”こいつら”ほど抵抗も出来ねえんだから

よ

”そうか、と何処となく笑みを含有した声。

「んじゃ、バラすか」

「せいぜい甚振ってやれ」

その声に応えるように男はイアラの左肩と左腕に手をかけた。もしかしな

くとも引き千切る気なのだろう、その部位に激痛が走ったが、彼女

はもつと

別のことを考えていた。

いま男の言った言葉。聞こえた言葉。もしかして自分を指して言ったのだらうか。

しにぞこない？

他の人は、生きていない、という、こと。

腕が無理な方向にねじられ、袖と腕の肉が破ける音、それと関節が外れる

音と激痛。絶叫しながら苦し紛れに掴んだのはいつも持っていた護身用の短

剣であった。とっさに自分の髪を、相手の腕共ども斬りおとした。

どこから

そんな馬鹿力が出たのか、考える暇も余裕も無いイアラは男の絶叫する声を

聞きながら左肩を押さえ、外へ走る。

気の幹に背中を預け、荒い息の下で追いかけてきた男を見上げたその目は、

先程までの弱気なものではなくなっていた。胸を灼く感情は溢れて頬を伝い。

「……して……やる……っ」

追い詰めたつもりか、男は少女の掠れた声を聴いてげらげらと笑った。対

するイアラの目は復讐心に燃え。

「……殺してやるっ……！」

「ッ！」

勢い良く、イアラは身体を起こした。汗ばんだ手はシーツを握っ

ていたが、
寝乱れた髪をさらにその両手でかき乱し、恐る恐るその両手を見下ろす。

「ど……して……」

一瞬朱に染まったように見えた手を握り締め、深く、長い息をついた。

今更こんな夢を見る。なんて女々しいんだろうと内心苦々しい思いに沈みながら。

「夢……ただの、夢」

「へえ　？　どんなユメよ？」

自分に言い聞かせるように言った言葉に茶々が入って、顔を上げると部屋

の入り口にリックの姿が見える。イアラはなんでもないと頭を振り、ベッド

から足を降ろした。

彼を見上げると、揶揄するように笑う。

「良くないな。勝手に女の子の寝室に入るなんてさ」

女の子だっけ？　と茶化した彼はふと真顔になって、明かりをつける。相

変わらず女でも連れ込んでいたのか、纏められていない黒髪が肩の上で揺れ

た。イアラはそれに顔をしかめながらサイドボードに手を伸ばし、

黒いゴム

を手にとる。

「やけに起きるのが遅かったからな」

「へ？　……あ」

髪を纏めながら時計を見ると、針は十時を指していた。もういつもなら起

きている時間である。

「ごめん」

「言えないか？」

「…………ごめん」

しゅんと肩を落としたイアラの頭を、リックの手がぐしゃぐしゃと撫で、

もとい掻きまわした。いつもなら子ども扱いするなと怒り出す彼女だったが、

今は甘んじて受けておく。

どちらかと言うと、いつもなら起こす立場の自分が彼に起こされてしまっ

たことのほうが不本意である。

「わかった。でも、重くなったら言えよ？」

「ん」

リックはイアラが頷いたのを確認すると、そろそろ召集だからなとだけ言

って部屋を出る。後ろ手に鉄製の薄い扉を閉めて、ため息を吐いた。たった

今撫でた彼女の頭も肩も予想以上に小さく、強がりの男言葉はか弱さを強調

するようである。

夜の間も魘されて悲鳴を上げるイアラを、ゼロが必死になだめていたのを

知っている。下世話だが、女の家まで行っても何もする気が起きなかつたの

は初めてであった。それだけ、最近魘されることの多い彼女のことを気にし

ていたらしい。

そして、今。

イアラがただの少女なのだと、その手に生々しく感じた。

いつの間にか自分の頭の上でそわそわしているゼロにご苦労様、

と声をか

ける。彼女はしゅんと肩を落とすと、ゆっくりと首を振った。

「……私の所為だもの」

リックは眉をひそめたが、それ以上何かを言おうとはしなかった。ゼロの

一件以来彼女が魔されることが多くなったのは確かだが、だからといって責

めたところで何かが変わるわけでは無いのだった。

「私を理解して、対等に戦ってくれたあの子が好きよ。私のこと怒らずに怖

がらずに、一緒にいてくれるイアラが好き　でも私は、あの子の一番残酷

な記憶を抉ったんだわ」

わざわざ頭の上から降りずにいるのは、泣き顔を見られたくないからか。

彼が一言、”見える” だろうと言つと、嗚咽とともにええ、と返事をする。

「なら理解してやれるだろ」

「……わからないわ」

「どうした」

ガラフが来ると、ゼロは素早く物陰に隠れた。相当彼のことを苦手なよう

である。リックはそれに苦笑いしながら、ガラフを見上げた。

「あいつは　見つけられたのかねえ、”家族の代わり”を」

「……さあな」

少女が潜在的に求めているものくらいは、二人とも知っているつもりであ

る。それは”此処” にいて得られるものではないのだと、判つてはいても。

もしかしたら自分たちが、彼女にとってそうであれば良いと、思

つていた
のかもしれない。

着替えて食事をしているイアラに、グラフはいつもと変わらず大丈夫なのか、と聞いた。彼女は声でわかったのか、手を止めたが顔は上げない。

「ああ」

不安定な表情は見て取れたが、そんな時なんといえは良いのか、彼は知ら

なかった。それから暫く誰も何かを言おうとはせず、秒針の動く音だけが妙に大きかった。

「イアラ、今日は休まないか」

唐突なリックの言葉に顔をあげ、彼女はいい、とだけ答える。それから

傾げて彼を見上げた。

「なんで？」

「なんでって 顔色悪いぜ」

「大丈夫だ。身体が疲れてるとかでもない」

イアラが食器を持って椅子から飛び降りると、ゼロもそれについて行く。

羽の動きが、どことなく忙しい。

「どうして、イアラ」

「体動かせば、忘れられるから」

何を、とは言わない。

取り残された三人は何を言うでもなくその背中を眺めていた。グラフが何

事が言いかけたようであったが、とうとう言葉にはならなかった。なつたとしても召集のベルの音にかき消されていただろう。それと同時に大剣を取って出ていくイアラと、マントを羽織ってそれを追うガラフを見て、ゼロが病んでるんだわ、と、呟いた。

ガラフは、隣を歩くイアラに視線を向け、立ち止まり、呼び止めた。彼女は急いでいるのに呼び止められたのが不服なのか、顔をしかめて彼を振り返る。

「なに？」

「オレと会う前のことを、覚えているか」
彼女の顔が、さっと青くなる。それからぶるぶると頭を振り。

「ぼんやりと、なら」

「……………そうか」

その目に感情らしきものを見て取ったイアラが不思議そうに首を傾げたが、

彼はゆっくり頭をふり、再び歩き出した。

それから少女のことを肩越しに一瞬振り返り。

「あまり、心配をかけるのは関心しない」

相変わらず、抑揚も感情も読み取れない声で。

イアラの足が、一瞬止まったのがわかった。立ち止まらないガラフを追っ

てその足音はすぐにまた聞こえ始める。彼は、誰にも気付かれない程度に眉

をひそめる。自己嫌悪。

自分が彼女に掛けている言葉は全て、彼女の為のものだった。ただろ

うかと。

さっさと普通の少女に戻ってくれることをどれだけ願ったか。自分の、胸を

焦がす贖罪の気持ちをさっさと忘れてしまおうに。

それでも、どうだろうか。

この手は、彼女の望むものを与えようと必死になるのだ。

それ以外に、どうやって償えばよかったのだろうか？ そ

んな彼の

内心も知らず、いつもの調子を取り戻した明るい足音がガラフを追って早足

に歩いてくる。

背を向けたままのガラフに、イアラは走ってついて行く。その言

葉の真意

など知らず、今はただ、嬉しかった。

一話

2

おまえなら大丈夫さ。

なにが？

こんなところに居たくないだろ？ 俺たちが外に連れてってやるよ。

……そと？

そうだ。行きたくないのか？

………いきたい。

「ガラフ！」

彼は聞きなれた相棒の声で我に返り、三人がかりで斬りかかって来た敵兵の

首を無造作に飛ばす。以前はその音と臭気に吐き気さえ催したものであったが、

今は自然とそんな音は聴覚が受け付けなくなっていて、背中あわせに荒い息遣

いで大剣を振り回す彼女の声すら遠くに聞こえた。

彼は小さく息をつくと、怪訝そうな顔をするイアラを見下ろす。

まあ、こん

な場所で物思いに耽っていたのだから当然か。少しは場をわきまえるというこ

とらしかった。

「悪い」

相変わらず表情も抑揚も無く呟いた彼を見上げ、イアラは呆れ顔で首を傾げ

る。手に持った剣が重いが、そんなことは今は気にしていられない。

「どうしたんだ、ぼけっとして」

「……酔っていた」

「……控えたほうがいいんじゃないの」

何を、とは解っていても口には出さなかった。わざわざ言わずとも、彼はわか

かっているに違いないから。

イアラはぐつと大剣の柄を握り締め、敵陣に圧され気味の場所へ走った。ま

だいける、まだやれると、一振りごとに叩き潰し、斬る、その形容しがたい音。

悲鳴。血の、匂い。吐き気がして、こみ上げてくるものを強引に飲み込み、

手のひらに残る感覚を否むように再び剣を振るう。咆哮する。動く、その目に

映るもの全て、跡形も無く叩き潰し、両断し尽くしてふと、顔を上げれば。い

つしかそこに、屍と血の池と瓦礫の上に佇んでいるのは彼女一人なのだった。

生臭い臭気にやっと自分を取り戻し、口元を押さえて崩れ落ちた少女を、隠れ

た同胞たちの怯えた視線が突き刺す。

血の匂いに酔って、自我さえ忘れて、風のように走り抜けて、ここまですて

”ここ”に来る意義を自身に問う。

あるわけがない。

そんな下らない自問自答を自分で打ち切り、苦笑する。

つい最近、イアラは自分が”風刃”と呼ばれ、敵にも見方にも恐れられてい

るのを知った。そうやって、”銀鬼”　　グラフが味方をなくしていったのを

知った。

銀鬼は風の刃と荒野を駆り、全て無に帰するのだと。聞いたときは泣きたいような、叫びたいような、気持ちになった。そんな形容詞で片付けるなど。わたしはまだ人間だし、ガラフは最初から魔物になど堕ちてはいないと。

「大丈夫か」

背中側から聞こえた声に、振り返らずに首を振る。

「駄目だな……血を見るとさ。忘れるどころか」

鮮明に。

頭を叩き割るために何度も振り下ろした岩の冷たい手触りも。腕を引き千切

り、脳漿を踏みにじったあの音も。

吐き気すら覚える程苛烈に、思い出す。

「……刃……か」

見下ろすガラフに、なんでもないんだと笑った。

ガラフは、少女の身体が大きくのけぞったのを見ると、近くまで移動して、

腰を下ろした。風が喉を通り抜ける、乾いた音がする。眠っているイアラの手

が彷徨い、毛布を掴んだのが見えた。

引き攣った悲鳴が大きくならないうちにその口を塞ぎ、耳元で落ち着けと小

さく言ったガラフの腕にイアラの両手が爪を立て、深く傷をつける。足はじた

ばたと暴れ、くぐもった悲鳴が零れた。

ガラフは、昼間とは全く違う彼女の様子に内心どうしようもなく動揺しつつ、

爪を立てる彼女の片腕を掴んで床に押さえつける。行き場を無くし握り締めた手のひらに、爪が食い込むのが見えた。やがてもう片方の手からも力が抜けてぱたりと床に倒れる。爪を彩る紅が生々しかった。悲鳴を上げていくわけではなさそうだと確認すると、ガラフは彼女の口を塞いでいた手を静かにどける。

静寂の中に、小さく嗚咽が聞こえた。イアラは、さっきまで暴れて散々に傷をつけた両腕で目元を覆って泣いているのだった。

彼は後悔とも不快感ともつかない感情を瞳に過ぎ行かせ、それを覗き込む。

「……イアラ？」

「ごめんなさ……っ、ごめ……あ、う……ッ」

「イアラ」

「いやああッ」

「おい」

ガラフが小さく声を掛けると、彼女は薄く目を開いてその腕を掴んだ。逃がすまいと爪を立て、それを掻き抱いた。

「……ころしてやる……」

低い声に、息を呑んだのはガラフのほうであった。小刻みに震える細腕を不意に恐ろしいもののように感じて、思わず少女を突き飛ばす。我に返った彼の手が肩に触れるとイアラははっと眼を覚まし、飛び起きた。震える両手で自分

の肩を抱き、思い出したようにガラフを見上げる。

「あ……っ」

「……大丈夫なのか」

言いながら涙を拭う仕草が恥ずかしかったのか、イアラはぶるぶると頭を振

つてその指から逃れた。

それから自分の爪が赤いのに気付くと、ガラフの腕に手を伸ばして傷を探す。

見つけると悲しげな顔をしてその上に手を添えた。

「ごめん」

「謝る必要はない」

イアラは顔を上げ、むっとした顔でガラフを見上げる。もう、さつきまでの

面影すら感じないような素振り。そうなんだろうよと吐き捨てるように言っ

詰まらなさそうにそっぽをむいて足を投げ出す。気まずい沈黙が、後に続く。

彼女は赤い目を擦りながら暫くそうして黙っていたが、やがてそわそわと目

を泳がせ始めた。

「……眠れないのなら、起きておけ」

「別に、そんなわけじゃ」

「ならばオレを信じていろ」

イアラはぱつと振り返り、どうしたと見下ろしてくるガラフを見るなり赤面

して黙り込んだ。彼を見上げて二、三度口をばくばくさせたかと思つと、片手

で顔を覆い隠すようにしてため息を吐く。

「真顔で言う事かよ……。相手は選んだ方がよいぜ」

「何のことだ」

「うあ　っ、もう良い！　頭冷やしてくる」
ふらふらとテントの出入り口に向かう背中に向かって伏兵に気をつけるよと
柄にも無く冗談など言ってみたガラフに、イアラは振り返らずに手を振って答えた。

唄が、聴こえた。

優しい旋律は子守唄であると思われた。ゼロはガラフの大鎌にもたれていた
体を起こし、その声に聞き入った。聴くに心地よいアルトの声は、いつもより
も柔らかかで、外を照らす月光に融けて空気と同化して充ちていく。
光はテント
の中にまで透って、その中でふと、ガラフの表情が沈痛なものに変わるのを見た。

ゼロはそれから視線を逸らし、解いていた深緑の髪を掻き揚げる。

「イアラの声」

「いたのか」

ゼロに気付いたときには既に、それは元の鉄仮面に戻っているのだった。

「私が出る幕なんて無かったけどね」

そう言っつて頂垂れる。ガラフはそれをちらりと見やり、再びまっすぐ、何も

無い場所に視線を向けた。

それから、ふと自分の大鎌を見る。

「……優しい夢を見せてやれるか。あいつに」

「そんなことが可能ならね。貴方以上に、見せてやれる人なんて居ないと思う」

けど？」

「オレには決して、出来ないことだ」

抑揚の無い、声。こんなものではイアラの歌声に合わせて唄うことさえ出来ないのだ。まして、自分は。

「饒舌なのね」

どこまで読んだのか、彼女は紅玉の目を細め、哀しげに微笑った。イアラが戻ってくるとゼロは項垂れていた顔を上げ、彼女の腕に抱きついた。

本人は驚いた顔をしていたが、やがてふっと笑ってその背中を撫でる。透き

通った薄い羽が、はたはたと震えた。

「どうしたんだよ？」

「イアラは私を、嫌ってない？」

「無いよ」

「私はイアラの側に居ても良い？」

「ああ」

「苦しいことも話してくれる？」

「どうしたんだよ？」

静かな掛け合いを、ガラフは傍らで聞いているだけであった。

「ガラフ。と特にイアラ。非常に残念なお知らせだ」

帰って早々、リックはソファに座って二人を手招きした。ゼロがイアラの頭

の上で思いつき顔をしかめたが、それは無視して彼らを自分の両側に座らせる。

「なんだ」

「銃器の流通してる町があるんだそうだ。全く、上も人遣いが荒いよなあ」

「……そもそも、人と思ってるのか」

ガラフの独り言にリックは酷く傷付いたような顔をして、すぐに地図に視線

を落とした。ふとイアラのほうを見ると、彼女は焦点の定まらない目で前を向き、膝の上で両手を握り締めていた。

彼女は、地図を見下ろしてじつと、遠い場所を見ていた。

人を殺すために駆ける銀。角度によって蒼く輝き。家。道。転々と転がる屍。

累々として、濁った目で見ている。イアラを見て。笑う。

殲滅……廃村　わた、し

「イアラ？」

ゼロの心配そうな声で、我に返る。イアラは大丈夫だと笑うと、リックに先

を促した。ガラフは暫く黙っていたが、リックに視線をやり、殺す方は上に任

せると、一言告げた。意味を理解しかねているリックに、向き直る。

「オレたちは、確保に撤する」

「あ？　ああ。わかった」

リックは複雑そうな表情で頷き、再び話に戻る。

何が、変わったというのだろう。

ガラフが戦闘に関して何か意見するようなことはこれまで無かったのである。

ただの一度も。

彼の優しさはこんなにも、目に見える形だったのだろうか。

イアラは町を目の前にして舌打ちした。

何が、殲滅だつて？

こんな廃墟を、これ以上どうしろってんだよ、あのハゲ共！
そんな表情を見て取ったのか、ガラフはイアラの肩を軽く叩いた。
イアラは

彼を見上げると、眉間のしわを更に深くして前を見据える。

恐らく崩れた建物の影に居るのであるう人の気配、そして灰色一
色で構成さ

れたような味気ない背景が、酷く不愉快である。屋根はぼろぼろに
なり、ある

はずの場所にあるはずの建物が無い。無残に折れて、枯れた木々。

道の石畳は

ところどころ引き剥がされ、割れている。これでは地図などあつて
無いような

ものだ。

見通しが悪いその景色に、ひどく心がざわついた。

何が原因かなんて、此処最近頻繁に見る夢を思い出せば考えるま
でも無かつ

たが。

「休んでいても良い」

「はっ、バカ言うなよ。わたしはお前と」

一緒に居たいって

「一緒に居るんだつて、言っただろ」

大鎌を構えもせずただ持って自分を見下ろすガラフを見上げた
イアラの双

眸が、すつと細くなる。

憎、い

「え？」

「なんだ」

目を見開いたイアラを、ガラフが同じ姿勢で見下ろす。彼女は片手でこめか

みをおさえ、ひどく狼狽しているのが見て取れた。

わたしは今、何を考えた？

憎いと。誰のことを？

ふと、継るような目で彼を見上げる。

「なんでもない」

「大丈夫だって」

不安げなイアラの声に被せるように、リックがそう言って笑う。それでも暗

い顔をした少女の両肩に、大きな手が二つ乗せられた。

それは、無限の孤独から少女を救い出し、

光も闇さえも無い空白に地獄の業火を点し、

不安定な心の行方をまつすぐ照らしてきた、

まるで導のような。

イアラの表情が、ふっと、和らいだ。その部分から伝わってくる体温が、まるで
家族のような。

「……すっげえ子供扱い。最悪」

「ガラフが父親か？」

「リックみたいな浮気性は良い母親になれねえな」

豪快に笑ったイアラの背中を、不服そうなリックの手が軽く押し出した。彼

女が不思議そうに顔を上げると、彼は苦笑して銃を構えた。

イアラは特にそれ以上気にすることも無く、目の前に広がる廃墟を見据えた。

三話

3

怒号と銃声。悲鳴と笑い声と暗闇。

肉を裂き、骨を断つ感覚はもう一生消えないのだろう。沈んだ鉛色の瞳はリ

ノリウムの床を流れる真紅を追い、やがてその視線は掃除用にある、壁と床の

狭間の排水溝にたどり着く。

ただ一人生き残っていた彼の鮮やかな青い髪先端は血の色に染まり、部屋

の中には異臭が漂っていた。まだ幼く、少年ですらなかった彼は耐え切れずそ

の場に膝をついた。床に手をつき、下を向いた彼の大きく見開かれた目は大粒

の涙を流しながら、血に塗れた自分の手を見下ろす。白すぎるほどに白い手は、

彼が外に出たことさえないという事を如実に物語り、周りに横たわっている子

供達が、少し前までの惨劇を思い起こさせた。

少し前までの。

「……………うっ。……………」

喉から、押し殺した声を出すそれは嗚咽のようであったが、それ以上の声は

出てこなかった。声をあげて泣く事を知らずに 否、禁忌とすら思っていた

のかもしれない。どこへ逃げても隠れても、声を出せば見つかってしまうのだ

から。

泣いたら見つかる。

見つかったら殺される。

だから、その前に相手を殺さなくてはならない。

少年の耳に、悲鳴と狂った笑い声の残響が響いていた。毎日のように。その

たびに もっと痛くないように殺さなくてはと、わけのわからない強迫観念に、

押しつぶされそうになる。彼が優しかったのか、それとも悲鳴を聞きたくな

っただけなのか。とにかく、殺し合いをさせられるたびにそう思った。

不意に頭と胸に耐えがたい痛みを覚えて、ガラフは絶叫し、胸を押さえた。

心臓の辺りに熱い何かかわだかまり胸を焼くような痛み、とうとう意識を手

放し。崩れ落ちる寸前、その手がなにかに縋るように伸ばされ、ぱたりと、墮

ちた。

大国ゼネアの黒歴史。とりわけその犠牲となったのは身寄りの無い戦災孤児

とよばれる子供達であり　これこそが、ガラフ＝Gが強くならざるを得なかつ

た背景なのである。

イアラは瓦礫の下で息を潜めて向こう側の様子を窺っていた。遠くで銃撃戦

があっている、音が非常に耳障りである。壊れた塀に体を預け、右手で左肩を
掴んで大きく息をついた。

時々、千切られかけたときの痛みが蘇ることがあるその部位を、小さな右手
で防具の上から握り締め。

こんなに 震えているのは、なぜ。

実を言えば、彼女の、故郷が滅ぼされたときの記憶は完全ではない。頭が、

その事象を受け入れることを拒んだのだった。良くある話ではある。むしろそ

んな記憶は無いほうが精神衛生上は良いので、彼女もあまり気にしていなかつ

た。しかしぼやけていた記憶の細部を、最近良く断片的に思い出す。ゼロと戦

ったとき、あのやりとり、その後からである。

村に帰って二人の男に殺されかけた、そして夜ガラフとリックに会うまでの

空白の時間を、色あせていた彩りを、そのときに感じた思いをふと、夢に見た

り口走ってしまうことが多くなったのは。頻繁に見る悪夢、悲鳴を上げすぎて

朝には満足に音を発することのできない喉。

それでもガラフとリックとゼロの姿を見るだけで、まだ安堵することは出来
た。

そして ガラフの側に居るとき、笑っているとき、背中を預け、戦って

いる最中にさえじりじりと胸の奥をあぶり、焦がし続けるどす黒い炎から目を

逸らす。

もう、足りない記憶を埋めてはいけないのだと、感じていた。きつと、ろくなどになりはしないのだから。

ゼロを記憶をつついてしまった事で苦しめてはいけない。今の彼女に悪意は無いのだから。

そんな思いが行動から見て取れて、だからこそゼロは悔やむのだ。いつそイ

アラが自分の保身の為に自分をなじってくれたならばと。この少女は優しすぎで、自分のことに無頓着すぎた。

リックは弾を入れ替えながら、小さく舌打ちした。

始まってから何時間が経った？ たった半日のうちに、自分は五人も致命傷

を負わせてしまったのだ。若い頃はもっと、もっともっとと、コントロー

ルは確かだったはずなのに。もう、こんなにも腕が落ちているのだ。さび付い

た賢人の像に隠れて銃弾をやり過ぎ、相手の足だけを狙って撃ち、再び身を

隠す。半日でたったの五人、しかも致命傷程度の傷など、本来ならありえない数字である。

何故なら、標的が動く為狙いが外れやすいから。苦戦を強いられている一般

の兵士から見れば大した腕を持っていたが、彼自身はそれに満足しなかった。

オレはこんなにも、弱かったのか。あんな一般人どもの動きすら

見切れない
ほどに？

背後から棒を振りかぶった男の一撃をかわし、銃口で殴って気絶させる。逃
げられると厄介なので足は撃っておき、再び死角を走りはじめた。

廃ビルの中、石柱の陰で銃弾をやり過ごしていたイアラは不意に銃声が止まったことに眉をひそめた。弾切れかと思った横から鉄鎖で殴りかかってきた男

の一撃を避けて成る程、と呟いた。銃声は陽動で、足音と気配を隠す為だった

のである。手違いは、殴りかかったら当たると思ってしまう素人考えか。や

けに、冷静に考える。

心臓が騒がしい。

先程まで銃を構えていた男はにやにやと卑らしく笑いながら、防戦一方のイ

アラを見ていた。それがやけに”あの”笑みと

二人の男と暗い空。そしてぼろぼろの町。

「……気に入らねえ」

少女は小さく呟くと自分めがけて振り下ろされた鉄鎖を掴んで引き寄せ、そ

のまま男を壁に叩きつけた。それでも起き上がろうとする彼の顔面に膝蹴りを

食らわせ、しつこいんだよ、と悪態を吐く。肩を掠めた銃弾でもう一人の存在

を思い出し、大剣を抱えて柱の影に走り、転がり込んだ。

右肩に滲んだ血を手で乱暴に拭い、大きく息をつく。

壁に残った銃創を見ると、男が手にしているのは散弾銃のようで

ある。

「……ツイてねえなあ」

男はイアラが怯えたとしても思ったか、ここぞとばかりに罵声を飛ばす。笑い

混じりのそれが気に食わない内容だったため、流石のイアラも我慢できなくな

った。しかめっ面で剣を構え、それに身を隠して男の方へ走る。相手の弾が頭

と胸以外の場所をすれすれで掠めていく。それで竦むような少女だと思われて

いることにさえ、腹が立った。舌打ちするのが聴こえ、右肩を数箇所、弾けた

弾が抉る。

悲鳴を噛み殺し、力の抜けそうになった膝を叱咤して走りつづけ。

鼓動が、高鳴る。

イアラはこの感覚を知っていた。これは、あの時の。

……あの、ときの。

相手の銃を斬りおとし、きつと、睨みつける。手から大剣が落ちて、重たい

音を立てた。

赤 鮮やかに。

やめる。

殴りかかる。一撃を間一髪でかわされ、前につんのめった体制を建て直し。

勢いのついた拳を引く。

やめて 止まってくれ。

殴られ、よろけた男になおも殴りかかろうとする手を必死に抑えながら。

嫌だ！

蹴倒した男の腕をねじり上げ、押さえつける手が、わなわなと震

えた。殺し

たがる体を押さえるのが精一杯なのだった。悔しそうだった男の目が、不安げ

にイアラを見上げる。

「……おい、大丈夫なのか？」

「……………っ、るさい」

絞り出すような声で一言、そう言った。

「十人つてとこか」

リックは背中越しにガラフにそう言つと、銃を構えて前を向いた。久々にこうして背中を預けられていることが堪らなく嬉しくて、思わず口元

が緩む。こんなのは、不謹慎なのだろうが。

「びつくりだな。お前がかこまれてるなんてよ」

「……………こんなに」

「あ？」

「難しかったか。殺さないことは」

リックは無言で顔を上げ、引き金を引く。同時に、廃墟から飛び出してきた

少年が倒れた。細い脚を朱に染めて、睨みつける目が痛々しい。

この辺は特に若者や年配者が多いようである。だからといって戦意を喪失し

ては居ない。いつそなぎ払い、殺した方が早いような状況さえガラフが大鎌を

振るう理由にならないのは、彼女が、悲しみを押し殺して笑う姿を見た

ないからか。

「厄介だ」

「そうか？ オレは嬉しいね！ まるで、昔のガラフが戻ってきたみたいでさ」

ガラフははつと目を見開いたが、彼に何か言うよりも先に斬りかかってきた少年を大鎌の柄の部分で殴り飛ばし。どうということだと、静かに言った彼に、

「アラを利用してみたいだけだなと、リックは苦笑した。

「ガラフはもう忘れてっかな」

壁に背を持たせかけ、ガラフをまっすぐに見上げ。

「今とあの頃、お前にとってはどうちが地獄だろうな」

「…… 考えたくも無い」

リック「デュオというのは、彼が”施設”に入ってからつけられた名である。

わずか、四つの時のこと。

割り当てられた部屋は散らかり放題で、事情を良く知らないリックに不穏なものを感じさせた。特に親が殺されるのを見た後。彼は放心状態で

家の床に座

り込んでいたのを軍の人間に見つけられた。

連れて行かれた場所は主に人間を使った生物兵器を作ることに熱心な研究施設で、リックは”試作品”を普通の子供と生活させるとどうなるかと、研究者

達がほんの暇つぶしのつもりで始めた実験のために連れてこられたのだった。連れて行かれる途中の冷たい床を、よくおぼえている。

その、”試作品”は、窓の側で毛布を羽織って本を読んでいるのだった。日

に当たったことが無いのか透けるように白い肌と、角度によって蒼

く光る銀の

髪を持つ子供。細い腕が伸びて、頁をめくる様子に、魂を抜かれたように立ち

尽くしていた。そんなリックにやっと気がついた彼は顔を上げ、首をかしげる

ような仕草をする。少女さながらの可愛らしい顔の中でただ二点、深く沈んだ

鉛色の目がリックを見た。

「……だれ？」

「あ？……あ、え……？」

赤くなって口ごもったリックを暫く見ていたガラフは、何も聞かないうちに

興味を失ったように顔を伏せた。

「そう」

「え？……うん」

わけがわからないのでとりあえず頷いたその耳に、けたたましいベルの音が

響いた。ガラフは小さく体を震わせて傍らに置いていた剣を取り、立ち上がる。

それを引きずるようにして扉の前まで行くと、それに手を掛け、絶対に、開け

ちゃ駄目だよと言いついて外へ消える。

その、作りつけたような無表情が、リックには幼心に恐ろしく思われた。

扉の向こうの惨劇を彼が知ったのは、それから数日後のこと。

数年後に駆り出されるようになった戦とその施設。地獄と呼ぶに相応しいの

は果たしてどちらだったのか？

そんなこと今は 考えたくも無い。

四話

4

ひとときわ、大きな、音がした。

銃声ではなく、もっと大きな　そしてリックの、半ば悲鳴のよ
うな声。

「ガラフ！」

心臓をわしづかみにされたようだった。突如振って沸いたような
息苦しさに

イアラが振り返ると、塀に隔てられた向こう側の道でガラフが倒れ
るのが見え
た。

それを合図のように始まる銃撃戦。他の兵士が応戦している間に
リックと他

数人がガラフを物陰に引きずっていく。それだけで怪我の痛みなど、
忘れてし
まった。

「うそ、だ。何で」

「小型の大砲みたいね」

「そんなものを人に向けるのか！」

「落ち着きなさい！」

ゼロに掴みかかりそうだったイアラの手が、それに気圧されて小
さく震えた。

ゼロはなおも強い調子で彼女の目を見据える。

「今すべきことをするの」

「……ガラフは……装甲車とかなんかだと思われてるのか……」
失意と怒りに震える声を制し、ゼロは彼女の服の袖を引いた。

ガラフに向かつてなにか怒鳴っているリックと。走り回る兵士達と。微かに見えるガラフの、不思議な色調の銀髪。角度によって青味がかかるそれがなにか、とても重要な何かを彷彿とさせて黒い炎が燃え上がるのを感じても、それから逃げるように踵を返した。

まず、優先すべきことを。

優先すべきことって何だ？

イアラは胸を掻き毟りたくなる様なもどかしさを押さえ込み、飛んでいくぜ口の後ろを走った。

しばらく走っていただろうか。道のりはまったく覚えていないが、しっかりと閉ざされた木製の扉が見えた。

ああ、あれを開けてはいけないんだな、と、思った。漠然と。

思いと裏腹に、その足は軽々と扉を蹴破る。勢いに任せて大砲を一刀両断し

た少女を敵だと、その場に居た全員が認識するのに、少しの時間を要した。イ

アラはわきに走りこんできた男の腕をねじり、骨の碎ける音、そして悲鳴。次

いで後ろで銃を構えたものにそれを投げつけた。切りかかってきた少年の顔面

を掴んで壁に叩きつける。頭蓋の割れる鈍い音、力を入れると簡単に碎けて悲

鳴を上げる間もなく絶命。視界の端にゼロの驚嘆の表情が映って、自分のして

いることを理解する。

やめようと一応の努力はしてみるものの、それよりもわけのわからない激情

が先に立った。

……駄目だ。

「イアラ？ どうして……」

ゼロの声を聞きながら、両側から切りかかってきた青年の一方は目を潰し、

他方は片手に持ち直した剣で叩き潰した。床を流れた血に足をとられ、逃げ送

れた少女の頭に躊躇い無く剣を突き立てる。

……こんなの、違う。

「イアラ！」

……そうだ、やめなきや。

大剣を振るう。その場に居る者達にはもう、戦うだけの覇気は無かった。

ゼロは何とか止めなくてはとその腕に取りすがってふと見上げたその表情に、愕然とした。

「……何で、笑ってるのイアラ……」

言い終わらないうちに投げ出され、反応するのが遅すぎたのか壁に叩きつけ

られた。息を詰らせ、落ちて体を丸めた彼女をリックが拾いあげる。悲鳴を聞きつけて駆けつけたのだろう、肩で息をする彼を見上げる目は恐怖

と恐慌に潤んでいた。

「リック 助けて」

「何だよあいつ……」

「わからないの！ わからない……もう」

駄目なのかも。もう、私のせいだ。

そう言おうとしたゼロをそこに降ろし、リックは後ろからイアラ

を羽交い絞

めにして怒鳴った。

「イアラ……おい！ 目エ覚ませよ、このクソガキ！」

「離せ！」

イアラも怒鳴り返すと、信じられない力でリックを弾き飛ばす。

足元に広が

る惨状を見渡し、彼は目を見開いた。

「これ全部、あいつが」

啞然として立ち上がることにそのままならないリックの眼前を、信じられない

スピードで走り、通り過ぎた影があった。

彼はイアラの腕を掴んで強引に自分の方に引き、彼女を睨み付けた。鋭利な

眼光に貫かれたようにイアラの体がぎくりとその動きを止める。ガラフは自分

を見上げた黄金色の目に安堵と後悔を映し、涙ぐんだ少女のみぞおちを多少

加減して、しかしやや乱暴に殴って気絶させると、崩れ落ちそうになった彼女

を支え、自分もその場に屈みこんだ。

「……くっ」

「ガラフ、大丈夫か？」

「寄るな」

その声に絶対的な響きを感じ、リックは進みかけた足をとめる。

ガラフは苦しげに息をつくと、傷口を押さえつけた。そろそろと何かの中を

這い回る、吐き気を催すような感覚と、傷を侵食し、埋めていく生々しい音が

聞こえる。こんなものは久し振りすぎて、忘れていたのに。

「なあっ」

気絶したイアラを見やり、次いで焦れたような表情を浮べるリックに視線を移した。

ふつふつと湧き上がるのは、怒り。

「……………何があった。この惨状はなんだ！」

ゼロに傷を治してもらい、説明を聞いたガラフは、腕の中のイアラを見下ろした。全身に痛々しい傷を負った彼女は、あまり穏やかではない寝息を立てている。

リックはそれを見下ろすと、遠慮がちに視線をゼロに向けた。

「ゼロ、イアラは治せないのか？」

「ガラフの傷を完治させてしまったから、暫くは無理よ」

ゼロは大きいため息をつく、地面に降りた。もう、飛んでいる体力も無い

と言う事だろう。リックはしかめっ面でガラフにどつする、と声をかけたが、

ガラフはゆっくり頭を振るだけであった。

ゼロが、思い出したようにガラフに振り返る。

「あなた……………あんな傷で、動けるはず無かった」

「知らなくて良い」

ぴしゃりと言ったのけたのはリックである。ゼロを睨むように見下ろし、た

だそれだけ言ってガラフを見上げる。当人は諦めると言って、すぐに目を逸らした。

もう、どんなに頑張っても”これ”は治らないのだからと。

廃墟はしんと静まり返り、ところどころで軽傷の兵士達が瓦礫をどかし、土

気の下がった町民達を引つ立てていくのが見える。廃墟の灰色が際立つ景色の

中に、ちらほらと赤や肌色が動く。さつき出てきたばかりの廃墟の中には、未

だに原型を留めていない人間の死体が放置してあって、それらと一緒に呆けて

座り込んだり叫んだりしている人間達が正気を取り戻すことは二度とないのだ

ろうと思うと、どうにもやりきれない。

重く濁った曇天は、この場にあまりの相応しさ。グラフはそれから視線を

ずらし、再びイアラに目を向けた。

こんなもののために、お前はいくつ失ったのか。

救いたくて伸ばしたはずの左手は、救い方を知らなかった。そもそも憎まれ

るべきその身で救いを差し伸べようとするなどおこがましく、あまつさえ握り

潰そうとすらしているその手は、もう持ち主の意向など構わないのだ。

こうなることはわかっていたはずなのに、それでも彼は、その左手で彼女の

頭を撫でていた。

白い天井。

包帯でぐるぐる巻きの腕。

目が醒めた時考えることが出来たのはそれくらいで、他は視界に

靄が掛かっ

ているような感覚で、何も考えることが出来なかった。判然としな
い意識で、

首だけ動かしてそこがどこか確認しようとする。

なにか可愛いことがあった？

……わからない。

かなしいことがあった？

……わからない。

単調な自問自答が終わると重たい体を起こし、伸びをする。その
状態で見回

して、やっとそこが自分の部屋であることが判った。質素な家具と
狭い室内が

やけに懐かしく感じられる。暗くてよく見えないが、サイドボード
の上にゼロ

が寝ているのがぼんやりと見える。肩を触ると包帯の感触がしたが、
痛みはそ

こまで酷くない。どうやらゼロには随分無理をさせてしまったらし
い。

思い出すのもおぞましいことがあった、のはなんとなく思い出せ
た。自分は、

絶対にしてはいけないことをしたのだと。

「起きたのか」

「ああ。ガラフ？」

名前を呼ぶと、傍らの椅子に腰掛けていたらしい声の持ち主は立
ち上がり、

明かりをつける。イアラは突然部屋を満たした光に顔をしかめ、徐
々に明るさ

になれた目が大きな影を見つけた。ガラフの姿を確かめると、すぐ
に目を逸ら

し、俯いた。

「どうしてかな。今はあんたに会いたくなかったよ」

「そうか」

「わたしはなにをした？」

否、何を見た？

イアラは小刻みに震える両手で胸を押さえた。心臓の音が生々しく聞こえる。

早鐘のように鳴り響くそれを必死に抑えつつその手に神経を集中させる。

さつきまで見ていた悪夢。さなかにガラフの声が聞こえたのも、多分気のせい

ではないのだろう。自分の右腕に赤い、大きな手の跡を見つける

と、それに

小さな左手を重ね。

「わたしはガラフなんか知らなかった。知らなかったんだ。だから、あいつら

の顔が似てたとか、そんな気分になっただけで。ほら、状況が似てた

ただろ。だ

からさ。ガラフは関係ないんだ。そんな気分になっただけ」

手の震えが、大きくなる。呟く言葉がまるで呪文のように、狭い室内に、そ

の静けさに融けていく。イアラは、村を滅ぼしてしまった男達のことを思い出

してしまったのかと、ガラフは直感した。そしてそれはやはり、

がしりと、シャツを掴む手があった。

イアラの、小さな手が。

「怖いんだ。……この手がまた何か、何かしてしまうんじゃないか。今度は、

あんたに剣を」

がたがたと震えるその手に自分の手を重ね、ガラフは彼女のベッドの横にも

う一度腰を下ろした。標準サイズの椅子が、少し窮屈に感じる。

「……痛むか。傷は」

「ぜんぜん」

「……そうなくてもお前は悪くないだろう」

イアラは泣きそうな顔を上げ、彼の青味がかかった銀の髪を見上げた。そして

その目を。

あの二人の男と何処までも似ている、相棒の姿を。

「ガラフなんか大ッ嫌いだ。どうしてそんな目をしてる？ そんな色の髪を持つ

ってるんだ？ なあ、やだよ。あんたに憎い奴を重ねるなんて

嫌……」

ああ。

ガラフは頷く以上のことはせず。ひとつ、ふたつとシーツに増えていく染みを数えていた。

イアラはこんなにも脆く、危うい子供なのだ。

下を向いた彼女の表情がわかるようで、酷く胸を痛めている自分に気が付い

た。今この瞬間、体を這いずり回る衝動を抑えなければ、きっとこの右手に棲

んでいるものが彼女の首をへし折るのだろう。この少女の、必死の信頼を裏切るために。

忘れていられれば良かったのだ。

不覚にもゼ口を、恨んだ。

五話

5

深夜。ゼロに促され、リックが渋々起きて行くと、ソファに座っていたガラフが顔を上げた。リックが向かいのソファに座ると、彼は目を伏せた。どこか、言い出しにくそうにしながら。

「……………お前とも会う前のことだ」

「なんの……………」

「昔の、話だ」

懺悔とも言おうか。そんなことを呟いて、ガラフはふと、頭を振った。

施設にはガラフのほかにも、年長でもっと強い者が居た。双子で、名を兄はゾ

ーグ、弟はズークといった。二人はとくにガラフを可愛がっていたが、それは

きつと一種の優越感だったのだろう。化け物を作るための施設に、この二人ほどそれに似つかわしい性格をしている者はいなかった。

兄弟ではなかったが、何故だかガラフはその二人とよく似た容貌をしていた。

生まれた頃から施設にいたことを考慮に入れると、実は彼自身この二人に似せ

て作られた擬児なのかも知れなかった。実際、そうであったという

のを数年後

に聞いた。死んだ女の胎にいた赤子を引きずり出して、二人に似せて遺伝子を

操作（この権威である紫闇は十数年後、この技術を誰にも教ええず姿を消した）、

ついでに魔物のそれも組み込んだ文字通りの「化け物」。

残念ながら戦闘能力はオリジナルよりも劣化していて感情面も脆いようでは

あったが、変わりに体と頭の成長は早く、その歳に似合わない背丈と思考力を

有し。

「なーあガラフ、今日は何人ぶつ殺した？」

部屋から出るなりにこやかにそう聞いてくる二人に、うん、と見当違いの返

事をして歩き去ろうとする頭を押さえつけるように撫で回される。日常。手も

洗わないうちにそんなことをされると、ついさっきまでの光景を生々しく思い

出す。よろけたガラフを支えるのが弟のズークだった。

なにやら、二人ともいつもと髪の色が違う。ガラフはそんなことをいちいち

気にする余裕もなく目を背けた。

「疲れた？」

「……ズー……はなして、暑い」

「そっつか」

手を離され、あっけなく膝をつく。未だに頭痛が長引いていて、気分は最悪

である。ふらふらとおぼつかない足取りで自室に戻ろうとする彼に、二人は付

きまとって離れない。おかしい、と気付いて振り返ったガラフの腕

を掴んで、
ゾーグが扉の影に引き込んだ。壁を背に二人を見上げたガラフの目は必死で眠
気に耐えているようである。

「……………な、に」

「お前さ、外行きたいと思わないか」

「……………そと？」

「そう」

知っているよ。外の子は人を殺さなくて良いんだ。

誰かがそんなことを言っていたような気がする。ガラフは行きたい、と一言

だけで力尽きて、眠って崩れ落ちる寸前、彼を抱きとめたゾーグの凶悪な笑み

とその言葉が頭に焼き付いて離れなかった。

「……………手伝ってくれるんだよな、ガラフ？」

リックが少々荒っぽい音を立てて立ち上がる。

「ちよつと待てよ！ 遣伝子の操作って何だ？」

「さあな。人をこういう風にする技術ではないのか」

ガラフの抑揚の無い声がやけにそのことを強調しているようで、

彼は目を逸

らして座り直した。嫌悪感を顕わにした顔を下向け、同じく押し黙っていたぜ

口はそれを見て更に何もいえなくなったようであった。当のガラフは表情も変

えず、その左手が右肩に伸びて何かをおし留めるように肩を掴んだ。

リックが沈痛な面持ちで見ているのに、なんとなく気付いてはい

た。

そもそも、彼らにガラフを連れ出す気は最初からないと言っ
て良かったのか。第一、逃げる為とはいえ彼に人を素で殺すこと
など出来るはずも無い。” 始まる” 前に、必ず薬を服用させられているのをゾー
グたちは知っていたのである。

それにもかかわらず裏門にたどり着くまでに、薬もなしに何人殺
したのか。

半分泣きながら警備兵を殺すガラフの後ろをゾーグは悠々と歩いて
いたが、本人は必死でそのことには気付けなかった。

がたがたと震える右手を手を握っていたゾーグの手が、離れるの
が判った。

既に左手に持った斧は血糊でべたべたになっていて、顔を上げたガ
ラフたちの

目の前にはしかし、それを上回る数の警備兵がいたのだった。ゾー
グの手が背

中を、優しく撫でる。

” できる” だろ？ ガラフ

「……………」

大きく頭をふる。

この時点でやっと、ゾーグが全く人を殺していないことに気付い
た。

「ゾーグが……………」

「そうか、お前は此処に” 居る” んだな？」

背筋が粟立った。つい今しがた完全な拒絶の言葉を彼に投げつけ

たばかりの
ゾーグの表情は優しげな笑みのまま。その指が、強張ったガラフの
背筋をなぞ
る。

「 行け」

「あ ツ、……っ」

もう、叫びさえ喉を介して出てこようとはしなかった。頭と、目
と喉の奥が
焼け付くように熱い。

無意味に涙が頬を伝ったが、拭う余裕も見出せず斧を引きずり応
戦し始めた
彼を満足げに見ると、自分も混ざろうとしたゾーグの肩を叩いた手
があった。

弟のズークが立っているのを見てそちらを向き直る。

少しだけ不服そうだったゾーグは気を取り直して変形させた腕を
元に戻し。

「正門は？」

「がら空き。さっさと行こう」

「裏門は ガラフが片付られれば勝手に出て来るかな」

「無理だな。あいつは意気地なしだから」

ガラフにてこずって斬られる兵士達の悲鳴を聞きながら、踵を返
す。二人は

くすくすと笑いながら正門を目指した。最近された実験のあとから
青味がかっ

た銀髪になった頭は目立つので、隠す算段をしながら、つい最近ま
で可愛がっ

ていたはずの弟分のことなどもうすっかり忘れていた。

「イアラに言うの？ それでどうするの」

ゼロが冷ややかにそう聞いた。ガラスは我に返ると顔を上げ、ああ、と頷いた。

「……………憎めるものがあれば」

あいつは壊れないはずだから？

いらいらと机を叩いていたリックの指が止まり、ガラスを睨むように見上げる。

何か考えていたようだった彼は不意に顔を上げ。

「お前が原因の一端だって知ってもイアラは壊れるぜ」

リックの声を聞いて、立ち上がるうとしていたガラスの動きが止まる。目だけ

で彼のほうを見ると、何も言わずに立ち上がり寝室の扉の前に立つて思い出

したように、ポツリと呟いた。

お前を信じていると。

扉が開き、閉じたときにはもう巨漢の姿はそこに無く。残された二人はそこ

に、大きな虚無がわだかまっているのを見た気がした。

何を考えてるんだ、わたしは。

なかなか眠れずに居たイアラは、寝返りを打って目を閉じた。ガラスが、そ

の髪の色が二人と同じだからと言って、彼が二人と関係がある確証にはならな

いのだ。そう思うと、大嫌いだなんて言ったことを少しだけ後悔する。

今行こうか。否、明日謝ろうか。閉じた目をもう一度開けて、ぐ

しゃぐしゃ

にされて抱き枕と化している毛布を抱き寄せた。

「……ガ」

「呼んだか」

「呼んでない」

低い声に苦笑交じりで答えると、ガラフの姿を認めて体を起こした。

「なに？」

「……死にそんな顔をしていたからな」

「心配？ らしくねえな」

笑っているイアラを見て安心したのか、ガラフは椅子に腰をおろす。イアラ

ラはふと真顔になってそれを見上げ。

なんでこんなに安心、してるんだろう。わたしは。

……なにが、こんなに不安なのだろう。

まだなにか、隠されていることがある気がして。知ってしまったのは、いけ

ないような気がする。

「ガラフはわたしが嫌いか？」

「……何故」

「ときどきお前の目はそんな感じがする」

ガラフの目が少しだけ細くなるのが見えた。それは不快感の表れか。

「わたしはガラフが好きだよ。大嫌いなんで、嘘だよ。だってさあ、こんな

血なまぐさい手、繋いでくれたのあんただけなんだから」

そう言つと、後ろ向きにベッドに倒れこむ。スプリングで二、三回体が跳

ねて、シーツに沈む。冷えた感触が頬を撫でる心地良さに目を閉じる。ガラ

フはそれを見下ろしていたが、やがてゆっくり頭を振って否定の意を表した。

彼女は安堵したのか、口元だけで穏やかに笑む。いつもの活発な笑みではないが、悪い感情は無い。

「……おまえは」

「わたしはあの時死んでれば良かったんだ」

開いた目で視線を交わし、やがてガラフのほうから、ついと目を逸らす。

再び向き直ると彼女の瞼の上を右手のひらで覆い、何か言おうとして開いた

イアラの口に睡眠薬を放り込んだ。

「戻ればおまえは幸せか」

戻れないよ。

イアラの唇が微かに動いたが、声にはならなかった。睡魔が、早くも瞼を

重くした。最後まで言えたかは怪しいが、それでも彼女は言葉を捜し。

だってもどつたらガラフがいない。

頬を伝った少女の涙は、見ないふりをした。

ズークとゾーグが逃げたと知ったのは、ガラフがこの忌まわしい髪と目を

手に入れてから数日後のことであった。

六話

6

君を傷つける盾ならば、僕は喜んで自らを壊そう

君を怖がらす道化ならば、僕は喜んで舞うのをやめよう

君が苦しむだけならば、どうやら僕は不必要

君が笑ってくれるなら、僕は喜んで姿を消そう

下手糞なピアノ曲をメインに、頭の中で不協和音で交響楽をきんきんにかき

鳴らされているような音が響いていた。不愉快な目覚めである。上官に付き合

いで酒をがぶ飲みした日の翌日に似ている。最近はずいぶん忙しくてそんなものもご無

沙汰していたが。イアラはがんがんと内側から叩かれているように痛む頭を片

手で抑えて体を起こす。睡眠薬を飲まされてからの記憶は無く、自分がどれほ

ど寝ていたかもわからない。

見回した自室は相変わらず静かで、暗かった。彼女は一先ずベッドから足を下

ろし、真つ暗な部屋を見回した。

「誰か……痛」

立ち上がった拍子にいつそう酷くなった頭痛に頭を抱え、そのままふらふら

と扉に向かう。

外開きの扉の取っ手を回そうとした右手は外から引っ張られ、前のめりに倒

れそうになつたイアラの肩を、向こうから扉を開けたリックの手が支えた。そ

れから膝をついて彼女の顔を覗き込む。

「大丈夫か？」

「ああ。……わたしどのくらい寝てた？」

「丸一日。今、深夜十二時ジャスト」

そう言つて彼は人好きのする笑みで彼女を見下ろす。

「寝込みを襲つてやろうと思つただけだな」

「はっ。返り討ちにしてやるよ」

「うわ、怖っえー」

暫く二人笑いあい、リックはふと真顔になるとイアラの視線にあわせて屈ん

でいた体を起こし、後ろに立っているガラフを見上げた。ゼロが肩の上でそわ

そわしているのが見える。リックは怪訝そうな顔をし、咎めるような目でガラ

フを見た。

「オレは無意味だと思つ」

リックの言葉に肯いて返し、イアラを見下ろす。実際は彼が、話してしまつ

てその肩の重荷を下ろしてしまいたいのだろう。その結果がどうなるうと。そ

の目はある種の諦念と言つか、悲しみのようなものを湛えて、少女をひどく狼

狽させた。

イアラは不意に背中に冷たいものを感じて後じさつた。 いけ

ないと思つ

たのだ。それを。

聞いては……いけない。

「イアラ」

「言つな……」

心底脅えた目で。しかしながらそれを見下ろすガラフにはやめる意思は無いようだった。

「駄目だ……聞いたら、わたしは、」

不協和音の交響樂。

聞くな！ 聞くな！ 聞くな！

ゼロはイアラを見下ろし、ガラフのシャツの襟を、強く握った。やはり間違っている。

こんな方法でガラフを憎むように仕向けるのは間違っている。

きつと頭では次の言葉がわかっているのだろう。ガラフの目が、それは彼女

の一番聞きたくなかったことだと語っているが故。イアラは縋るような目でガ

ラフを見上げていた。彼は全く躊躇せず、次の言葉を吐こうとする。

「村を襲った二人は、オレの」

「いやあああああああああつ！」

ガラフが言い終わらないうちに、イアラの絶叫がそれを遮る。

「やだつ……嘘だ、うそだあつ！」

こめかみを抑えて座り込むのを、彼は黙って見ていた。やがて顔を上げ、そ

の手を伸ばしてズボンの裾を掴んだ手はがたがたと震え、動揺し絶望の度合い

を改めて確認せしめるようであった。ガラフを見上げるイアラの瞳はあまりに

弱く、彼が受け止めるには重すぎた。大砲よりも破壊力が強いと感じてしまう

のは、いつもの気丈な姿を知っている故でもあるのだろう。

反面、放り出せて安堵した自分がどうしようもなく嫌になっ

た。

憎む相手がいれば少しは楽になるなんて、とんだ大儀名分である。ただ、ガ

ラフは、過去のことを全てこの少女になすりつけてしまいたかっただけなのだから。

「どうして！ どうしてわたしを わかってたならなんで放っておかなかつたんだ！」

半ば悲鳴のような声は、後半で濁って震え、嗚咽に変わる。

「放つて、置けなかった」

これは、本音。廃墟の真中で、憎む相手も愛する対象も全て失って投げ出さ

れた子供を確かに、放つて置けなかったのだ。

その後ろにゾーグだかズークだかの死体を見付けさえしなければ。「ひどいっ……かえして……。わたしの家えっ！ 返して……」

ガラフがすまない、と呟いても、彼女の涙は止まらなかった。止められるは

ずもなかった。彼の一言で何もかもが台無しにされてしまった気さえした。し

きりに床を叩きながら憎いと、彼を好きだと言ったその口が言うのを、ガラフに止める術など無かった。

お前が憎いと。

その黄金の瞳はどす黒い感情に充ち満ちてガラフを見上げる。涙などもう拭

おうとさえせず慕情を呪いで塗りつぶし、もう彼女が笑顔で自分を見上げる日

など二度と来ないのだと、思った。それこそ最初に望んだ状況だったのに、共

に過ごしたたった二年の間に何が変わったというのか。

ガラフ自身にもその心境の変化は理解しかねたが、今とりあえずわかるのは、

彼女の憎々しげな視線が痛いということだけ。

「お前の お前のせいでわたしはいくつ失ったんだ」

違うんだ。そんな言葉を言いたいんじゃない。

視界の端で、リックが悲痛な表情で顔を背けた。どちらを庇って良いものか

わからなかったのだった。

「……嫌いなはずだ、嫌われてたはずだ。だって、おまえはわたしの記憶を恐

がってたんだから。だったら殺せばよかったんだ。殺せば。 て

めえをわた

しが信じてられるうちにわたしを殺せばよかったのに！」

「……………！」

風を切る音を聞いて首を傾けたガラフの左頬を、小振りの短剣が掠めて赤く

線を引いた。振り返った先で、イアラが悪鬼の目でガラフを見上げた。奇しく

もサイドボードの上から取ったのだろうその短剣は小さな頃からイアラが持つ

ていた、あの短剣であった。

イアラは。

悔しかったのだ。何も知らずにいたことが。たった今聞かされたことが。ど

うしようもなく。だいつきらい、死んじゃえば良いんだ。死んじゃええば。

ちがう、わたしが殺す。

「ガラフ！」

リックの静止も聞かず、ガラフは第二撃をとっさに掴んだ大鎌で

薙ぐ。

短い、小気味の良い音とともに刃が交え、離れた。尚も斬りかかるイアラの

動きは本気だからか隙が無く、相手にして戦うには非常に厄介な相手であった。

再び大鎌で上手く受け流し、舌打ちして窓を開けると外に駆け出す。外に出るなり、バケツをひっくり返したような雨が視界を曇らせた。

追ってきたイアラの短剣を柄で受け止める。そのまま勢いを増して体ごと弾

き飛ばすと、彼女は着地したその足ですぐに地面を蹴って跳躍、上からガラフ

に斬りつけようとする。彼はそれを容易くかわすと地面に刃を突き立てたイアラを蹴ろうとするが、足は前転して避けられてしまう。

下から一直線に顎めがけて斬りつけたイアラの刃を間一髪大鎌の刃で受け止

め、そのまま地面と平行に薙ぐ。歪曲した刃と擦れる耐えがたい音の後、彼女の体は勢い余って地面に叩きつけられた。

下になった右肩関節の外れる音と、小さく呻き声。

地面を掻き篁り、なお短剣を手放さない妄執に。彼は思わず本気で斬りかか

ろうとして、寸前でそれを止めた。

「……イアラ」

「畜生……畜生、畜生……っ！」

投げ出されて外れた肩に手を掛け、抑えた悲鳴を上げて元に戻してなお右半

身を抱きしめるようにして起き上がったイアラを見て、ガラフの表情が、歪ん

だ。十、何年か振りに。

悲しみにか、苦しみにか。何故自分がそんな感情を抱いているのか、結局判らないまま。

「……何故」

否。知っていた。むしろ慕われることに安らぎすら感じ始めていた。その笑みが濁らねば良いと。たった今自分で壊しておきながら。

再び刃が交え。力は互角。ともすれば速さに於いてはイアラのほうに勝って

いたが、彼女がガラフに傷を負わせることが出来ないのは心の片隅に彼を慕う

理性がわずかながら残っているからか。悔しいと、もう一度歯軋り。

イアラは雨に流される背景すら逃さぬよう彼を睨みつけ、痛みの癒えた肩か

ら手を離す。短剣の柄を握る手が水で滑ったが、それも強く握りなおし。

これが信じた代償か。家族のように慕った、これが結論か。いっそ自分が死ねばいいのに。

再び、火花。

「止めに行かないの？」

リックは机に載せた両拳をぐっと握り締めるだけで、何も言わなかった。

「……ねえ」

「できねえよ」

ぼつりと、独り言のように漏れたそれに、ゼロは振り返った。下を向く表情は穏やかではなく、それ以上彼女に何かを言わせ得るものではなかった。

「オレには何もっ」

彼女はすぐに目を背け、その視線を開きっぱなしの窓の外に向けた。

リックが、妹のようにイアラを可愛がっていたのを知っている。

また、ガラ

フを何よりも大切に想っていたこと。愛慕と取り違えてしまいそうな純粋な思

慕。ゼロがイアラに抱く感情と似通った思いを。

では、そんな自分たちはどちらを哀れめば？

大雨のカーテンに隠され、二人の姿は見えない。

違う。

心の片隅にそんな声を聞いた。違う、こんなことをしたいわけじゃないんだ。

それでもイアラの体は彼に斬りかかることを辞められずに。

金属のぶつかり合う音、投げ出された体を丸めて転がるように着地して、イ

アラはガラフを見上げる。こんなときさえ表情を変えない鉄仮面が、

余計に彼

女の苛立ちを誘った。

濡れた服が重い。黒い影は肩で息をする少女の横を走りぬける。

薙ぎ払う大

鎌の一撃を避けて再び斬りかかろうとしたイアラの細腕をガラフが掴んだ。そ

のまま抱きしめるようにその体を引き寄せ、うろたえた彼女の手か

ら取り上げ

た短剣をその背中、右肩側に突き立てた。

イアラは突然の痛みに全身を引き攣らせ、彼のマントを掻き抱いて悲鳴を上げる。

呼吸も浅く、朦朧とする彼女の背中に、ガラフがまるで抱擁のようにまわし

た腕に少しだけ力をこめた。

「……………オレはお前を苦しめるのか」

耳元で聴こえる声に何を予感してか、イアラの手に力がこもる。

「なら、傍から離れよう」

「あ……………ッ！」

静止の声すら聞かぬまま、彼は無言で短剣をねじ込んで傷口を広げ、少女の

手から力が抜けると彼女を突き飛ばした。結局のところ。ガラフは、自分に縋

るこの小さな体温を、苦しめずに殺す自信がなかった。

自分の目の前で、その腕の中で、彼女が冷えていくのに、耐えられないに違いないから。

イアラは小さく悲鳴を上げ、左手をついて立とうとするが、そんな力はもう

何処にも残されていないのだった。

黒い影はもうその場に無く、倒れたイアラの手は虚しく土を掻いた。

七話

7

「ただいま」

部屋のドアを開けるなり倒れそうになったイアラを支え、リックは叱りつけ

るような目で彼女の痣だらけの肌を見下ろす。

「……今日で何日目だ？ また何も食わないのか」

「明日は食うって」

「もうそれを五回は聞いたぞ」

イアラは彼の不服そうな顔を見上げ、苦笑する。

ガラフが行方不明になってから十日も経たないうちに彼女は戦場に復帰した。

食事を撮らずに、もう二週間にはなるのではなからうか。そろそろ限界を迎

えてもいいはずの体で、彼女の戦果は華々しく、仲間からの信頼も篤かった。

イアラは殊更、護ることに長けているそうだ。だから何だと、リックは思う。

若い少女が毎日のように荒野を駆り、ぼろぼろになって帰ってくるのに、彼

は気が気ではない。見ていられなかった。それはゼロも同じようで、毎日のよ

うに帰って来た彼女に急いで寄って行っては心配そうな顔で首をかしげる。場

合によっては目に涙を貯めて、今のように。

「明日は休もう？ イアラ、体が持たないわ」

「ゼロ。残念だけど」

そう言うとは何か自分の力で立ち上がり、寝室に行く。その後姿を見ながら、リックは何事か呟いたが、ゼロには聴こえない。心を読むことも出来なくは無

かったが、今彼がどんな気分にいるか痛いほど判ったので、やめた。彼は机に肘をつくとき、大きいため息をついた。その目は宙を彷徨い、結局は

いつもそうするように食器棚に飾り程度に置かれている一輪挿し、それに生けられた白い花を力ない目で見つめるのだった。

一方でイアラは自分の寝室に入ると、部屋の隅に置かれたベッドの前までふ

らふらと歩いていき、力なく膝をついた。マットに寄りかかり、大きいため息を吐く。ベッドに載った右腕でシーツを手繰り寄せ。

……判っては、いる。

リックが心配していること、ゼロが自責の念を抱いていることも完治していない肩の傷を抑える。無意識にその左手は傷を深く抉るように指

を食い込ませていたが、彼女はシーツに顔をうずめてそれを気にする様子もな

かった。自分の肩さえ握り潰さんばかりの勢いで肩を締め付けていた少女の手を、リックが後ろから止めた。やんわりと。

その手の感触とは裏腹に、彼の声色は厳しかったが。

「何してた」

「何も」

「傷が開いてる」

「今日は特に暴れたからかな」

「……明日も行くって言うならオレはお前をベッドに縛り付けても

止めるぜ」

イアラが、悲しげに顔を上げた。生気の無い金の瞳が、揺れる。その目はリ

ックはおるか、その向こうの景色さえ映っていないようで、彼は悲しかった。

たった数日前までは、誰よりも強く気高いと思っていたその瞳が。縋る相手を

無くしただけでこんなにも。

もっとも、それは自分も同じなのかも知れないが。

彼の深海の目には今、目の前にいる少女しか映っていないと言うのに。イア

ラは小さく頭を振ると、哀しそうな目で彼を見上げる。

「なんでそんなこと言うんだ？」

「こつちが聞きてえよ。何処見てんだ？ こつちを見るよ、いつからお前はそ

んな目をするようになったんだよ！」

そう言って、イアラの冷たい頬を両手で包むようにして自分の方を向かせる。

体勢が変わる際に治りきっていない右肩に激痛が走り、彼女は顔を歪めてそ

の手を振り解いた。

「痛つてえよ」

リックは悪かったと手を離して立ち上がると、イアラに包帯を放つて寝室を

後にした。

彼女は包帯を握り締め、再びシーツに顔を埋める。白い着衣の右肩部分に、

黒く血が滲んだ。

雨の中。

半分意識を失いかけていた彼女を抱え上げ、覗き込んだリックは、その顔を

見るなり何も言えなくなった。思い立って外に出て来るタイミングが後れてし

まったことを改めて後悔した。

相変わらずの豪雨。傘を投げ出した彼のシャツもすぐにびっしょりと濡れて

肌張り付いた。リックは着ていた厚手の上着で薄着のイアラを包むと、もう

一度走って来た道のりを振り返る。遠くにさっきまで自分のいた兵舎が見える。

急いで帰ると少し、彼女に痛い思いをさせてしまいそうだ。そんなことを考え

ている間にも雨は勢いを増して視界を遮った。

「リ、ク、ごめ……」

「イアラ、ガラフは」

彼の声にイアラの肩が大きく震える。思うように動かない腕を伸ばし、リッ

クのシャツをつかんだ。頬を流れた雫が雨なのか涙なのか、今はどうにも判然

としない。リックはふと見下ろした地面に大きな足跡が続いているのを、そし

てそれが先のほうでは既に雨に流されているのだと知ると、どうしようもなく

虚しい気持ちに駆られて腕の中の少女を見下ろした。

「……ガラフは、居ないのか……」

背中あわせどころか。

手の届くところには。

「……………なさい……………。わた、し」

震える両腕が顔を覆う。

わたしは、リックからガラフを取り上げてしまったんだと。

「いい」

腕を突っ張り、腕から逃れようとするように足掻くイアラの冷え切った体を

半ば強引に引きとめ、彼が呟く。強がりには違いなかったが、きつとイアラが謝

り続けたならリックの腕は彼女に何をしでかすかわからなかったし、なにより

痛々しかった。

二度も置き去りにされ、今度こそ本当に心の拠り所を亡くして壊れかけてい

る姿が。

暴れる彼女の小さな、細い体を抱く両腕に力をこめ。

「もういいから」

「ッ」

尚も抵抗して左腕を地面につくが、右腕を引き、寄せられる。リックの腕が

上半身の動きを制限するのが酷くもどかしく、初めて自分の異常に小さな体を

呪った。

「戻ろう、イアラ。風邪を引くし腕も駄目になる」

彼の声の優しさに、改めて湧き上がってくる後悔が、少女を脱力させた。元

から、もうそんなに体力は残っていなかったのである。

ただ、わからない。

何をしたかったのかが、わからない。

何故、別の人間に向けられるべき憎悪がガラフに向いたのかがわ

からない。

何故今この胸を占めているのが”悲しみ”なのかが、わからない。

「いない……」

「いらなくない」

リックは静かに言い切って彼女を抱き上げた。

こんなのいらなくない。

両手が、意図せず顔を覆う。

胸にわだかまるのは吐き出して捨ててしまいたい嫌悪感と。

それがなにに対してのものなのかすら理解できない苦しみと。

そんな感情を持つ資格など無いという自責の念と。

如何すればこの憾みを言葉に出来ただろうか。そうするにはまだ

彼女は、幼

すぎたのだ。

「……ゼロ！」

走ってきたリックに、ゼロが申し訳なさそうに頭を振る。結局振り切られた

ようであった。

リックはそれを確認するなり、壁を思いっきり殴りつけた。その手には、千

切れた太いロープを持って。

「まさか……怪力も此処までとはな」

「本当に縛ってたの？ 信じらんない。手首が擦り切れてたのってそのせい

？ 最悪」

「無駄だったけどな。……あいつが戦に行ったところで何を得るんだよ。もう、何の意味も無えんだぞ！」

ゼロはぐつと言葉に詰まり、下を向く。灰色の廊下が嫌味に目に付いて、腹立たしかった。彼が、一番苦しいのだろう。判っているつもりなのだ、彼女は。

あの二人ほど力が無いが故に。そして、何より誰を責めることも出来ないが故に。

一言、小さな謝罪の言葉を聞いて、リックは下を向いた。覗き込むゼロの眼に、笑っているような、疲れきって眉を顰めているような、表情が少しだけ映った。

「ゼロ。ガラフはさ、優しいだろ」
「ええ」

「だからオレを体良く人質に捕られて此処で雁字搦めになっていた。その必要

が、無くなったんだよ。イアラがガラフを憎んで、殺そうとしたから あい

つはオレに気兼ね無く、逃げられた。……一方でオレは、あいつを失ったけど

イアラを憎めない。事情を知ってるからだ」
「……ええ」

彼女は、不意に顔を背ける。

何となく、縋っていた手から伝わっていたあの日、ガラフから感じた嫌な感

情、その正体が、彼の言葉かと思うと。

リックはそのままずるとその場に座り込み、下を向いた。ゼ

口はそれを

見下ろし、小さく頭を振った。

こんなに、肩入れするはずではなかった。

最初、イアラに対峙したとき、ゼ口は他の人間達と同じように崩壊させるこ

としか考えていなかったのだから。　こんなに肩入れしなければ、自分がこ

んな罪悪感を覚えることも無かったのに。

「……馬鹿ね、貴方の頭は何の為にあるの」

精一杯の虚勢とともに、声を張り上げる。リックははつと顔を上げ。

「無理やりここから引つ張り出したらどうなのよ？　イアラはあんた以外に頼

れる人がいないのよ。だったら　上層部に得意分野の脅迫でも何でもやって、

此処から連れ出して。探しに行ったらどうなのよ!」

リックは暫し呆然と彼女を見上げていたが、やがて元の表情に戻り、立ち上

がった。いつものように軽薄では無かったが、それがあるいは彼の素の顔なの

かも知れなかった。

「……考えとくよ」

そう言つと、両腕で目元を拭う彼女の、人間よりも小さな頭を撫でた。

「ガラフ!! Gは、相棒置いてどこ行つちまっただらうな」

「おい　本人居るんだぞ、聞こえたら　」

「うわ、やべつ。そついえば!」

慌てて口を塞ぐ兵士が視界の端に映る。イアラは別にそんな噂話を気には止

めなかつたが、車内は少しだけ気まずかつた。どうも、イアラとガラフは”相棒”と言うより”恋人”に近い関係だと思われていたらしいことが、最近になつてわかつた。男女の組み合わせだからそう見えてしまうことは仕方が無いのかもしれないが、イアラにしてみれば、何故子供にしか見えない”自分と”なのかが不思議でならない。イアラも含めその他大勢の兵士たちがこれから向かうのは激戦区、自分達が出て行くのはその最前線だと言うのに、皆呑気なものである。楽観よりは諦念に近いものではあるが。

イアラは擦り切れた手首をグローブで隠すと、前を見据える。瞳の金は野生を帯びて、戦い、狂う、魔物のように。

「みんな怖がつてんぞ、イアラ＝ノエル」

後ろから肩を叩いたのは以前ルームメイトだった少年であつた。我に返つた

彼女が周りを見回すと、周囲の兵士の、怯えた視線が突き刺さつた。苦笑して、

悪い、と少年を見上げると、彼は別に、と手を振つた。彼女の内心に関しては理解があるらしい。

「で、おまえさ、ガラフ＝Gのことどう思つてたんだ？」

「信賴してたよ。きつと、誰より」

「そ」

少年は素っ気無く答えると空を見上げ、イアラの頭を軽く撫でた。

イアラは

ガラフのそれに比べると小さな、その手の下でふるふると頭を振る。本当

は、その腕に抱きついて、縋って、大声で泣いてしまいたかった。

ひととき大きな、揺れ。トラックが止まる。

少年は去り際に、小さく呟いた。

「ガラフ〓Gはおまえのこと、どう思ってたんだろっな」

イアラも後に続き、やはりぼそりと答える。

「今は、まだ」

知りたくないよ。

大地に足を下ろした彼女の目は、野生のそれであった。

そして今回も、きつと痣だらけ、傷だらけになって帰るのだろう。

救いよう

の無い光の中より今はまだ、安寧の闇に身を委ねながら。

八話

8

あんたのこと、実はわたしもどう思っていたんだろう？
……狂おしいほどのその想いから、今はまだ、目を逸らす。

毎日が実感無く、非現実的に過ぎていく。それはイアラ自身がその日常から離脱したいという願望の現われなのか、そもそも日常が意味を無くしてしまったのか。
恐らく後者だろう。

血しぶきも怒声も悲鳴も屍も何もかも色がなくなった戦地で大剣を抱え、足元に視線を落とす。見ているうちにだんだんと色を取り戻してく世界を見ていくと、虚しくなった。少し視線を上げれば死屍累々と続くのはまさに自分が通ってきた道のりで、それは大して長くないことが判った。後ろに大群を引き連れ、前を見れば敵陣から第二軍がこちらに突撃してくるのが見えた。何気なく騎兵など従えている様が、やけに滑稽に思えた。どうせ潰してしまっただけだから。

この大剣が。

小隊を引き連れた背中が、ざわつく。

一人なのだと、改めて実感する。

上官の背中を撃つ輩は居るだろう。しかし護ってくれるような兵

士は居ないのだ。ガラフが居なくなつて少しだけ階級が上がり、イアラは隊長でありながら、この中で一番幼いのだから。

妬み。嫉み。それと好色。間違つた興味。好奇の視線。今まで、自分が彼に

随分護られていたんだと、改めて認識したため息をつきながら。

大剣を構える。

そして、衝突。

騎馬を優先的に叩き潰しながら、あわよくば自分を撃ち殺そうとしている味

方の銃口の気配を感じて逃げるように場所を移す。敵に囲まれる形になつたが

銃は持つていないので特に恐れるでもなく大剣を振り下ろす。目の前の男を両

断し、地面に突き刺した剣の柄を軸にして横に飛び、後ろからの矢を回避しつ

つ右から斬りつけようとした少年兵の手首を蹴り上げて剣を飛ばす。腰から引

き抜いた短剣で真つ直ぐにその喉を貫いた。中腰になつて左からの殴打をやり

過ぎ、大剣を引き抜いて地面に平行に一閃して大半の敵兵を上下に分割、残

りを追撃に走る。

瓦礫の山を視界の端々に捕らえながら、燃える町を駆け抜ける。剣を持って

いないほうの腕で汗を拭い、振り返つて背後を確認。壁に背中を押し付ける。

まるで、戦いに逃げているみたいじゃないか。

自嘲気味にそんなことを考えながら。もう見回すと敵は散り散り

になっ
てい
た。

撤退の合図を出し、踵を返す。酷使した体は疲労を訴えていたが、それもど

うも現実味に欠けるものだったので、無視して空を見上げる。空だけ見ている

とてっぺんまで透き通るような晴天で、こんな争いとは無縁のように思われた。

いつしか、トラックで話した少年も隣を歩いていた。会話は無い。沈黙は破

れることも無いようだったが、意外にも隣を歩いていた少年の声と背中痛みが彼女を現実に戻した。

「イアラ！」

「な……っあ…？」

膝をつく。口内で、鉄の味がする。背中を撃った弾は彼女の薄い体をやすやすと貫通するに至ったらしく、腹部にも赤い斑点が、やがてじわじわと広がった。

少年が慌ててイアラの肩を支え、抱え上げられた所に第二撃が襲う。腹部を

もうひとつ、弾丸が貫通する。

少年の怒鳴り声を最後に、暗転。

「仲間からだっとな」

リックが、苛々と指で机を弾いているのが見える。イアラは悪かったよと投げやりと言つと、目をとじた。

「あいつさ、新入り、だったん、だ。わたし、は大丈夫……だからそこまで言つと、不意に痛みに顔をしかめる。怪我したところを抑え、図書

館でガラフはこんな傷を負ってまで地下に駆けつけたのかと、半ば感動まじりに考えていた。何が辛いかと言つと、信頼が篤いとはいえ中には”こつこつ”

輩も居るのだと言つ事。

「そこまでして庇うほどの相手かよ？」

「あんだけ肝が据わつてれば、大物になれるよ」

苦笑する。

リックは尚も不服そうに、イアラの顔を覗き込んだ。

「……お前、また泣かなくなったな」

また、というのは恐らく、ガラフに拾われた当初と比べて言っているのだから。

「そうかな」

「人は本当に悲しいときには泣けないらしいぜ。イアラは、悲

しいんだ。

ガラフのことが、好

「嫌いだ」

リックが言い切らないうちにそれを遮ったイアラの声は、どこか必死さを感じさせた。寝返りを撃つたその背中がやけに小さいのは、何かを恐れているからか。

「……わたしは、親しい人を傷つけたりしない」

それでも思わなければ、結果はあまりに残酷で、受け入れがたかった。

「 傷つけた、か」

ゼロの自嘲するような声が、リックの後ろで聞こえた。彼は黙って頭をふり、

それを否定した。それでもゼロにはやはり、自分の想いさえもイアラの重荷になっ
てきている気がしてならないのだった。自分さえ居なければ、イアラはガラフ
のことを父のように、兄のように慕っていたのだから。

「 わたしは……ガラフに酷いことをした」

「 今のてめえはなんなんだよ！」

突然の大声に、少女の肩が小さくはねた。リックは構わず胸座を掴んで自分

の方に引き寄せ、多少強引に彼女の上半身を起こす。イアラは小さく呻き、両

腕で腹部を抑えた。

「 オレらは何も話してもらえずに、どうすりゃいいんだよ！」

「 ……っ、ごめ……」

「 謝るんじゃなくてさ、もっと……オレでもゼロでも頼れないのかよ、なあ……」

……

イアラの両肩に手を置き、下を向いたきり黙りこんでしまった彼を、やはり

見ているだけだった彼女の目にようやく感情らしきものが揺れる。

後悔、であった。

「 ……情けねえな。そんなんじゃ頼り甲斐もなさそうだ」

「 明日はいくなよ」

「ああ。……頑張るからさ、少し、一人で居て良いか」

リックは顔を上げ、そうか、と微笑ってイアラに背を向けた。横に居たゼロ

もちやっかり連れていかれたらしく、甲高い苦情の声が暫く聞こえていた。彼

女は扉が閉まったのを確認すると、すぐに毛布を頭から被って、背中を丸め。

シーツを力いっぱい握り締める両手からは、取れなくなった血の匂い。止め

処ない涙は後悔するのが遅すぎたことに対する後悔。痛いのはガラフに挟られ

た肩ではなく、別の人間に向けるはずの憎悪を彼にぶつけてしまった心。胸が

苦しいのは、ガラフに対して抱いていた、淡いどころか自覚もしていなかった

想いを自分の手で砕いてしまったから。許せないのは、側で支えてくれていた

人たちをないがしろにしていた自分自身。

握り締めた手に、力がこもる。

信頼してた？

……きつと他の誰よりも。

「たとえばさ」

中央図書館の中庭を歩きながら、イアラはうんと背伸びする。右肩にはゼロ

が陣取り、後ろではリックが首をかしげた。

「わたしが壊れて戻れなくなっただって、あいつなら殺してくれるだろ？」

「迷惑な信頼だな」

少女は子供のような笑みを浮べて彼を振り返る。その金の目には、言葉と裏

腹の真つ直ぐな光と優しげな色。

「わたしはあいつが、大切だった。故郷とおんなじくらいに」

リックは立ち止まると、暫くその後姿を眺めていた。深海の色の瞳は小さな

背中を捉えて小さな波を立てたが、それもやがて収まり、思考は別の方向へ漂っていく。

知っているだろうか、彼女は。

結果いろんなものを失いながら、一番慕う人に一つの地獄から逃れる道を自

分が与えたことを。……否、知らないだろう。それは自分のエゴから生まれた

悲劇と信じてやまないから。ガラフが、そう考えているのと同じように。

「必然だったのかしら」

いつしかリックの側を飛んでいたゼロが、羽音とともに小さく、呟いたのが、

聞こえた。

「だとしたらどちらが犠牲になって、それを土台にして幸せを掴もうとしてい

るのはどっちなのかしら」

「むずかしいな。……ガラフはイアラの心を砕いて自由を掴んだ。

イアラはガ

ラフの贖罪の気持ちを踏みにじって”生きて”いられた。そしてどちらの胸に

も確かに残っている後悔。オレは、どうにも平行線のような気さえするよ」

ざわざわと草木が踊り、唄う。何もかも忘れさせてしまおうような晴天の中か

ら、あの巨漢を追って行き着く先もまた晴天であれと、願う。イアラは今日に

でもこの町を出たがるだろう。十六の誕生日にグラフを探しに出ようというり

ツクの提案を、彼女はすんなりと受け入れた。リックもまた、それを口実に軍

や、その役割から逃げるつもりなのだと知りながらも。

石畳の感触が靴裏に伝わる。こんな晴天は何日か振りである。

「オレに出来るのは、この代償がきつとあるって信じるくらいか」

花が舞う。出発前にドナから貰ったものだったが、どうにも自分には合わない

いようで。イアラはふっと微笑み、もう一本、花を手放す。風に舞い、遠のい

ていく花を眺めて、トラックの荷台に背中を預ける。

「久し振りだ。畦道を車で行くのは」

「へえ？ イアラは何してたんだ？」

がたがたと、心地良い揺れを感じながら、リックの方に視線を移す。

「わたしは ……」

「何？」

聞き返した彼に返ってきたのは流れた言葉の内容ではなく、笑みであった。

思い出したくないのか、ただ良い感情は無いのだろうかという事をなんとなく察して、それ以上は何も聞こうとせずと同じように周囲の風景を眺める。郊外まで来ると、もうとんでもない田舎に来たような風情ののどかな景色。両側に広がる田園風景が、イアラの故郷と重なるのなら、彼女は今どんな気持ちで居るのだろうか。

過ぎていく風景を見ながらそんなことを考える。

「……………わたし」

「うん？」

「皆のこと大好きで、」

ゼロは彼女の頭の上でじっと動かない。ただ、ただ、そうしているだけで、

イアラの想いは痛いほど伝わってきて、どうしようもなく、切なかつた。

「村が大好きな、普通の、」

「うん」

「普通の、女の子だったよ」

詰まりそんな声押し出したイアラの頭を抱き寄せ、リックは敢えて彼女の

顔を見ないようにしながら。

遠のいていく道の向こうに、もう今まではんやり見えていた町は無い。緑と

青の境界線もじきにぼやけ、流れて落ちた。

アナザーサイド・起章一話（前書き）

ここから主人公が変わります。一章ごとにバッドエンドなので、いやんな方は本編で留めておきましょう。

アナザーサイド・起章一話

Side:” King”

…起章

1 .

彼と対を為す彼女がまだ幸せであつた頃の嘸。

国には、独自の文化というものが往々にして存在している。他国の者からしてみればくだらなさ過ぎて笑うしかないようなことすら彼等現地の人間にとっては死活問題なのである。ある国では邪神が崇められていた。ある国では学問こそ心理であると信じられ。

またある国では、”変化”すること、他人と違うことは禁忌とされてきた。しかしあるとき、それを乱す者が現れた。彼の力は強すぎ、彼の心は純粹すぎ、彼の自我は臆病すぎた。故に力を封じられ、忌むべき者達の”王”とされた。禁忌は更なる厄災を呼び、厄災は人に滅びをもたらす。

故に憎め、人よ我らが王を追い、厄災を払うべく殺すべしと。翠の瞳に黒髪の、目印を探す。

それは終わりの無い壮大な宿業であつた。王は追われ、民は追つたとして強すぎる王を殺すことかなわぬからである。

そして、幾百年の時を彼等は過ごしていた。

凍えるような雪の中、彼の歩いた後にだけとどころ紅が落ち、深い白を吸い取っていた。

少年は十にも満たない年齢であると思われた。背格好から見て七つか八つほどの、幼い姿。小さな手

で押さえている肩の傷は凍りついていて、そのお陰でいつしか血は止まっていたのだった。真っ黒な髪

は肩より少し長く、乾かして梳かせばさぞ美しかろうと思われた。

小さな足跡が彼の幼さを強調する

が、それは少年の後ろ、はるか遠くから続いているのである。

それから何時間経っただろうか。少年　シンの肩が小さく震えた。前方に見えた人影が、こちらに向かっているのが、彼の目に映った。

逃げなきゃ。

そうは思っても硬直して思うとおりには動かない体が憎たらしい。

途方に暮れる彼の視界に、人影はどんどん大きくなっていく。近付いて来る。緩慢にはあったが、少年の目にそれは風より速く、そう、その、眼前にまで迫っていた。

その影は、女の形をしていた。それは彼の姿を確認するなりシンに向かつて走り出した。恐怖と猜疑

に見開かれたシンの目は深い翠　王、なのだった。

「……………」

とっさに後じさった彼を殴るでもなく斬りつけるでもなく、女性はシンの前にしゃがみこんだ。目と

髪の色に気付いていないのか。否、そんなはずは無い。恐怖に竦んだ彼を、女は心配そうに顔を覗き込む。

「大丈夫？」

差し出された手が、悪夢のように脳裏に焼き付いていた。

大丈夫？

そんなわけない。今度は何の罠なのか。ろくでもない仕掛けが、その背後にはいつもあった。王であると知っていても優しく接してくれた人たちも、ふとしたきっかけでシンを殺そうとした。誰かが死んだ時、何か大切な物が壊れたとき、全てが王の所為だと、シンが生きているからなのだ、と、狂ったように叫んでは殴りつけ、剣を振りまわした。良い目など見たことがない。肯定は拒絶の前提でしか成り立たないのだから。

厄災を断ち切れ？

わが身を守る為に？

否、それは理由の一端でしかないのだ。大体は最初からサンドバックにする予定であったりもする。そして、やり場の無い怒りは全て王へ帰結する。

どうして。どうして。どうして。どうして。どうして。

ただ、走り続けた。自分と同じくらいの子供が傍らでは慈しまれ、祝福を身体一杯に浴びて走りまわっているのに。それを横目で見ながら走り抜け、もっと、もっと先へと。誰も居ない場所目指して。

全ての人間に憎まれることと孤独であること、いったいどちらがより耐えがたいのだろうか？そんなことを考えながら。

銃の音。世界が反転し、目を覚まして肩の傷の痛みを思い出す。

「うあ……っ」

飛び起きようとしたシンは左肩の傷を押さえて背中を丸めた。肩を流れ落ちた黒髪を忌々しげに見つめ、その存在を否むように目を閉じた。

「……………いらない」

「まあ！　なんて失礼な子だろう、見もせずいらないだなんて！　大きな、嫌味の無い笑い声。

恐る恐るあげた目に最初に映ったのは、赤毛を背中で纏めた若い女性の姿。両手のマグカップを部屋中央の机に置くと、まっすぐに

彼の方へ歩を進める。改めて見まわすと、シンは長方形の部屋の、窓際のベッドに寝かされていたようである。質素なつくりではあるが流石に女性の部屋、きちんと整理された本棚や壁にかけてある小さな絵などが印象的だ。

女性はベッドの横に置いてあった椅子に腰掛け、シン顔を覗き込んだ。

「もう大丈夫そう？ 酷い状態だったのよ。あっちこっち擦り切れたりひび割れたり……肩の傷もね」

「……大丈夫」

「動かないで。治ってないんだから」

「すぐに……なおるよ」

半ば無理に出て行くこうとするシンを引きとめ、頭を撫でようようと女性が手を伸ばし

「あ、ああああっ！」

ものすごい悲鳴をあげつつシンがそれををはいたい。勢いで左半身から倒れ、肩の痛みにしびし声にならない悲鳴を上げる。肩を押さえる手は傷みにか恐怖にかひどく震えていた。弾かれた手を何処にもやりようが無くそのままの体勢で立ち尽くした女性を、怯えきつた少年の目が見上げた。先程までの態度、物静けさは嘘のよう度。

彼女は暫くそのまま茫然としていたが、やがて我に却ってシンを見下ろす。

「……ごめん？ 私になにか悪いことした？」

女性は肩に巻いてあった包帯に血が滲んだのを見ると慌てた素振りです。シンを抱き上げ、ベッドに戻す。

少し落ち着いたのか、女性を見上げた彼の目はそれでも涙ぐんでいる。

「……いい。……怖い。放つとけば、死んだのに。そんなに、憎いか。おれが、おれが……」

無表情に繰り返す、覚えたばかりの言葉の羅列。その意味よりも

こめられた負の感情の方がひしひしと伝わってくるようで、女性は何ともいえない表情をした。せめて泣いたりするならばまだ人間的といえたが、それすらしないのはひどく、不自然な気がして。

「王なの、わかるくせにどうして助ける……」

女性はなんと答えようもなくすつくと立ち上がると、扉に向かい歩き出し、思い出したように少年を振り返った。

「ココア、冷めちゃったかな。飲めるようなら、飲んでおいてね」
私はこんな小さな子に酷いこと出来ないからと、吐き捨てるように言って部屋を出た。ぱたりとしまった扉を、シンはしばらく見つめていた。やがて視線はカップから立ち上る細くて白い湯気へと移る。
それが、正しいこと？ 本心だと？

今更何を信じると？

シンは南へ、南へと逃げていた。遠い、ひたすら人の居ない場所をめざし。それなのにこの呪力の少

なさやタイミングの悪さときたら。誰が考えるだろう、”幻視”で違う色に見せていた髪と目の色が不意に人前で戻ってしまうとは。

同行していたのは大道芸で生計を立てている家族であった。大人たちは子供のすばしっこさには追いつけず、ただ一発の弾丸が逃げる少年の左肩を貫通した。ほかの国にも行ったことがあるんだと、自慢気に見せてくれた銃。奇しくもそれが、シンの肩を貫いたのだ。たった一回だけ火を噴いて。

降り積もる雪に足をとられながら、シンは走り続けた。防寒具一つ身に付けず、碧道直下の極寒の雪原を。

一時間ほどしただろうか。ラキスと名乗った赤毛の女性は野菜スープと焼きたてのパンを並べただけ

の質素な食卓にシンを連れ出すと、有無を言わずに椅子に座らせた。

「あ……あの」

「うん？ いらないつてのはナシよ？」

にっと笑ったラキスに向かって小さく頭を振り、下を向く。表情の変化は見取れない。

「……こういうのは初めてで……なんて言ったらいいかわからないんだ……」

シンの目線が所在無さげに、膝の上でそろえられた両手に落ちる。ラキスは意外そうに目を見開くと、ありがとっつて言うんだよと苦笑し、それを真剣に復唱するシンの横顔をいとおしげに見つめた。彼はこんなにもふつつの、少年なのだ。

そう思うと、少しだけ安堵した。彼女もまたこの国の人間で、「異質」を無意識に恐れていたからか。

「それで、そろそろ名前くらいは教えて欲しいものね」

少年ははたと顔を上げ、シン、と一言呟いた。

「……多分」

「多分？」

「……そう、呼ばれたような気がするから」

誰にかは覚えていない。

ぼんやりと。誰かの影を追うように、顔を上げた。

「ラキス……は、おれを憎いとおもわないのか」

不意の問いにラキスは怪訝そうな顔をして、シンを見下ろした。

「私は、そんなの間違ってるって思うから」

シンはその真剣な視線から逃れるように、窓の外へ目を向けた。

吹雪も大分収まってきたからか、周

囲に民家があるのがおぼるげに判る。

「皆、おれが生きているのは悪いことだって言う。おれのせいで悪いことがあ

るんだって」

「シンの所為で起きた悪いことって何なの？」

「……………知ってたらこんな」

「うん？」

言葉に、詰まる。

声が出ない。目元を覆った両手にぐるぐるに巻かれた包帯に、じわじわと無色の染みが広がった。

「泣いてるの？」

「……………わからな、い」

「そう」

酷なことを聞いただろうかと、ラキスの胸中を複雑な思いが満たす。こんなに普通で　こんな基本的なことも、彼は教えてもらえなかったのだ。

会話は、無い。暫く、小刻みに震える小さな肩を撫でていた。

カーテンの隙間からの光で、目が醒める。その頃には雪も止んでいて、見通しの良い雪原にある町並みが窓の外に広がっていた。どうやら此処はそのはずれに位置しているらしいことが距離でわかる。高

床式の家が何軒かごとに一つのエリアを構成し、それは町の広場と、そこにあるひとときわ高く、白い壁

が印象的な時計塔を中心に広がっているようである。

町は上空から見下ろすならば円か、それに良く似た形をしていることだろう。やがてちらほらと人が

屋根に登って行きを降ろし始めるのが見えた。この家ではラキスが一人でやっているのかと思うと、シ

ンはなんとなく悪い気がして台所に足を運んだ。

「……………おはよう」

「あら？ 早いよね」

「……屋根」

シンが何を言いたいのか良く理解できないらしく、ラキスは首をかしげる。シンはというと語彙が極端に少ない為、なんとさえはいいかわからないので、おもむろに窓の外の風景を指差した。やっと理解できた彼女はそれを見て笑う。

「ああ。うちはまだ大丈夫よ。それより、朝食の準備を手伝ってくれる？」

シンが頷くと、食器棚からとった皿をシンに手渡し、ラキスは自分の作業に入った。ふと見上げたその背中に違和感を覚え、シンはその場に立ち尽くした。

部屋全体に充ちる”異質”を、感じた。

何が、と特定はできないが、広い台所。大きすぎる食器棚。玄関の、大小二つある扉。漠然と。

台に食器を並べ終わると、シンは広い家の中を歩きまわった。良く見ると裏口の扉が少し開いていて、それを閉じようとして伸ばした手が思わず止まった。裏口から出るとそう広くない庭があったが、扉の隙間から見える風景の中かなり場違いなものを見つけたのである。

それは、人の、

ばたん、という音で我に返ると、その風景はもう目の前には無かった。ラキスがシンの後ろから手を伸ばし、扉を閉めたのだった。

呆然と自分を見上げるシンに穏やかに笑いかける。

「何かみえた？」

「何も」

「そう」

特に怖がる様子も無く頭を振り、シンは彼女を見上げたが、ラキスはそれ以上何も言わずに朝食が出

来たから呼びに来たのと、笑った。踵を返して歩いていく彼女のあとを追いながら、妙にほっとしたよ

うな気分になっていた。ああいう光景を見慣れているだけかもしれないが。

それは、人の、屍体であった。

とうか恐らくそうなのだろう、と思う。雪がその部分だけ紅く溶けていたところを見ると、出血

も只者じゃないだろう。仰向けに転がっていたそれは上から硬いもので何度も殴打されたのか、頭は割れて眼球も軽く飛び出していた。

その、開ききった瞳孔に、吸い寄せられるように目が行った。

そして唐突に閉められた扉。ラキスの言葉。

……安堵。

信用、しなくて、いいんだよ。

そう囁いているようなその背中を、暫くじっと見つめていた。

一話

「どうしてラキスは一人なのにこんなに広い家に住んでるんだ」

シンがずっと考えていた事を言うと、皿を洗っていたラキスの手が止まった。一瞬考えてからそうね、と笑う。

「また、時間のあるとき話すわ」

シンはそう、と関心を無くしたように俯いて、視線で床の、分厚い板の目をなぞる。それは、不満、だろつか。例えて言うなら。ラキスは曖昧な点多すぎた。実際のところ、時間なら有り余るほどある

のだ。ラキスが、なかなか家を出ないからであった。そのことについてでも理由を話す気は無いらしく、平和や幸福に浸るでもなくただ淡々と、二週間ほどが過ぎた。

” かなしい ” がわからない。

” くるしい ” をしらない。

手を伸ばし、周到に罫を張る大人達は、苦しかったろう、悲しかったろうとシンの気を引きつけたが、そもそも彼はその意味を知らないのだ。裏切られた時の胸の痛み、それを悲しみというのだと誰

もが王を見るとときにする視線を一身に受けること、その気持ちを苦しみというのだと、誰が教えてくれたのか。

今でもそんなことを、シンはしらない。感情はあってもその概念

を知らないのだ、生まれたばかりの赤子のように。

……それとも、他の子供は知っていて当然なのだろうか。知らないから、追われ、殺されそうになるのか。

そう考えたこともあった。

いつも答えは同じ、そうではない。気付けば独り、人気の無い小道に息をひそめているのだった。

「シンの黒髪は綺麗だね」

「……え？」

シンは聞きなれない言葉に顔を上げ、ラキスの笑みを見上げると、彼女は不議そうに小首をかしげた。

「どうかした？」

「なに……今の？」

「なにが？」

「……綺麗？」

聞きなれない語句を繰り返すと、ラキスはその青い目を驚きに見開いたが、すぐにその表情も消えた。何ともいえない顔をして、そう、まるで、シンが自分を殺さないのかと聞いたときのような。

言っではいけなかった？

聞いてはいけなかっただろうか。そんな思いに懊悩しているシンの顔を彼女は心配そうに覗き込んだ。

「大丈夫？ あの、なんて説明していいかわからなかっただけなの」

「大丈夫……だと思っ」

「そう」

ラキスはほつとしたように笑み、立ち上がる。後ろに立っていた本棚のほうに向き直り、その中から銅色の表紙を選び出して手にとり、シンの横で開く。

「感情は自分で覚えるしかないの。ほかの事は教えられるわ。字とかね」

「じ？」

シンが首をかしげると、彼女は本の中の一文節を指差す。それは覗き込むと、赤と緑の二色で刷って

構成された　　なにか意味があるらしい　　文章の中、緑色の語群の一番上の文章であった。ラキスが

それを丁寧に読み上げる間、シンは左の頁の挿絵らしきものを眺めていた。たくさん細かい線とその上

に描かれている白い蛇のような絵は、ラキスの読んでいる文章から、くもの巣のようなものに絡め取られた白銀の竜だと思われた。

「細かいんだね」

ぼつりと感想をもらすと、ラキスは顔を上げてにっこりと笑う。

「ええ。この本の絵って綺麗ですきな」

シンは再び、その挿絵に視線を移す。

「……綺麗……」

ちらりと見上げたラキスの髪の毛、燃えるような紅が、目に付いた。

しんしんと、雪が降っていた。ほたほたと落ちては積もっていく雪のなかを、女は歩いていた。そ

の、作業用の長靴を履いた足がすねまで積雪の中に埋まっては歩を

進め、埋まっては歩を進める。さく
さくと軽快な音を立てながら、まちまちに並んだ街灯の明かりだけ
を頼りに、暗い夜の道を。

やがて家出でもしたのか、少女が一人、前の道を横切るのが見え
た。

すると、女の足は止まっていた。

再びゆっくり歩き始め　今度は街灯ではなく、それに照らし出
された足跡を頼りに。広場で頂垂れ
ている少女を見ると、口元に小さな笑みを浮かべた。

シンは大きく伸びをして、ベッドから身体を起こした。正直まだ
毛布からは出たくないが、そうも言
ってられないので、思い切って冷えたブーツを履き、上着を多め
に重ね着して部屋を出る。ラキスは
この寒さの中で水仕事をしているだろうから、手伝ってあげなくて
はと、食堂へ向かう足が自然と速く
なる。

「……おはよう」

声をかけてもいつものような元気のいい返事が無い。どころか水
の音すらせず　食堂は、無人なの

だった。シンは不安を感じて家中探し回ったが、やはり彼女の姿は
何処にも見えない。漠然とした焦り

を感じて玄関へ向かい、扉を開けようとし　開かない。

仕方なく窓から外に出ると、外開きの玄関扉に背を持たせかけて、
ラキスが寝ていた。

「……なにしてるんだ」

「あはは、ごめんなさい。私ってどうも夢遊病の気があるみたいなの」

明るく笑うラキスを見てほっとする反面、真の胸中を何ともいえない思いが満ちた。彼は呆れ顔で大きくため息を吐く。

朝、ラキスが身につけていたものは全てびしょ濡れで、洗濯場に直行せざるを得なかったのである。

厚手のコートからマフラー、手袋に至るまで、水が滴るほどで、彼女が一晩中あそこで寝ていたとしか考えられなかった。

「風邪を引いてるじゃないか。おれが何か作ってくるよ」

「出来るのー？」

「見て、覚えた」

意地悪そうに笑っていたラキスは意外そうに目を大きくした。

「そういうもの？」

「……おれ、おかしいのか」

「というか、個人差があるの、こういう事は。羨ましいわ」

「そう、なんだ」

言葉を選んでくれているのが判って、妙に居たたまれなくなった視線を逸らし、シンは俯いた。

ラキスは今日一日眠っている方がいいだろう。

少し退屈になるな、なんて考えつつ、玄関の前に落ちていたローカー誌を広げ。少しだけ、否、ラキ

スのお陰で大分字を読めるようになってから、彼は書物を種類問わず読み漁ることに楽しみを見出すよ

うになっていた。物語から近代の学術書にいたるまで、特にこの”新聞”というのは周りで何が起きて

いるのかも描いてあるし、とにかく、暇つぶしにはもってこいなのである。

開いた紙面の真ん中、大きな文字が目についた。新聞に嚙り付くようにして読みふけていたシンの視線が、そこで、止まった。

”真夜中の蛇”

夜毎出歩く人間を絞殺する極悪非道の殺人鬼。よくある話ではあるが、一晚中外に居たラキスがもし、と思うと　ぞっとした。

新聞紙を握りつぶすようにしてゴミ箱に投げ捨てると、彼はそのままの足取りで洗面所に向かった。出されたままになっているコートとマフラーに違和感を感じたものの、やはりその正体は掴めなかった。

そしてふと思い出す、裏庭の景色。それは　そこにあつたものは。

何か見えた？

何も。

砂嵐。

がばつと、身体を起こしたのは夕方頃だろうか。がんがんする頭の傷みに顔をしかめながら窓の外の風景に目をやると、真つ白な雪の上に斜陽の橙が広がっていた。お互いに手を振り各自自分の家に帰るのである。子供達の姿がその中に一際映えていて、ああ、”あれ”に憧れた時期もあつたな、なんて考えていた。

「シン！　よかった、起きたのね？」

「……ラキス？」

シンが見上げると、彼女は安堵の表情で頷く。

「廊下で倒れてたの」

「……………おれは」

ラキスを見上げる少年の、その人形のように可愛らしい顔が悲しげな表情をかたどったが、彼はそれ以上は口を噤んだ。

思い出したように後頭部が痛んだ。

ところで、此処は世界で一番寒い地方らしい。らしい、というのはシンがあくまでこの国の中しか知らないからだ、実際碧道の近くは何処もこんなものである。南の方が寒いのは、その度合いは違えど

万国共通なのだから。同じ国の中でも年中雪と氷に閉ざされた不毛の地。なればこそ、この世界で南の果てに住む人々は肉を主食とし、狩りを生業にしている。最近はその商人が野菜や穀類を売りに来るようにもなったが、それ以前は食糧不足になったら人を喰うだのなんだのと噂され、蔑視されること

も多かったという。それを主に南北間問題と騒いでいた者たちも居たらしいが、その頃はそれもあながち嘘ではなかった。そうでもしなくては生きていくことすらままならないのだから。

本で読んだ内容を反芻しながら、シンはその町のメインストリートを歩いていて。昼なので人通りも多いが、上着の上からさらに褐色のマントを羽織り、フードで顔を隠すようにしているので、目の色ま

ではわからないのである。

丁度武器屋の前で足を止める。道の端では、人のよさそうな商人の若者が商売の合間の息抜きがてら

操り人形で芝居をしていた。それを見に行っておいでと、ラキスが言っていたのを思い出した。

「……狼は最期の力で少年に噛み付きました。少年は必死にそれを離そうとしましたが、そうしている間にも”虚無”は迫ってくるのです……」

周りで聞いていた子供達が続きを催促したが、商人はまた明日、と笑いながら人形の片付けを始め

た。子供達がけちとかいじわるとかブーイングを飛ばしながら去っていくのを眺めつつ、シンは初めてラキスと読んだ本の内容を思い返していた。芝居の内容はそれと同じで、だからラキスは行ってるように勧めたのだろう。

”虚無”に飲み込まれる寸前で少年を救い出す白銀の竜。

おれにも、いてほしかった。

商人は一人ぼつんとそこに残っているシンを見つけると、下を向いたままの彼の前まで歩いてきて膝をついた。

「少年が心配かい？」

「えっ……えと」

たじろいだ少年になおも青年は笑いかける。人好きのする笑み。

「それとも悩み事かな？ 暗くしてるとかわいい顔も台無しだ」

「……なんでも……ない」

可愛いと言われたことが少なからず堪えたのか、シンは小さくそれだけ言っつてその場を離れようとし

ふと、立ち止まった。商人を振り返り。

「真夜中の蛇って知ってる」

抑揚の無い声でそう聞く。

「……？ いや、なんだいそれは」

「夜は危ないから外に出ちや駄目って、新聞に書いてあったから」
商人は子供の冗談とでも判断したのか、気をつけるよと苦笑して
歩き去った。あとは、ただ、点々と足跡。

周りで遊んでいた子供達の姿も、道を歩いていた人たちさえ忽然
と姿を消し、家の中から息を潜めて
外を窺う気配がする。

”王”だからではない。もっと別の　　よそ者を、他者を拒絶
する何か。

雪の白が、映えている。一面を覆う、純白と、その下で息を潜め
る悪意。

シンか商人が”蛇”だと睨んでいるのだろうか。

その場はさつさと踵を返したシンの内心に、少しの焦りが生じた。

もし、ラクスが今夜も昨日と同じようにしていたなら、次に危な
いのはラクスではないか。そう思った。

自然と、早足になった。

三話

なのに、何度だって聞くんだ。あのひとは。

「シンは、どうしてあんな雪の中を歩いていたの？ 家族はいないの？」

「にげてた。かぞく……って、なに」

何度目かの質問に、シンはため息混じりに答えてから聞き返す。家族、という響きの言葉は少なくとも今まで聞いたことがなかった。

「シンを生んでくれた人とか、育ててくれたひととか」「知らない……いつのまにか一人だったから」

生活に必要なだけのことは知っていて、大して不自由なことは無かった。動物を狩るだけの運動能力もあつたし、人を狩って金を稼ぐだけの戦闘能力も十分だった。

……この、忌々しい黒髪と緑の目さえ隠せれば。

ラキスは失言だったかと口を噤み、ごめんなさいと呟いて俯いた。「そんなの、気にしない」

「えーと、えーと……もう、可愛げの無い子ね！」

ラキスが顔を赤くしていつもの調子に戻ったのがわかると、シンは少しだけ表情を和らげた。人の気配に気づいて、玄関を指差す。

ラキスは暫く何のことも量りかねているようだったが、チャイムの音に

振り返って走っていく。ちらりと彼を振り返ったその目に、少なくとも負の感情は浮かんではいなかったように思う。

シンは窓の外をしきりに確認していた。

しんしんと降っている雪はしかし、景色を隠すほどではない。外の風景には、誰もいないようであった。

あの商人はなかなか野心家のように見えだが、期待が外れたか。

ならば今日は諦めるべきか。

考え込んでいると、ぱたぱたと軽い足音と共にラキスが戻ってくるのが見えた。大きな黒い袋をどさりと台の上に下ろすと、少年に向かつて嬉しそうに笑う。

「大物のお肉が取れたんだって。今日は久々にここが食堂として機能するわ」

シンは暫く困惑した表情で、鼻歌を歌いながら大きな肉を皮袋から引きずり出す彼女を見上げていた。ラキスはシンが状況を飲み込めていないことを理解すると、ここは公共食堂なのだと付け足した。彼は、最初にこの台所を見たときから引つかかっていたこと真相がわかると、再び辺りを見回した。

この食堂がやけに広いのも。玄関が二つあるのも。食器が多いのも。全部、ここが共有のものだったからなのだ。そう思うと、昨日までの変な不信感が、いかに馬鹿らしかったかがわかる。きつと、まだ

他人への不信感が抜けないだけなのだ。怖がりすぎているだけなのだ。きつと。

今度は、今度こそは信じることも重荷にはならない。

夕食には、商人も招かれていた。

夕方になると村人たちが夕食の準備を手伝ってくれたが、女たちから厨房を追い出されると、苦笑いする男たちと話をし、撫でられ、小突かれたりしながら食卓を整えた。

フードを取りたくないと言うと無理に外さず、何の詮索もせずには笑う。そうしているうちに、どうもシンは人に見せられない大怪我を負っていることになったらしく、みんながきつと良い女が見つかるさ

とか、負けないで生きていけとか良くわからない慰めの言葉を言っ

た。

シンはそれが、嫌だとは思わなかった。

「ああもう！　なんで男つてのはこんなにながさつて大雑把なんだろうね！」

調理を終えたらしい、恰幅の良い女が声を荒げる。本気で怒っていなさそうな声に、笑いが起こった。どうも、テーブルクロスにシワが寄っているのが気に入らないらしかった。

「……………なんだろう」

「うん？」

いつのまにか隣に立っていたラキスが、シンの呟きを耳聡く拾うと、首をかしげる。

「なんか、なんだか。変な感じがする。嫌じゃなくって、もっとも」と

抑揚の無い声が、壊れた機械のように繰り返すそれは、どうも負の感情でないことを悟ると、嬉しそうに笑う。一方でシンは上手く言葉に出来ないのがたまらなく悔しかった。

「嫌じゃないのね？」

「うん」

「じゃあ、それで良いじゃない」

シンは頷くと、おずおずと歩を進め、椅子に座る。向かいの席では、商人が質問攻めに戸惑いながらも嬉しそうに、国の北部の様子やそこで起こった出来事を面白おかしく話していた。

「そりゃあもう、でっかい木が綺麗に真っ二つに割れてて……………お。

昨日のお嬢さんじゃないか？」

商人は彼に気づくと、親しげに笑いかけてきた。無表情でシンが頷き返すと、共に準備していた男たち

ちがぎよつとしてシンのほうに振り返った。

「お、女の子？」

「え……………男の子なんですか？　綺麗な顔してるからってっきり」

「ええ？　うそ、そうなの？　見せてよ」

女性陣も嬉しそうに立ち上がり、同時にその伴侶らしい男性陣が渋い顔でシンを見下ろした。

「いや！ 頼む、夫婦円満のために見せないでくれ」

突然自分が話題の中心になったのを悟ると、シンはフードを両手でずり上げて下を向き、押し黙る。こういう風景にはとことん無縁で、どう対処していいものかわからずにいる彼の周りで、可愛い、と嬌

声上がる。

「怯えてるわよ、やめましょうよ」

「本当にどつちなのかしら」

「いや、男だ」

「でも商人さんは顔を見てるんでしょう？」

「ぐ……」

「坊や、何にもしないから顔を見せて？」

「あはは、竦んでるって」

笑い声の中、内心右往左往するシンの目の前に、静かに細い手が置かれた。

「どつちでもいいじゃない。家の子を怖がらせるのはやめてくださる？」

しん、と場が静まり返る。

ラキスだった。

「お疲れ様だったね」

食器を洗いながらラキスが笑う。シンは机に突っ伏していた身体を起こし、肯いた。

「慣れてないんだ。話すの」

「そのうち慣れるよ。いい人ばかりだからね」

シンはその言葉を聞くと、影の差した瞳を下に向ける。

「最初は、誰だってそうだよ」

信用してもことごとく裏切られてきたシンにとって、それだけが真実で、それこそが紛れも無い人間の本質なのだろう。否、実際には、彼の見方のほうが正しいのかもしれない。

しかし、少なくともラキスはそう思っただけではなかった。

王も人も分け隔てなく接することが出来たなら。そう、思っただけだ。

「でも、そんな考えは悲しい。私はシンの味方になれない？」

ならないで。

その一言を、シンは飲み込んだ。

ならないで。信じることは、それでもまだおれにとって重荷だから。

言おうとした言葉が喉につつかえて、答えに窮すると、仕方なく踵を返して台所を後にする。後ろ手に扉を閉めると、その家の中では長めの廊下を見下ろしてため息をつく。

自分の部屋に戻る途中の窓の外、今夜もしんしんと降り、積もるであろう雪の中を歩く商人の姿を見つけると、誰にともなく頷いて早足になる。先ほどまでのように足音は立てないようにして、部屋に戻る。

するとベッドの横に置いてあった自分の荷物の中を漁る。硬質の、冷たい手触りにたどり着くとそれを取り出す。

”それ”と、この鞆だけは、自分を”おれ”として認識したときから既に持っていたものである。誰かから奪ったものかもしれないし、買ったものかも知れないが、覚えは無い。

短剣の、控えめな装飾の鞆だけを肩掛け鞆の中にしまい、上着とマントを羽織って窓を開け、外に出た。

短剣を抱え、足が沈む感覚を踏みしめながら、フードを深くかぶる。

時計塔の一番上までたどり着くと、息を潜めて蛇を待つ
き餌の、動向を見張りながら。 撒

「……ははは！ 本当に出やがった！」

何時ごろだろうか。突然そんな声を聞いて、時計塔の上で眠り込んでいたシンははっと顔を上げる。

身を乗り出すと、商人は誰かに向かって剣を突き出し、楽しそうに話しているのだった。相手の姿は良

くわからない。ただ、その相手というのが恐らく”蛇”に違いないと言っこと、そして商人がそれを捕まえようとしていることが見て取れた。

同時に、このままでは商人の命のほうに危ないと言っことも。

「お前が蛇か？ オレが合理的に換金してやるから、観念しろ！」
昼間の彼とは全くイメージが正反対である。こちらが素なのだろ
う。

蛇は何を考えてか、すぐに踵を返して走り出す。シンも慌てて隣の家の屋根に飛び移り、二人を追いかける。

一見蛇が逃げているようだが、実際に上から見ていると、商人が
どンドン込み入った道に誘導されていつているのがわかる。

「……駄目だ……！」

思わず、小さく声を上げた。

高い茂みの角を左へ、蛇が曲がる。一拍遅れて商人が曲がると、
そこには誰も居ない。間抜けな商人

があせって辺りを見回している間に蛇は背後から現れ、未だ狼狽している様子の彼の首にマフラーを巻きつけ。

締める気が！

「くそっ」

間に合うかと飛び降りようとしたシンの背後から、隠しもせず、

銃声。

思わず振り返った彼の、治りかけの左肩から血が噴き出した。その場でバランスを崩して倒れ、屋根から転げ落ちる。とっさの受身も失敗して中途半端に背中を強打、息を詰まらせた。誰の狙撃だ？

そもそも何で銃なんか。

ああ、そうか。商人が、売ったんだ。

左肩の痛みを耐え切れず短い悲鳴を上げて地面を転がり、うつぶせの状態を顔を上げるが、もうすでに二人の姿は無い。

「……………ッ」

シンは半ば以上雪に埋もれた身体を起こすことも出来ず、そのまま意識を手放した。

空が白んできた頃。やっと起き上がると、シンは重い足を広場のほうに向けた。そのほうがラキスの家に近いのだ。彼女が起きないうちに帰らなければ。雪に埋もれていたおかげで幸か不幸か感覚の無い

左肩を抑えて、よろよろと歩く。寒さの所為でか、頭もがんと痛んだ。

歩きたびに、さくりと音がした。

まるでラキスと会ったときのようなようである。

否。

心境はそれよりも苦しい。

なにをしてるんだ、おれは？

これまでも町や村に害為す者達をことごとく殺してみたが、金になるだけで彼の立場自体は何ら変わらないのだ。むしろ、その骸に自分の末路を見たような気がして、怖気が走る。

それとも、自分はこんなだろうか。

商人であったものが雪に埋もれているのを見て、はたと足を止める。すぐに考えを改めて歩き出し、また、立ち止まった。

「……………傷……………どうしょ、かな」

左肩を抑える右手に力が籠る。再び、歩き出した足取りは重く。

凍えるような南の地の空気は放射冷却も加わって尚冷たく、少年の細い身体を八方から刺すような痛みが襲う。

……………見殺すつもりでいた。

歩く速度が、速くなる。

……………殺す、つもりで。

もう一度、そんなことを考える。

あの時商人の背後から現れた”蛇”。

曲がった先ですぐに茂みの中に飛び込んだのだ。だから、商人には”見えなかった”。そしてその中で息を潜めて彼が通り過ぎるのを待ち、商人が通り過ぎた瞬間を狙ってそこを飛び出して、背後へ。そして、例のごとく絞殺する。

一連の行動にもし計画性があるのだとすれば、至極当然のことである。もう終わってしまったことをうだうだと考えていると、道にラキスが倒れているのが見えた。なんともいえない嫌な予感が頭を過ぎり、彼女に駆け寄ると傍らに座り込んだ。

「ラキス……………ラキス！」

体を揺さぶると、彼女はうつすらと目を開ける。どうやらシンの考えていたようなことは無かったらしい。彼女の頬には赤味が差していた。それを確認すると同時に肩の痛みまで思い出して、涙をした。

「……………なに、してるんだ……………」

「私はシンの笑った顔を見たことがないね」

ラキスは俯いて座り、黙り込んでいるシンの肩に丁寧に包帯を巻きながら苦笑した。

「わらう？」

「こーんな顔っ」

シンは満面の笑みを浮かべた彼女をちらりと見上げて、それからふいと目を逸らす。ラキスは残念そうにため息をつき、席を立った。そのまま歩き去ろうとする彼女の服を掴んで引き止め、シンは真っ直ぐにその青い目を見据えた。

「ラキスはどうしてあんなところに」

真剣な顔に驚いたようだったが、ラキスはそれを聞くと薄く笑んだ。

「シンが出て行くのが見えたから、心配で」

「いつ」

聞き返したシンの声は、震えていた。恐怖 何に對して？

困ったような顔をしているラキスの腕を掴むシンの手も、わずかながら震え。

あのおきおれはラキスが食堂にいる間に、反対方向の窓から出たのに？

「いつ……どこからおれが出て行くのを？」

ラキスが近くにあった棒 それも結構長さのあるもので殴りかかるうとするが、シンはとっさ

に身かわし、ラキスが再び棒を振り上げるのを見て、少年は齒軋りした。

ああ、そうか。認めたくなかったんだ。

そんなことを考えながら立ち上がると、扉を開け、廊下に出て食堂のほうに走る。

ラキスが”蛇”と共謀してるかもなんて、思いたく、無かったんだ。

どんなに頑張ってもやはり大人のほうが足が早いのか、すぐに彼

女の足音が聞こえ始める。

風を切る音。左肩から全身に凄まじい痛みが走る。倒れて悲鳴を上げるシンを棒は容赦なく殴りつけ、その先端が左肩の傷口を押さえつけた。

「忘れて」

静かな声と、同時に棒の先端が肩に食い込んで、声にならない悲鳴を上げる。

「忘れて！」

「ラキ……っ！」

たまらずに棒に添えた手も虚しく払われ、完全に気を失う直前、あの時もという思考が頭をよぎった。

砂嵐の向こう側。

やはりあの時も後ろから誰かに殴られ、倒れたのだと言うことを思い出していた。倒れて、気が付くとラキスに付き添われてここに居た。きっと今もそうなのだろう。

そして恐らく、そうして自分を核心に近づけないようにしている。自分の知っている範囲で思い出そうとしているうちに、目がさめた。

「……やっぱり」

ぼつりと呟いた部屋の中には、誰も居ない。

窓の外は暗く、既に夜のようである。後何回繰り返せばこの、同じことを繰り返す日々が終わるのか、考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675c/>

D i s t o r t S l e i g h t

2010年10月11日20時58分発行